令和６年度

研究くりた

研究主題

自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり

秋田県立栗田支援学校

目　次

◇はじめに　校　長　佐々木　孝　紀

◇全校研究 ---------- １

◇小学部研究 ---------- １０

◇中学部研究 ---------- ２５

◇高等部 普通科研究 ---------- ４０

◇高等部 総合サービス科研究 ---------- ５１

◇寄宿舎研究 ---------- ６５

◇資料　研究のあゆみ ---------- ７３

◇おわりに　副校長　神　部　守

はじめに

新型コロナウイルス感染症の５類移行に伴い、学校も以前の生活に戻り、児童生徒の元気な声が学校中に響き渡り、地域との学習も活発に行われるようになりました。また昨今、社会の変化のスピードが一層速くなり、将来、社会の中で生きていく児童生徒に必要とされる力も変化しつつあります。そのような中で、学びを保障し、将来の自立と社会参加を実現していくために必要な力をつける教育を学校全体で真剣に考えたことは、あらためて今後の学校の教育課程を考え直す良い機会となりました。

特別支援学校の学習指導要領については、小学部・中学部・高等部、すべてにおいて全面実施となり、より一層改定の基本的な考え方を踏まえて、確実に実施することが求められています。また、令和３年１月には、中教審答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～ 全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現 ～』が出され、目指す共生社会の実現に向けて、地域で豊かに生きていく力を育成するために、思考力・判断力・表現力の学力の三要素を大切にし、開かれた教育課程を具体化していく実践が必要とされています。それを実施していく教師の姿としては、変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けること、子供一人一人の学びを最大限に引き出す役割を果たすことなどが示されております。

今年度の研究は、研究主題、『自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり』と題して３年間の研究のまとめの年に当たります。昨年度までは、学校教育目標に沿った「各学年で目指す姿」を基に、キャリア教育の視点で学部間・学年間のつながりを確認し、個別最適な学びと地域の特性を生かした活動等による協働的な学びを意識した単元計画や学習活動、実態に応じた支援の工夫等による授業づくりを行い、「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイント」を導き出しました。そのポイントを生かした授業づくりを行い、児童生徒の学びの丁寧な見取りの大切さを確認しました。

そして、今年度は、教師同士の対話の充実をもとに個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることで、自ら学び続ける子どもの育成を目指す授業実践研究を継続しました。公開研究会を実施したことにより、多くの方から貴重なアドバイスをいただきました。研究のまとめとして、「自ら学び続ける子どもの姿」が明確になり、児童生徒理解や意図を明らかにした授業づくりなど、今後、教師が大切にしていくべきことが再確認できました。これからの変化の激しい不透明な時代に、教師が子供を大切にし教育活動を行っていくために必要なことにあらためて気づかされました。この研究は今年度で終わりますが、成果と課題を整理し、次年度以降の新しい研究に生かしてまいります。

本校の実践研究において、たくさんのご指導・ご助言をいただきました秋田大学教育文化学部、秋田県教育庁特別支援教育課の先生方を始め、日頃から本校教育活動にご理解、ご協力を頂いている皆様方には深く感謝申し上げると共に、この場を借りて御礼申し上げます。

校　長　　佐々木　孝紀

全校研究

自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり（３年次計画／３年次）

１　主題設定理由

（１）学校の現状から

本校の児童生徒数は 266 名(小学部 78 名、中学部 71 名、高等部 117 名)、職員数も 150 名を超え、秋田県内一の大規模校である。各学部の学年集団も大きく、多様な学習集団の中で活動を展開することができる。そのため、児童生徒の所属意識や仲間意識が高まりやすく、児童生徒同士の関わり合いや学び合いが期待できると考える。

本校には、自宅からだけでなく、寄宿舎、障害児施設、児童養護施設からの通学生も多く、多様な背景をもつ児童生徒が在籍している。また、児童生徒が抱える困難さも多様化している。生活全般に介助を要する児童生徒、情緒の安定やコミュニケーション、集団参加に課題がある児童生徒をはじめ、不適応行動や生徒指導上の問題を有する児童生徒も少なくない。成功体験の少なさや自己肯定感の低さ、学習活動への不安から、自ら学習に向かう意欲が低い児童生徒もいる。

また本校は、知的障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育を行い、それぞれの自立と社会参加を目指すことを教育目標とし、開校当初から学校周辺の地域との日常的な関わりを大切にしている。本校の特色ある教育活動の一つである「地域学習」では、日常の学習のねらいを達成するために、地域を学習の場や教材として活用する取組を展開している。新型コロナウイルス感染症の５類移行に伴い、これまで活動を制限していた地域行事への参加や、学校周辺の環境整備、地域の学校や施設との交流活動などが以前のように実施されるようになった。そこで、地域活動を実施することだけが優先されてしまうことのないよう、学習のねらいをしっかり整理し、多様な人々との関わりが児童生徒の学びの充実につながるような授業づくりの在り方を考えていく必要がある。

（２）これまでの研究から

令和３年度は「一人一人の学びに応じた教育課程の工夫・改善～学んだことを活用・発揮できる児童生徒の育成を目指した授業づくりを通して～」をテーマに研究を行った。学校教育目標と日々の授業とのつながりを意識し、教科横断的な視点で授業づくりができるよう「目指す姿と学習内容の一覧」と「単元配列表」、「単元計画案」の作成に取り組んだ。教育課程を核とした教師同士の協働が図られ、児童生徒の多様な教育的ニーズに応じた授業づくりが実現し、教育課程全体で児童生徒を育てるという意識が高まった。一方で、この取組を継続していくシステムづくりと、学部を超えた系統的な学習の積み重ねや社会とのつながりを意識した学習活動について課題が残った。

令和４年度からは、学校の現状、児童生徒の実態に加えて、中央教育審議会「令和の日本型学校教育の構築を目指して（答申）」に示された「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められている」ことを踏まえて、研究主題を「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり」とした。１、２年次は、前研究の課題を踏まえ、また本校が取り組んできた地域学習の活用についても改めて考えていく機会と捉え、「～協働的な学びの充実を通して～」を副題として研究を進めてきた。しかし、これから示す１、２年次の研究の取組や成果、課題を踏まえ、協働的な学びの充実だけでなく個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り授

業改善をしていくことが重要であると考え、３年目は副題を改め「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり」をテーマとして研究を進めていくこととした。

２　研究の目的

・多様な他者との関わりの中で、よりよい考えを生み出したり、よりよい自分の在り方を考えたりする「自ら学び続ける児童生徒」の育成を図る。
・学校全体のキャリア教育の視点から、各学部・各学年で目指す力のつながりを確認し、小学部・中学部・高等部を通して系統的で発展的な学びを積み重ねる。
・これまでの研究の成果や本校の地域学習のねらい及びこれまで続けてきた地域学習の成果と課題を踏まえ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、授業改善へとつなげる。

３　研究仮説

キャリア教育の視点に立った系統的で発展的な学びの積み重ねと、これまでの研究の成果及び学校内外の資源を活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図った授業づくりを通して、授業改善が図られ、自ら学び続ける児童生徒の育成が図られるであろう。

４　１年次の取組と成果と課題

（１）資質・能力の育成を目指した指導計画の立案と児童生徒の姿を通した評価・改善

令和３年度の成果を受け、「学校の教育目標」、「学部目標」を各学年の児童生徒の目指す姿として具体化し、共有した。さらに、各教科等で学ぶ内容や育成される資質・能力、学習活動との関連を学年職員で確認し、年間指導計画の作成に役立てた。また、具体的な児童生徒の姿を通して各学年の「育成を目指す資質・能力」について、具体的な評価場面や評価規準を設定して、夏季休業中、冬季休業中、年度末と年３回の学年会を実施し、定期的に評価・改善を図った。このことから、学校の教育目標、学部目標を根拠とした個々の児童生徒の目指す姿の設定や、学校の教育目標と日々の授業とのつながりを明確化していくことができ、児童生徒の目指す姿を見据えた教育課程を支えるマネジメントサイクルの構築が図られた。

（２）「キャリア教育で育成したい資質・能力」の視点から学年間・学部間の指導内容のつながりの確認

キャリア教育の視点で「目指す姿」の学部間のつながりについて共有するため、全校縦割りグループでの話合いを３回実施した。学校の教育目標とキャリア教育とのつながりを確認する中で、学部間で共通している「育成を目指す資質・能力」や、それに向けて各学年でどんなことに取り組んでいるのかを共有し、学部間で共通する力について導き出した。

（３）協働的な学びの充実に向けた単元計画や学習活動の工夫・改善

各学部の授業づくりにおいて、「協働的な学び」についての職員間の意識の共有と、「協働的な学び」の充実に向けた単元計画や学習活動の工夫と改善を行った。学部内授業研究会は、事前授業検討、提示授業の参観、授業協議で構成し、学部職員全体で授業について検討する機会を多く設けた。各学部の実践から、自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりについて、大切なポイントをまとめることができた。

（４）課題

・各学部の授業実践と「自ら学び続ける子ども」の具体的な姿とのつながり

・教師同士が互いに学び合える授業研究及び授業研修の在り方

５　２年次の取組と成果と課題

（１）「自ら学び続ける子ども」と、授業における児童生徒のねらいとのつながりの明確化

１年次の成果である「学部間で共通する力」と各学部の授業実践における児童生徒の姿から、本校で考える「自ら学び続ける子ども」をより具体的な姿として全校に提示した（図１）。また、授業における児童生徒のねらいとのつながりを意識できるよう、授業の中で教師が期待する子どもの思いに着目し（図２）、そのような思いを引き出すための学習活動や単元計画、支援の工夫について対象児童生徒を抽出し検討した。対象児童生徒を設定したことで、児童生徒の行動や発言、表情など、具体的な姿をイメージして検討することができ、対象児童生徒の自ら学びに向かう姿が増え、学習への主体性が高まった。

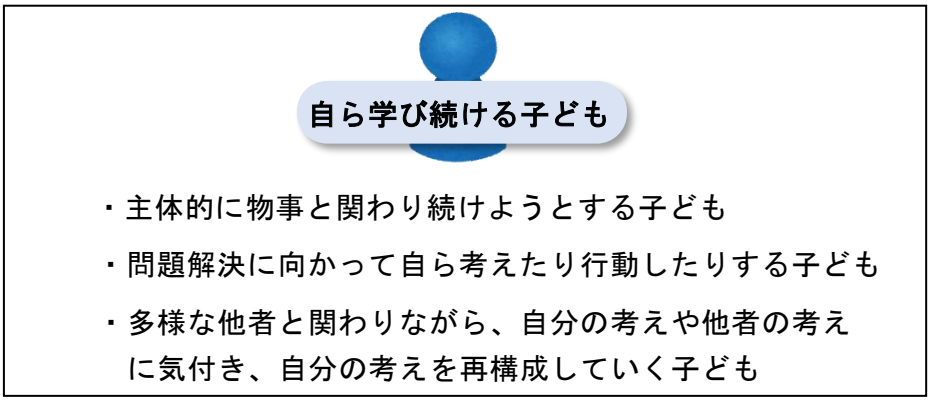


図１　自ら学び続ける子どもの具体的な姿

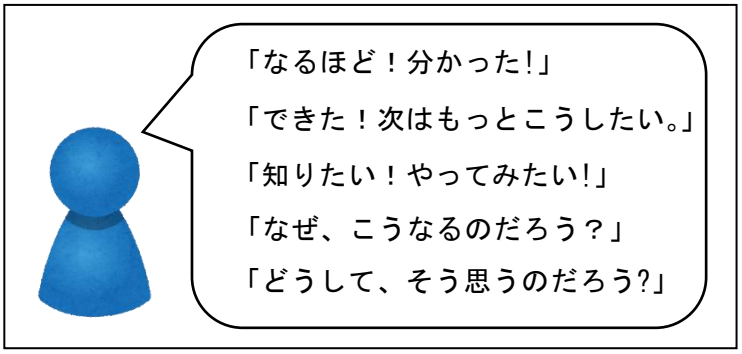


図２　授業の中で教師が期待する子どもの思い

（２）自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイントの活用

１年次の成果を基に、「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイント」を図３のようにまとめた。各学部の授業づくりの中で、事前検討に活用し、指導案の「指導について」という部分に反映させた。ポイントを活用することが目的とならないように、授業を通して育てたい力は何かを十分検討し、必要な活動や手立ての工夫はあるか、授業づくりのポイントを活用して広い視点で考えられるように留意した。単元計画全体や本時の授業のどの場面で、どのようにポイントを活用するかを考えることで、児童生徒の期待する姿に対する手立てが精選された。

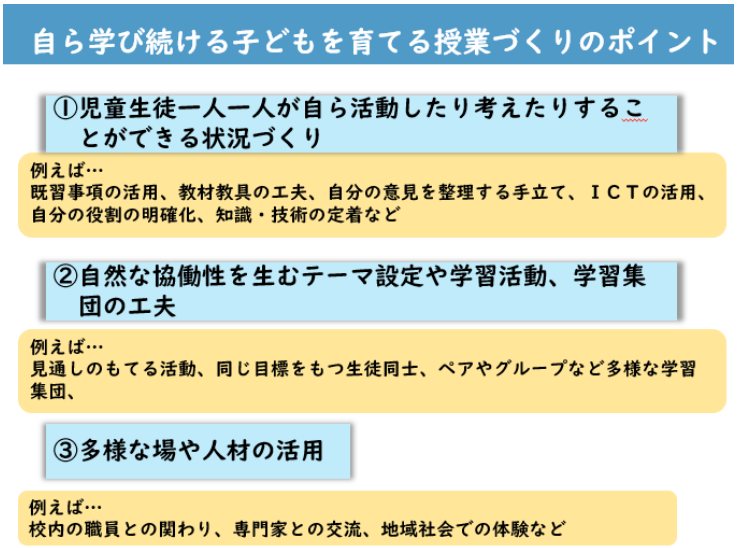


図３　自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイント

（３）児童生徒の姿を基に、教師同士の対話を通して学びを丁寧に見取る評価の積み重ね

これまでの研究で取り組んできた「学ぶ姿に着目した授業研究」に重点を置き、「期待する姿」を基に、児童生徒の発言や行動から学びを丁寧に見取ることを継続した。２年次は、授業協議だけでなく、各学部での事前授業検討や授業シミュレーションでも対象児童生徒の学びに着目し、教師同士の対話を通して、児童生徒のねらいの妥当性や単元計画や学習活動、支援の工夫について検討した。映像を活用した学びの見取りや、授業シミュレーションを通した具体的な授業場面での学びの見取りなど、教師同士が対話を図れるよう、学部研究日や授業研究会を利用し、各学部の実情に合わせた方法で対話の機会を多く設定した。月１回の学部研究日、事前検討会、授業研究会などを通して、児童生徒の実態を共有し、授業中の発言や行動に着目することで、対象児童生徒の学びを見取る教師の姿勢が高まった。

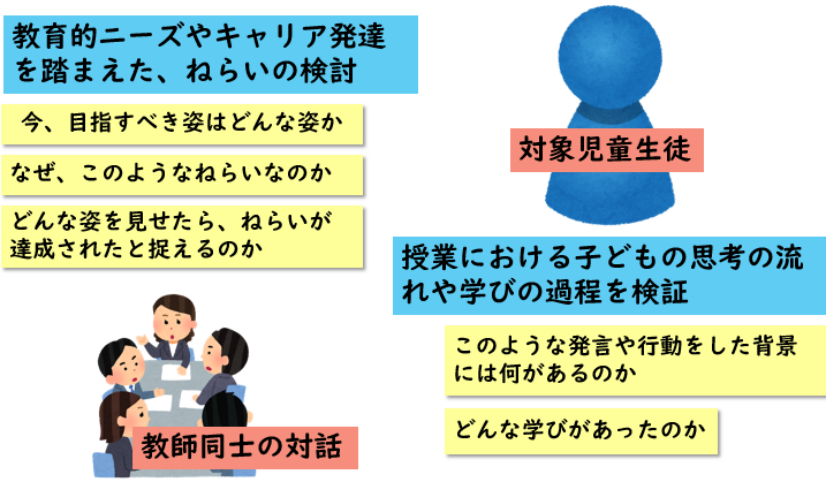


図４　対象児童生徒についての教師同士の対話の内容

（４）課題

・各学部の課題に基づいた授業実践の充実

・教師同士の対話の充実を図った授業改善

６　今年度（３年次）の研究の内容と方法

（１）各学部の課題に基づいた授業実践の充実

①児童生徒の発達段階に応じた「自ら学び続ける姿」を目指した授業づくり

昨年度の各学部の課題に基づき、今年度は全校研究テーマの副題として各学部で目指す姿を設け、授業実践の充実を図る。

②児童生徒の学びの過程を大切にした授業づくり

児童生徒の興味や関心、設定したねらいの妥当性、手立ての検討など、事前検討会やシミュレーション、授業研究会を含めたＰＤＣＡサイクルに基づいた授業づくりを行う。児童生徒の学びを見取る教師の姿勢が高まってきた昨年度の成果を踏まえ、活動の中で何をどのように学び、学んだことをどう活用するのか、児童生徒の学びの過程を具体的にイメージしながら授業づくりを進める。

（２）教師同士の対話の充実を図った授業改善

①児童生徒の実態や目標、学習活動など授業づくりについて話し合う内容を細分化したスモールステップでの事前検討

研究授業を中心に、研究部がコーディネーターとなり、スモールステップでの事前検討を計画する。話合いのメンバーや内容を具体的に示し、段階を踏んだ検討を重ね、授業改善につなげる。

②自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイントを活用した授業協議

１、２年次の研究成果である「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイント」を活用し、授業協議を深める。

７　研究の実際

（１）各学部の課題に基づいた授業実践の充実

①各学部で目指す「自ら学び続ける子どもの姿」

自ら学び続ける子どもの姿を、各学部の授業実践とより関連させて考えることができるよう、昨年度の各学部の課題に基づき、全校研究テーマの副題として表１のとおり各学部で目指す姿を段階的に設けた。

全校研究テーマ	「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり」
小学部	～「やりたい」「できた」「もっとやってみよう」と児童が感じ、自ら取り組もうとする姿を目指して～
中学部	～生徒が学びを実感し、自ら考えたり、行動したりする姿を目指して～
高等部普通科	～互いに学び合い、自分や他者の考えに気付き、行動する姿を目指して～
高等部総合サービス科	～生徒が自ら気付き、考え、学びを表現する姿を目指して～

表１　各学部で目指す「自ら学び続ける子ども」の姿

②児童生徒の学びの過程を大切にした授業づくり

児童生徒の学びの過程を大切にした授業づくりを目指し、事前検討会、シミュレーションを含めたＰＤＣＡサイクルで進めた。事前検討会では、児童生徒の学びの姿に着目するため、各学部の目指す姿である「学び合う姿」や「学びの実感」などを、研究対象授業における児童生徒の具体的な姿として共有した。また、児童生徒の興味関心や生徒から出た問いを踏まえ、各学年で育てたい力を確認し、何をどのように学ぶかを検討した。授業シミュレーションでは、提案授業の本時の学びについて、めあてとまとめの整合性や、めあてに迫るための教師の手立ての意図を確認し、児童生徒の学びの姿のイメージを職員同士で共有した。授業協議でも、児童生徒の学びの姿を根拠に手立ての有効性や改善点を考える方法が定着してきた。

また、寄宿舎研究においても、生徒同士の学び合いや体験的な活動を通した生活指導を継続し、学んだことを伝え合う機会や生徒からの問いを取り入れた学習会を検討し進めた。

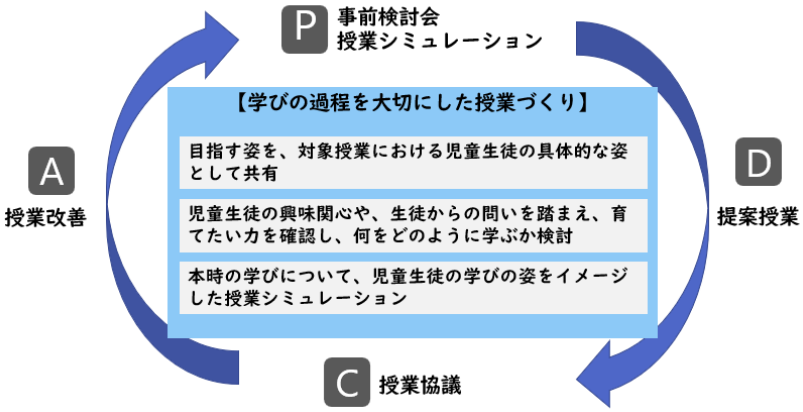


図５　児童生徒の学びの過程を大切にしたＰＤＣＡサイクル

（２）教師同士の対話の充実を図った授業改善

①話し合う内容を細分化したスモールステップでの事前検討

提案授業を中心に、研究部員がコーディネーターとなり、教育専門監や自立活動コーディネーターも交え、複数の事前検討会を計画した。児童生徒の実態や目標については学年集団で検討したり、この授業でどんな力を育てたいかが明確になるように授業者と学部主事、教育専門監を交えた小集団での検討会を行ったりした。小・中学部では学部研究日を活用した授業検討会を実施し、単元で目指す姿や学習活動について共有した。高等部では、普通科で授業共有シートを活用し、学年の取組を学部で共有する仕組みを考えたり、総合サービス科で外部講師を活用し定期的に指導方法に助言をもらったりした。それぞれの学部・学科の現状に応じて取組の工夫を図り、子どもの実態や目標、学習活動など授業づくりについて話し合う内容を細分化したスモールステップでの事前検討を行った。

②自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイントを活用した授業づくり

１、２年次の研究成果である「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイント」を活用し授業づくりを進めた。特に全校授業研究会では、全校職員が学部を超えて同じポイントに沿って授業協議を行った。付箋には、子どもの学びの姿とその姿が見られた要因を書き、授業の手立てがどのポイントから考えられたものなのかを仕分けした（図５）。有効だった手立て

がまとめられたとともに、授業改善につながる新たな手立ての視点に気付くことができた。また、協議の後半では全体共有の時間を設定し、グループ協議で挙がった改善案を提示し、学部全体でどのような意見が多く、どのような手立てがポイントとなったのか、共有するようにした。

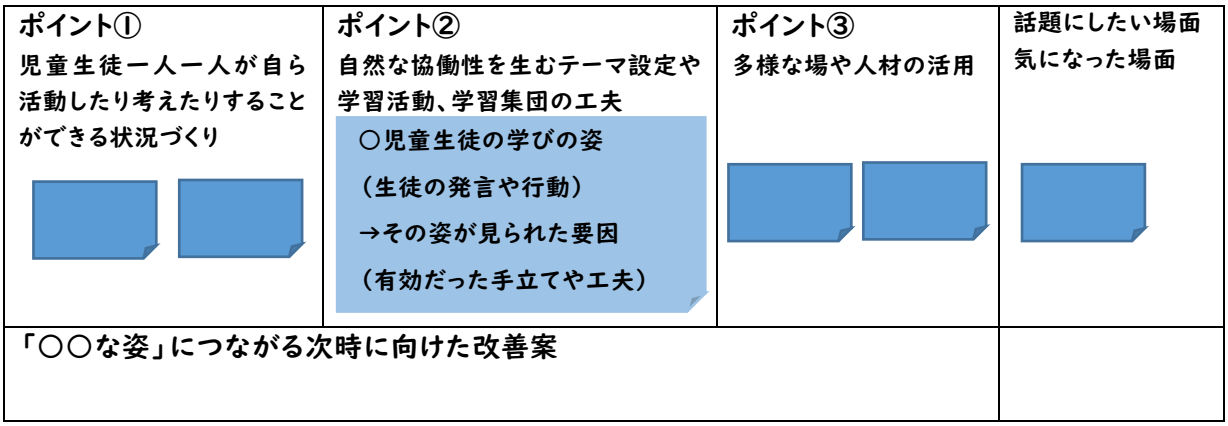


図６　全校授業研究会　授業協議シート及び付箋の書き方

（３）研究の日程

月	学部研究会	研究全体会及び全校授業研究会
4		２４日(水) ○研究全体会 ・研究の方向性の確認
5	２９日（水） ○今年度の学部での取組について説明	１３日（月） ○全校授業研究会事前検討会（高等部総合サービス科）
6	学部で設定 ○研究テーマに沿った授業づくりの検討	３日（月） ○全校授業研究会事前検討会（小学部） ２８日（金） ○全校授業研究会（小学部授業提示・協議） 指導助言者：飯塚正純　教頭
7	１７日（水） ○研究テーマに沿った授業づくりの検討 ２９日（月） ○研究経過の共有	１０日（水） ○全校授業研究会（高等部総合サービス科授業提示・協議）指導助言者：神部守　副校長 ２３日（火） ○全校授業研究会事前検討会（中学部）
8		２２日（木） ○全校授業研究会事前検討会（高等部普通科） ○研究全体会 ・各学部の研究経過報告
9	１１日（水） ○研究テーマに沿った授業づくりの検討	３日（火） ○全校授業研究会（中学部授業提示） ４日（水） ○全校授業研究会（中学部授業協議） 指導助言者：田中紀和　教頭
10	３０日（水） ○研究テーマに沿った授業づくりの検討	４日（金） ○全校授業研究会（高等部授業提示） 指導助言者：神部守　副校長 ８日（火） ○公開研究会事前研究会（中学部） 指導助言者：秋田大学教育文化学部　准教授　鈴木徹氏 １１日（金） ○公開研究会事前研究会（高等部普通科） 指導助言者：神部守　副校長

		１８日（金） ○公開研究会事前研究会（小学部） 指導助言者：秋田県立支援学校天王みどり学園 教諭（兼）教育専門監　小野直子氏 ２３日（水） ○公開研究会事前研究会（高等部総合サービス科） 指導助言者：株式会社　友愛ビルサービス　冨谷茂樹氏 神部守　副校長
11	１５日（金） ○研究テーマに沿った授業づくりの検討	
12	１８日（水） ○研究テーマに沿った授業づくりの検討	４日（水） ○公開研究会 指導助言者 小学部：秋田県立支援学校天王みどり学園 教諭（兼）教育専門監　小野直子氏 中学部：秋田大学教育文化学部　准教授　鈴木徹氏 高等部普通科：秋田県教育庁　特別支援教育課 指導主事　阿部圭但氏 高等部総合サービス科：株式会社　友愛ビルサービス 冨谷茂樹氏 秋田県教育庁　特別支援教育課 指導主事　後松慎太郎氏 寄宿舎：秋田県立大曲支援学校　教頭　北島英樹氏
1	１０日（金） ○今年度の取組の成果と課題についての共有	２２（水） ○研究全体会 ・全校研究及び学部研究のまとめの報告
2	２５日（火） ○来年度の取組についての検討	

８　まとめ（成果とこれからに向けて）

（１）「自ら学び続ける子ども」に向けた各学部等で目指す姿のつながり

「自ら学び続ける子どもの姿」を、より具体的な目指す姿として設定し、授業実践を進めてきた。小学部がテーマとした「自ら取り組もうとする姿」から始まり、中学部でテーマとした「自ら考えたり、行動したりする姿」、寄宿舎や高等部で目指した「自分や他者の考えに気付き、行動したり学びを表現したりする姿」まで、学部・学科、寄宿舎で目指してきた姿につながりが見らえた。この姿を「自ら学び続ける子どもの姿」に必要な要素としても捉えることができると考える。

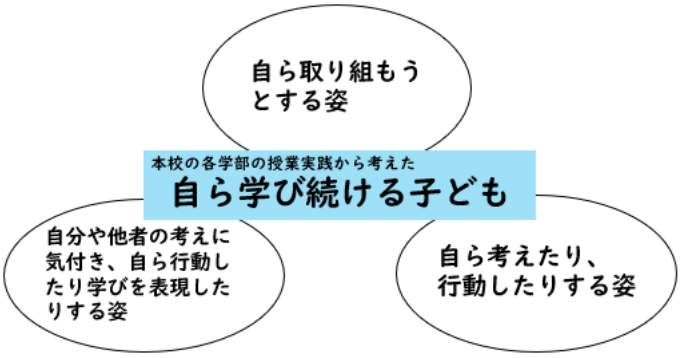


図７　本校の授業実践から考えた「自ら学び続ける子ども」に必要な要素

（２）自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりに必要な視点

１年次の取組の成果から導き出した「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイント」を全校に提示し活用してきた。授業検討や授業協議に活用したことで、各学部の成果にあるように自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりという視点で支援方法の整理ができた。ポイントとしていた「児童生徒一人ひとりが自ら活動したり、考えたりすることができる状況づくり」の必要性と、「多様な他者との協働的な学習の有効性」など、研究仮説であった児童生徒一人一人のできる状況づくりを整えて、仲間や異学年、地域と関わりながら学ぶ「個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させること」が授業づくりに必要な視点であることが分かった。

そして、「分かった」「できた」という達成感がもてる活動になっているか、この活動で何のために何を学ぶのかを明確にできているか、という確認も大切であることを再確認できた。

さらに、自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイントを活用し、授業づくりを進めていくためには、自分の考えや思いを安心して表現し合える信頼できる学習集団があること、多様な場や人材を活用した学習を通して、教師が学びの価値付けをしていく習慣ができていることが必要であり、その大きな前提として、より多角的な視点からの児童生徒理解が重要であると考える。

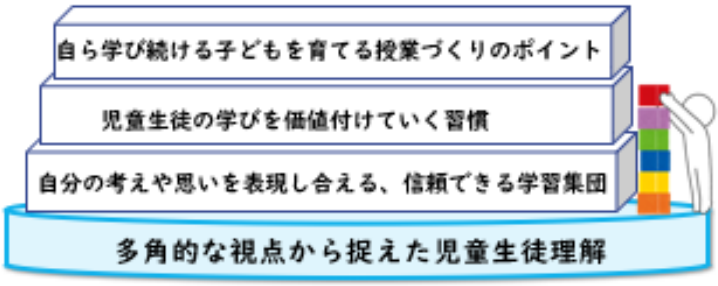


図８　自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりに必要な視点

（３）確かな児童生徒理解を基にした授業づくり

３年にわたって「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり」に取り組んできた。児童生徒の学ぶ姿に着目し、自分たちの授業実践から「自ら学び続ける子どもの姿」や「授業づくりのポイント」を導き出して進めてきた。「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり」を通して、児童生徒の生活が将来に向かってより豊かになるように、今現在の児童生徒に何が必要か、学校の授業づくりでできることは何かを考えることができた。本研究では、教師同士の対話を充実させ、複数人の視点から子どもの学びの見取りを行ってきた。しかし、児童生徒の興味関心、学びに向かう気持ちは様々であり、それを見取り、今どんな学びが必要なのかを検討するためには、教師の思いだけでなく、児童生徒の思い、障害特性の理解など、より多角的な視点からの児童生徒理解が大きな土台としてあることが重要であると考える。今後も、教師同士の対話を大切にしながら、より広くきめ細やかな視点で捉えた児童生徒理解に基づき、手立ての意図を明らかにした授業づくりを進めていきたい。

小学部研究

小学部研究
～「やりたい」「できた」「もっとやってみよう」と児童が感じ、自ら取り組もうとする姿を目指して～

１　学部研究テーマ設定理由

これまで小学部では、全校研究テーマにある「自ら学び続ける子ども」を「『自分で』『自分たちで』『誰かのために』活動する子ども」と捉え、研究に取り組んできた。小学部の児童の実態として、児童によって関わり方の幅はあるが、友達を意識し、一緒に活動しようとする姿が見られる。また、見通しをもつことで、自分で活動に取り組んだり、役割を果たそうとしたりすることができる。さらに小学部ではキャリア教育の充実を目指して「誰かのために」「役に立つ経験」を積み重ねる機会の設定を重点項目に挙げている。以上のことから、１年目は日常生活の指導において、「自分で」「自分たちで」「誰かのために」をキーワードに授業改善を積み重ね、授業の充実を図った。２年目の昨年度は遊びの指導と生活単元学習を研究対象授業とし、授業づくりのポイントの活用とともに、授業を撮影した動画を活用して複数の教師で児童の学びの見取りを行い、その評価を次時からの授業に反映することで、主体的な児童の姿を引き出すことができた。

しかし昨年度の課題として、教師がねらいや学習活動を「自分で〇〇してほしい」というような教師の期待する視点で設定しており、児童の「やりたい」という気持ちとのずれが生じてしまっているのではないか、ということが挙げられた。

そこで今年度は、学部研究テーマを「『やりたい』『できた』『もっとやってみよう』と児童が感じ、自ら取り組もうとする姿を目指して」とした。遊びの指導と生活単元学習において、児童の「やりたい」という気持ちと、教師が育てたいと考える力を丁寧にすり合わせ授業づくりを行うことで、児童が十分に満足感、達成感を味わい、「もっとやってみよう」という意欲をもち自ら次の学びへ向かおうとする主体的な姿を引き出すことができるのではないか。児童が達成感を得て、自分から次の学びへと向かう経験を積み重ねることで、児童が自ら学び続ける姿へとつながっていくのではないかと考え、本テーマを設定した。

２　研究仮説

「やりたい」「できた」「もっとやってみよう」と感じ、自ら取り組もうとする姿を目指し、児童の「やりたい」という気持ちと、教師が育てたいと考える力をすり合わせた活動を設定し、授業づくりのポイントを生かした授業づくりをすることで、自ら学び続ける児童の育成が図られるだろう。

３　取組の実際

（１）「やりたい」「できた」「もっとやってみよう」と児童が感じ、自ら取り組もうとする姿を目指した授業実践の充実

①教師が育てたいと考える力と児童の興味・関心をすり合わせた指導計画の立案

学年で、児童の実態から身に付けさせたい力や具体的な行動を検討し、「学年で目指す姿（育てたい資質・能力）」の表を作成した。さらに、その学年の児童一人一人の「好きなこと」をまとめた表と合わせて、今年度の遊びの指導や生活単元学習の学習内容や学習計画を検討した。学年会の機会を活用し検討することで、児童の目指す姿を共有するとともに、学習内容や支援の方法について妥当性を高められるようにした。

②単元を見合う会の実施

低学年、中学年、高学年それぞれの教師を縦割りにして小グループを作り、遊びの指導と生活単元学習の年間指導計画を見合う会を行った。「学年で目指す姿（育てたい資質・能力）との関連」、「児童の『やりたい』という気持ちが反映されているか」について、他学年の教師の視点から意見交換を行った。参加した教師からは、「指導について新たな発想が得られた」、「近い学年同士で交流をするなど、つながりを大切にしたいと再認識した」といった肯定的な意見が挙げられた。

（２）教師同士の対話の充実を図った授業改善

①全校授業研究会

第５学年　単元名「Ｇｏ！５！キッチン戦隊クックリン！」６月 28 日（金）

本単元は、児童たちの興味・関心が高い調理活動を学習の中心とし、児童が調理の工程を覚え、自分の役割に主体的に取り組むことをねらいとし、児童の「やりたい」という意欲を喚起できるように、児童の好きなテレビ番組を模した内容を取り入れた。授業づくりのポイントとして、児童が「自分で」「自分たちで」活動に取り組むことができるよう、調理工程を簡略化し、児童同士で役割分担して調理を行うようにした。「誰かのために」役立つ経験を積むことができるように、調理の最後には自分たちで作った料理を身近な友達や教師にふるまう機会を設定した。本時は、じゃがいもを使ってフライドポテトとスイートポテトを作る活動に取り組んだ。

１）事前授業検討から

グループ協議では、「テーマソングやポーズなど、テレビ番組と結び付けた要素をもっと取り入れてはどうか」、「スキルアップしたらバッジがもらえるなど、児童にとって分かりやすい『できた』（ゴール）があるとよいのではないか」といった提案が挙げられた。また、「誰かに喜んでもらうために作る」という児童にとっての必要感があるとよいのではないか、という助言をいただいた。そこで次の点について授業改善を行った。

・テレビ番組の要素を生かし、児童が意欲を高め達成感を得ることができるように、「クックリンバッジ」（写真１・２）を用意する。学習の目標を達成するごとにバッジにシールを貼っていく。

・試食をした教師から味の感想や要望をもらい、児童へ「次への改善点」として提示する。

写真１・２　クックリンバッジ（意欲付け）

写真３　ペアで協力して取り組む

２）授業協議から（自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイントを活用した授業協議）

ポイント①	児童生徒一人一人が自ら活動したり考えたりすることができる状況づくり
・役割分担表や手順表の提示、繰り返しの活動により、児童が自分の役割が分かって自ら取り組んでいた。 ・調理道具が分かりやすく配置されていたことで、必要な道具を児童が自ら用意できた。	

ポイント②	自然な協働性を生むテーマ設定や学習活動、学習集団の工夫
・ペアの設定が良かった。自分たちで活動し、自然な協力が生まれていた。（写真３） ・友達の様子が見える座席配置により、期待感をもって自分の順番を待ったり、自分から「友達と同じ役割をしてみたい」と発信したりした児童がいた。	
ポイント③	多様な場や人材の活用
・試食した教師からの動画メッセージにより、児童が「今回の調理で気を付ける点」を分かって活動できていた。	
次時に向けた手立ての工夫	
・食べたい味やトッピングについてアンケートや注文を受けて作るなど、児童の意見を反映させたらどうか。 ・達成感を得るために、調理中に味見をし、味を調整する時間を設定するのはどうか。	

３）指導助言から

・児童の好きなテレビ番組を模した単元設定や身近な人に料理をふるまう機会の設定が、児童たちの活動への期待感となっている。

・授業づくりのポイントである「自ら活動したり考えたりすることができる状況づくり」の工夫がたくさんあった。教師の働き掛けがなくても、児童たちが自然に声を掛け合い、協力して活動する姿が随所に見られた。教師の言葉掛けをもっと控えてもよい。

・「できた」という達成感を味わう場面が少し足りないように感じられた。以前より上手になったことやできるようになったことは、児童たち自身も「できた」と実感できるようにしたい。

＜全校研における学部研究テーマと関連するキーワード＞

「自分で」　「自分たちで」　「『できた』という達成感」

②事前授業研究会

第３学年　単元名「ぐんぐんチャンネル　ユーチューバーになろう①」10 月 18 日（金）

本単元では、児童の興味関心が高いタブレット端末を活用し、動画制作を中心とした活動を行った。児童が自分のやることが分かり、活動に期待感をもって取り組んだり、自分の考えや思いを身近な友達や教師に対し表現しようとしたりすることをねらいとし、「自分で」「自分たちで」活動できるように、撮影の他に動画で使う小道具や背景制作など個々の実態に応じた様々な活動を設定した。さらにおそろいのＴシャツを作って着用したり、ぐんぐんチャンネルのポーズを全員で行ったりすることで、一体感を高める工夫をした。また、「誰かのために」役立つ経験を積むことができるよう、完成した動画を家族に披露し感想をもらうなど、いろいろな人から認めてもらい達成感を味わう機会を設定した。本時は、２グループに分かれて、背景に使う題字の装飾をしたり、オープニング場面を撮影したりする活動を行った。（写真４）

１）事前授業検討から

事前授業検討では、単元構成や学習活動の工夫のほか、「児童が『できた』という達成感を得ることができるための手立てについて」という点を中心に協議を行い、以下のような意見が挙げられた。

・教師が求める児童の姿を明確にすることが大切である。それにより児童が「できた」と感じる姿が具体的になり、手立ても具体化するのではないか。

写真４　役割分担して撮影する

・評価の仕方を工夫できるとよい。「楽しかった」だけで終わらないような工夫があるとよい。

２）授業協議から

＜児童について＞

・児童たちが学習に対し期待感をもっていることが分かった。お互いの様子を見て行動したり協力しようとしたりしていた。

・児童が自ら行動できるきっかけとなるような、児童の動きを引き出す教材や、安心して話せるような視覚的な支援があればよい。

＜「できた」という達成感について＞

・児童一人一人の頑張るポイントを決め、毎時間達成したら「いいねシール」を貼るなどの工夫があると、個々の「できた」の積み重ねが見えるのではないか。

３）指導助言から

・授業の中で児童たちが何を学ぶのか、児童たちに何を身に付けさせたいのかを具体的に肉付けしていくことが大切である。関連する教科の目標や内容について、学習指導要領を参考にしながら整理し、単元を通して児童たちが学ぶ内容を具体的に検討することが必要である。

・単元を通して児童たちのゴールは何になるのか。「誰かのために」という研究のキーワードがあるが、その中には「自分のために」「自分たちのために」というものも児童たちの実態や発達の段階に応じて必要になってくる。自分たちで活動を十分に楽しむことで、他の人にも楽しんでもらいたいという気持ちが生まれるのではないか。児童たちの思考の流れを大切にしてゴールを設定し、単元を展開していくことが必要である。

４）授業改善に向けて

・次単元は、活動に取り組む意欲付けや、学習活動を展開するキーマンとして、学級外の人物からの依頼を受けて動画制作に取り組むという形にする。

・単元を通して目指す児童の姿をより具体化する。何を身に付けさせたいのか、自分たちで考えさせたいのは何なのか、重視したいところを明確にする。

・児童が自分から活動に向かうための手立てを複数準備しておき、活動の様子に合わせて支援の方法を工夫する。

＜事前研における学部研究テーマと関連するキーワード＞		
「『できた』という達成感」	「自分で」	「教師が育てたいと考える力の具体化」

③公開研究会

第３学年　単元名「ぐんぐんチャンネル　ユーチューバーになろう②」12 月４日（水）

本単元では、前単元に引き続き、動画を取り入れた学習に取り組んだ。前単元で見通しをもった児童が、自分のやりたい役割を選択したり、自分の気持ちや感想等を身近な教師や友達に伝えたりすることや、教師の手本や動画を参考にして、自分の役割に自ら、または友達と協力して取り組むことをねらいとした。事前授業研究会を受けて、児童が動画制作に取り組む動機付けや、活動内容を理解し役割に進んで取り組むための手掛かりとして、本単元は「サンタからの依頼」を受けて活動に取り組むという形にした。「自分で」「自分たちで」活動できるように、児童の好きなクリスマスや音楽を題材に、クリスマスソングを歌ったり踊ったりする様子を撮影したり、クリスマス飾りを作ったりする。「誰かのために」役に立ち、達成感を味わう経験を積むことができるよう、本単元でも完成した動画を家族や小学部の友達に披露し感想をもらう機会を設定した。本時は、クリスマ

スソング「あわてんぼうのサンタクロース」の２番と４番を、２グループに分かれて撮影する活動を行った。

１）事前授業検討から

事前授業検討では、以下のような意見が挙げられた。

・児童が動画を振り返るときにチェックできる具体的な観点表などを用意し、自分や友達の様子を見合い、お互いの活動をチェックできる場を設けてはどうか。

・自分から役割に取り組むための手立てとして、衣装やカチンコなどの小道具を用意したり、友達とペアになって活動したりしてはどうか。

２）授業協議から

＜児童について＞

・教材や場の設定の工夫、役割分担により、児童たちは活動に見通しをもち、準備や撮影、後片付けを友達と協力して行っていた。

・撮影した動画をすぐにモニターに映して見ることにより、児童が自分の撮影を自己評価できた。「撮り直したい」と話す児童や、友達から「いいね」の声を掛けてもらい笑顔になる児童がいた。

＜児童と教師の学びの共通理解について＞

・「いいね」の合言葉が効果的であり、児童の達成感に結びついていた。反面、ねらいの達成ではなく、活動への満足感から児童が「いいね」のポーズをする様子が見られた。教師が児童のねらいを達成する姿を具体的に想定し、本時の児童が頑張るポイントとして分かりやすく提示し評価する機会を設けることで、教師と児童とで、この活動で何を学ぶかという「できた」の共通理解をすることができるのではないか。

写真５　グループ協議

３）指導助言から

・クリスマスを盛り上げるために、サンタの依頼に応え、クリスマスソングの撮影をしようという目標は、児童たちにとって分かりやすいゴールとなっていた。活動中や振り返り場面で、サンタが喜ぶことを意識する機会を設ける工夫があるとよい。

・撮影した動画をその場ですぐに見る活動は、どの児童もよく注目していた。児童が自己評価したり身近な教師から評価を得たりする経験を得ることができる。具体的な「いいね」のポイントが示されていたり、教師と児童が認め合う機会があったりすることで、自分の活動を振り返る経験や視点が育まれるのではないか。

・児童に身に付けさせたい力を育むことに向け、手段となる動画撮影という活動を、児童の目線から分析し、活動の特徴や面白さを児童に合わせてどのように活用していくのかという活動研究を進めていくことも大切である。

・その児童なりの夢中になる姿、工夫する姿が見られた。学部研究のテーマである「できた」「もっとやってみよう」と感じる児童の姿につながる。その姿を見取り、その姿が見られた背景を授業者同士で話題にすることで、次時に向けたよりよい工夫をしていけるのではないか。

４）授業改善に向けて

・児童が自分の活動を振り返り、自己評価できる場を工夫して設定する。目指す児童の姿を教師が具体的に想定し、児童に「何を学ぶか、何を頑張るか」を分かりやすく提示する。

＜事前研における学部研究テーマと関連するキーワード＞

「自分で」　「教師が育てたいと考える力の具体化」　「『できた』の共有」

４　まとめ（成果とこれからに向けて）

（１）　三つのキーワードを基にした支援方法の整理

児童の興味・関心と教師が育てたいと考える力の二つの視点を大切にして学習活動の検討を行い、授業づくりのポイントを活用したことにより、児童が活動を十分に楽しみ、友達と協力しながら主体的に活動に取り組もうとする姿を引き出すことができた。全校で共有した授業づくりのポイントを、小学部では「自分で」「自分たちで」「誰かのために」の三つのキーワードで表し、支援の方法を整理したことで、支援に不足がないか教師同士で確認し合うことができた。また、各教師の児童の捉えや学びについての解釈を伝え合って検討することができ、指導の妥当性を高めることができた。教師が児童への支援の方法を共通理解するためのツールとして有効であった。

各学年の取組の振り返りでは、授業づくりのポイントに関して、学年が上がるほど「ペアやグループの設定」が児童が自ら活動に取り組むための重要な支援として位置付けられていた。低学年段階での教師と児童の直接的な関係や、教師を仲介役とした関係から、児童が人と関わる経験を積み重ねて、友達を意識し、友達のまねをして活動する、友達と一緒に活動する姿へと、人と関わる力を高めていっていることが理由であると考えられる。また、「ペアやグループの設定」を行う際には「児童の実態に応じた教材教具の準備」「教師が待つ姿勢を示したり、活動を見守ったりする支援」を合わせて行うことが大切であるという意見が挙げられた。

（２）児童が「できた」と達成感を感じられる工夫

各授業研究会を通し、「もっとやりたい」と次の学びへ向かおうとする児童の姿を引き出すためには、「できた」という達成感を十分に感じられる場面が必要であることが分かった。小学部３年生の 10 月の事前授業研究会では、参観者の姿に緊張して黙り込んでしまい、活動に向かうことが難しい児童がいた。しかし 12 月の公開研究会では、活動に集中し、自分から進んで役割に取り組む姿が見られた。この児童に大きな変容が見られたのは、活動を繰り返し「できた」という経験を積んだことで、活動に見通しと自信をもち、次の学びへ向かおうとする気持ちを育むことができたことが要因であると考える。この事例のように、「児童が少し頑張ればできる活動」を設定し、「できた」という経験をたくさん積むことで、児童は「もっとやってみよう」と意欲をもち、主体的に学びに取り組むことができると考える。

そのためには、教師が児童の実態を細やかに把握し、児童の「目指す姿（育てたい資質・能力）」を教師が具体的に想定し、評価の観点を明確にすることが大切である。教師が児童の「できた」と実感する姿のイメージを明確にもつことで、児童にとって分かりやすいゴールを設定することができ、児童の「できた」という実感を積み重ねていくことができる。その積み重ねにより、「もっとやりたい」と自ら次の学びへ向かおうとする「自ら学び続ける子ども」を育むことができると考える。

小学部３年　生活単元学習　学習指導案

日　時：令和６年 12 月４日（水）10：25～11：10
場　所：小学部３年１組教室、小会議室
児　童：男子８名、女子１名、計９名
指導者：藤原淳一（Ｔ１）、小嶋美智子（Ｔ２）
工藤裕美子（Ｔ３）、柳田智子（Ｔ４）
田村優（Ｔ５）

１　単元名

「ぐんぐんチャンネル　ユーチューバーになろう②」

２　児童と単元

（１）児童について

本学年は、男子８名、女子１名の計９名である。表情や発声、指さし等で自分の思いを表す児童や、思ったことや考えを言葉で伝える児童など、実態は様々であるが、それぞれが自分なりの手段で伝えようとする。

情報端末の活用については、ほぼ全ての児童が家庭でタブレット端末やスマートフォンを使ってユーチューブで動画を見ており、アプリケーションで学習したり遊んだりしている児童もいるなど興味関心が高い。

８月から 10 月に実施した「ぐんぐんチャンネル　ユーチューバーになろう①」では、「自分のやることが分かり、活動に期待感をもって、友達や教師と一緒に撮影したり制作したりする」「自分の考えや思いを、友達や教師に伝わるように話したり表現したりする」ことをねらいとして、動画を作る活動に取り組んだ。児童の興味関心が高いタブレット端末を活用し、学年全員で動画を作る活動を行ったことで、児童は活動に期待感をもち、自分のやりたいことを積極的に伝えたり、友達と協力して活動したりする姿が見られた。

初めての活動や自信がないときにはまだ消極的な面が見られるが、教師の支援を求めながら様々な集団の中で簡単な役割を果たしたり、友達と協力して活動や作業に取り組んだりすることにより役割を果たす喜びや意欲を高めていくことが必要な段階である。

（２）単元設定理由

前単元では、動画を作る活動を通して、個々の実態に応じた背景制作や撮影係などの役割分担をして、同じ流れで活動を繰り返した。そのことで見通しをもち、役割に取り組もうとする姿を引き出すことができ、児童からは、楽しかった、またやりたいという感想が多く聞かれた。

そこで本単元は引き続き、動画を取り入れた学習に取り組んでいく。今回は、サンタからの依頼を受けてクリスマス飾りや動画を作るという形で学習を進める。サンタからの依頼を受けることで動画作りへの必然性を高め、活動への意欲を高めることができると考える。また、前単元の経験から、児童は動画作りの活動に見通しをもっている。活動を進める際にサンタからのメッセージや、教師による見本を動画で提示することで、児童は活動内容を理解し、進んで役割に取り組もうとする姿を引き出すことができると考える。

完成した動画をサンタや家族など、いろいろな人に見てもらい感想をもらうことで、様々な考えに触れることができる。また、児童が自分の役割を果たして、みんなで一つのものを作り上げることで達成感を味わうことができると考え、本単元を設定した。

（３）指導について　※下線は各学部学科の研究テーマに関連した手立て

【児童一人一人が自ら活動したり考えたりすることができる状況づくり】

・本時の学習で行うことが分かるように、学習の流れを文字とイラストで掲示する。
・<u>児童が学習に見通しをもち自信をもって取り組めるように、見本となる動画や教材を準備する。</u>
・教師は各グループに入るが、<u>児童主体で活動を進めることができるように、基本的には見守り、必要に応じて児童の実態に沿った支援を行う。</u>
・学習への期待感や一体感が高まるように、学習の最初と最後にみんなでぐんぐんチャンネルポーズをする。

・意欲を高めたり満足感を味わったりできるように、児童が制作した動画をユーチューブで視聴できるようにする。

【自然な協働性を生むテーマ設定や学習活動、学習集団の工夫】

・児童同士が教え合ったり助け合ったりできるように、児童の興味関心や実態を踏まえたグループでの活動を設定する。

・友達同士で協力したり、よりよくしようとする気持ちを高められたりするように、みんなで一つの動画を制作する。

【多様な場や人材の活用】

・活動に見通しや期待感をもてるように、サンタからのお願いとして活動内容や頑張ってほしいポイントなどを伝える。

・ユーチューブの限定公開を活用して家族に見てもらい、動画への感想をもらう。

3　単元目標

知：知識及び技能　思：思考力・判断力・表現力等　学：学びに向かう力・人間性等

（1）動画作りの活動に大まかな見通しをもち、自分のやることが分かる。…知

（2）自分がやりたい役割を選んだり、自分の気持ちや感想等を教師や友達に伝えたりする。…思

（3）動画作りの活動に期待感をもち、教師の手本や動画を参考にして、自分の役割に進んで取り組んだり、友達と協力して準備をしたりする。…学

4　単元計画（総時間数 16 時間／本時 13 時）

小単元名と活動内容	主なねらい（知 思 学）	時数	学習活動	関連する教科等
はじまるよ！ぐんぐんチャンネル ・歌の撮影	・ぐんぐんチャンネルで行うことを知り、これからの学習に見通しをもつ。知 学 ・伴奏に合わせて歌ったり、楽器を鳴らしたりする。思	2	・サンタからのメッセージ動画を見て、ぐんぐんチャンネルで行う内容を知る。 ・あわてんぼうのサンタクロースの歌を練習して、児童の歌唱を撮影（録音）する。	国語科 音楽科
クリスマス飾りでスタジオを作ろう ・飾り作り ・スタジオの飾り付け	・飾りの作り方を知り、好きな色を選んで塗ったり、枠の中に色紙を貼ったりする。知 思 ・友達と協力して、スタジオを飾り付ける。思	4	・ぐんぐんチャンネルのスタジオを飾るための、クリスマスツリーやオーナメントなどを作る。 ・作った飾りで３年１組教室内と小会議室内の壁面を飾る。	図工科 生活科
クリスマスソングの動画を作ろう ・役割分担 ・練習 ・撮影	・どのような活動をするかを知り、自分がやりたい役割を選ぶ。知 思 ・自分のやることが分かり役割に取り組む。思 ・動画を参考にして、自分の役割に進んで取り組む。学	9 （本時 7/9）	・手本動画を参考に、踊る、パフォーマンスする、楽器を鳴らす、撮影するなどの役割分担をする。 ・手本動画を参考に、動きを決めて練習する。 ・「あわてんぼうのサンタクロース」の動画を撮影する。 ・動画を確認する。	生活科 音楽科
ぐんぐんチャンネルを振り返ろう ・振り返り ・発表	・これまでの学習を振り返り、頑張ったことや難しかったことなどの感想を発表する。思	1	・完成した動画やこれまでの学習の様子を動画で振り返る。 ・頑張ったことなどの感想を発表する。 ・サンタからの感想を聞く。	国語科

５　児童の実態と目指す姿

氏名・性別	実　態	単元を通して目指す姿 （自ら学び続ける子どもにつながる姿）
A （男）	・自分のやりたいことを単語や行動で伝える。活動内容や学習場所を知ることや繰り返しの活動で見通しをもち、ある程度の時間、落ち着いて活動できる。見通しがもてず不安になると、他害をすることがある。 ・教師や友達の様子に興味をもって見たり、教師を見てまねをしたりする。音楽や合図に合わせて動く。	・活動表を見たり、言葉掛けを受けたりしながら、自分のやることが分かり、教師と一緒に取り組む。 ・友達の様子を見て動きやタイミングを覚え、合図に合わせて動いたり楽器を鳴らしたりする。
B （男）	・自分の気持ちや考えを言葉で伝える。 ・活動内容や役割に見通しをもつことで自分がやりたいことを選んだり、教師の言葉掛けを受けて活動に取り組んだりする。	・使う物を自分で準備したり、役割分担表で自分の役割を確認したりするなど進んで活動に取り組む。 ・音楽に合わせてタイミングよく楽器を鳴らす。
C （女）	・学習内容を聞いたり、手本を見たりすることで自分や友達の活動に関心をもち、進んで活動に取り組む。 ・待つ場面が苦手で、大声を上げたり、椅子を倒したりすることがある。 ・音楽が好きで、曲のリズムに合わせて簡単なダンスや演奏をする。また、不明瞭ではあるが、気に入った歌の一部分を口ずさむ。	・繰り返しの活動と板書から、自分のやることや順番が分かり、活動に最後まで取り組む。 ・動画の撮影で、教師の手本や友達の様子を見て自分の動きを覚え、合図に合わせて踊ったり、演奏したりする。
D （男）	・簡単な言葉での説明や指示が分かり、自分から活動に取り組む。友達や教師に自分の考えを言葉で伝える。 ・人前で話すことや歌うこと、踊ることなどを恥ずかしがる。事前に活動内容を伝えたり、少人数で行ったりすることで安心して活動できる。	・制作や撮影の活動で、教師の提示したチェックポイントを基に良いところや改善点を考え、言葉で伝える。 ・教師とのやり取りで自分のできそうなことを選択し、友達と一緒に撮影に取り組む。
E （男）	・自信がないときには発言を避けたり、考えがまとまらなかったりすることがあるが、自分の考えを言葉で伝える。 ・人前で緊張すると、言葉が出ないなど萎縮することがあるが、自分がやるべきことは分かっている。	・動画作りの活動で、どんな動きがあればよいか考えたり、友達の意見を聞いて感想を伝えたりする。 ・自分の役割のやり方や手順を覚えて、友達に声を掛けたり機器の操作をしたりする。
F （男）	・自分の考えや感想を堂々と言葉で伝えられ、自分の役割に見通しをもつことで、進んで活動に取り組む。 ・簡単なリズムや踊りはすぐに覚えて太鼓をたたいたり踊ったりする。	・役割分担表や活動の絵コンテを見て活動内容が分かり、自分の役割に進んで取り組む。 ・教師の問いかけやできた映像を見てのやりとりの中で、自分の意見を伝える。
G （男）	・自分のやりたいことを教師の手を取ったり、行動で伝えたりする。 ・繰り返し行う活動には見通しをもち、落ち着いて活動に取り組めることが多い。	・道具を見て、教師と一緒に準備することで、自分の役割が分かって活動に取り組む。 ・流れる音楽や楽器の音を聞きながら教師と一緒に体を動かす。
H （男）	・自分の気持ちを１～２語文で伝える。友達との関わりが増えてきており、誘いに応じたり名前を呼び掛けたりする。教師の言葉掛けや友達の様子から活動に見通しをもって取り組む。 ・覚えている歌を口ずさんだり、好きなアニメの一場面の動きやせりふをまねたりする。	・繰り返しの学習や板書から、その日の活動が分かる。 ・歌や動きの手本など教師や友達からの合図に合わせて、踊ったり演奏したりする。

Ⅰ （男）	・不明瞭ではあるものの、自分がやりたいことや気持ちを言葉や手話で伝える。繰り返しの学習で見通しや期待感をもち、進んで活動に取り組む。 ・歌やダンスを好み、歌詞を覚えて歌ったり動画を見て動きをまねたりする。	・板書や教師の話などから学習に見通しをもち、役割に進んで取り組む。 ・順番や担当する動きが分かり、友達を誘ったり、手本を見せたりしながら活動する。

６　本時の計画（16 時中の 13 時）

（１）本時のねらい

・自分の役割が分かって進んで活動に取り組み、あわてんぼうのサンタクロースの動画を撮影する。

（２）学習過程　　※下線は各学部学科の研究テーマに関連した手立て

時間（分）	学習活動		教師の働き掛け、指導上の留意点
7	導入	１本時のめあてと学習内容を知る。	・これまでの進捗状況が分かるように、進捗状況表を提示して前時の活動を振り返る。 ・本時の学習内容が分かるように、サンタからのお願い動画を見る。 めあて：グループのともだちとちからをあわせてさつえいしよう。 ・活動内容や活動場所をイラストカードや写真カードで提示する。
		２グループに分かれて撮影する。 ＜１グループ＞ あわてんぼうのサンタクロース ２番	・児童の実態、興味関心を踏まえて、二つのグループに分ける。（３－１、会議室） ＜１グループ＞ ・自分の役割を確認して活動に取り組めるように、役割分担表に顔写真を貼って示す。 ・自分の役割や動き、頑張ることが確認できるように、前時に撮影した練習の動画を見る。 ・撮影する場所や立ち位置が分かるように、カラーテープや顔写真で示す。 ・撮影場面での教師の指示は最小限にし、児童から質問等があった場合にアドバイスする。 ・自分や友達の動きが上手にできたかを判断できるように、撮影した動画をすぐに確認する。児童から撮り直したいという意見が出たときは、改善したい部分を確認してから撮り直すようにする。 ・児童の意欲を高めたり、自信をもって活動したりできるように、児童の言動を肯定的に捉えて即時評価する。
		・Ｂ：○撮影で使う道具を自分で準備したり、役割に進んで取り組んだりする。 →自分の役割や動きが分かるように、役割分担表に具体的に示したり、必要に応じて役割を確認するように言葉掛けしたりする。 ・Ｅ：○撮影の手順が分かり、友達に伝わるように撮影開始と終了の合図を出す。 →撮影の手順表を準備し、合図の出し方を練習する場面を設けて、教師と一緒に確認する。言葉が出ないときのために、「どうぞ」「オーケー」のカードを準備する。 ・Ｆ：○撮影の流れが分かり、自分の出演する場面に気付いて活動に取り組む。 →自分の役割や動きが分かるように、役割分担表に具体的に示す。自分の役割が分からなくなったときには、役割分担表を見るように促す。 ・Ｇ：○設置した大道具や用具を見て自分の出番が分かり、教師と一緒に取り組む。 →やることが分かるように、自分が使う用具を教師と一緒に準備する。	

<table>
<tr><td rowspan="3">28</td><td rowspan="3">展開</td><td>＜２グループ＞
あわてんぼうのサンタクロース
４番</td><td>＜２グループ＞
・活動の流れと自分のやることが分かるように、手順表や顔写真付きの順番表を板書で示す。また、本時で撮影する場面の絵コンテを提示する。
・撮影での立ち位置が分かるように、撮影範囲をカラーテープで囲ったり、床に印を付けたりする。
・合図に注目し、タイミングよくポーズをとれるように、一人または二人ずつ順番に撮影する。
・児童同士で関わったり、誘い合ったりできるように、必要時Ｔ３、Ｔ５が個別に言葉を掛ける。
・撮影が終わるたびに撮った動画をテレビに映し、即時に振り返る場面を設定する。その際、リーダーであるＤが確認できるように、チェックポイントを提示する。
チェックポイント：①あいずに あっているか
②りょうてが あがっているか
③カメラを みているか</td></tr>
<tr><td colspan="2">・Ａ：○友達の様子を見て、同じように体を動かし、自分の役割を演じる。
→同じ動きをするときの共通のキーワードを設定し、友達に注目を促す言葉掛けをする。
・Ｃ：○自分の撮影の順番を待ったり、合図に合わせてポーズをとったりする。
→活動の流れと撮影順を板書で示すとともに、順番を待っている間は友達の様子に注目できるような言葉を掛ける。合図に合わせることが分かるように、必要に応じて個別にキーワードとなる言葉を掛けたり、他の児童に手本を依頼したりする。
・Ｄ：○友達に撮影開始の合図を出したり、撮影で自分から体を動かしたりする。
→活動の流れを示して頑張るポイントを個別に確認する。また、うまく言葉や動作が出なかったときは小道具の使用や別の方法を提案し、自分で選択できるようにする。
・Ｈ：○友達からの言葉掛けで立ち位置に移動したり、教師の合図でポーズをとったりする。
→児童同士の関わりを引き出すため、教師の言葉掛けを控えてやりとりを仲介する。
・Ｉ：○友達に出番や動きを教えたり、友達の合図に合わせてポーズをとったりする。
→板書で撮影の順番が分かるようにし、友達へのよい関わりや意欲的な姿にはタイミングを逃さず言葉を掛ける。</td></tr>
<tr><td></td><td>・ＡやＧが気持ちを落ち着ける必要がある場合、場を変えてクールダウンする時間を設ける。</td></tr>
<tr><td>10</td><td>まとめ</td><td>３集合して、撮影した動画を見合う。

４次時の学習について知る。</td><td>・達成感を味わえるように、撮影した動画を全員で見て頑張りを称賛し、児童が進捗状況表にいいねマークを貼る。
・めあてへの評価として、友達と力を合わせて行った行動や児童の言葉掛けなどを取り上げる。
・次回は残りの場面の撮影をして、動画を完成させることを伝え、次時への意欲を高める。</td></tr>
</table>

（３）評価

＜児童の評価＞

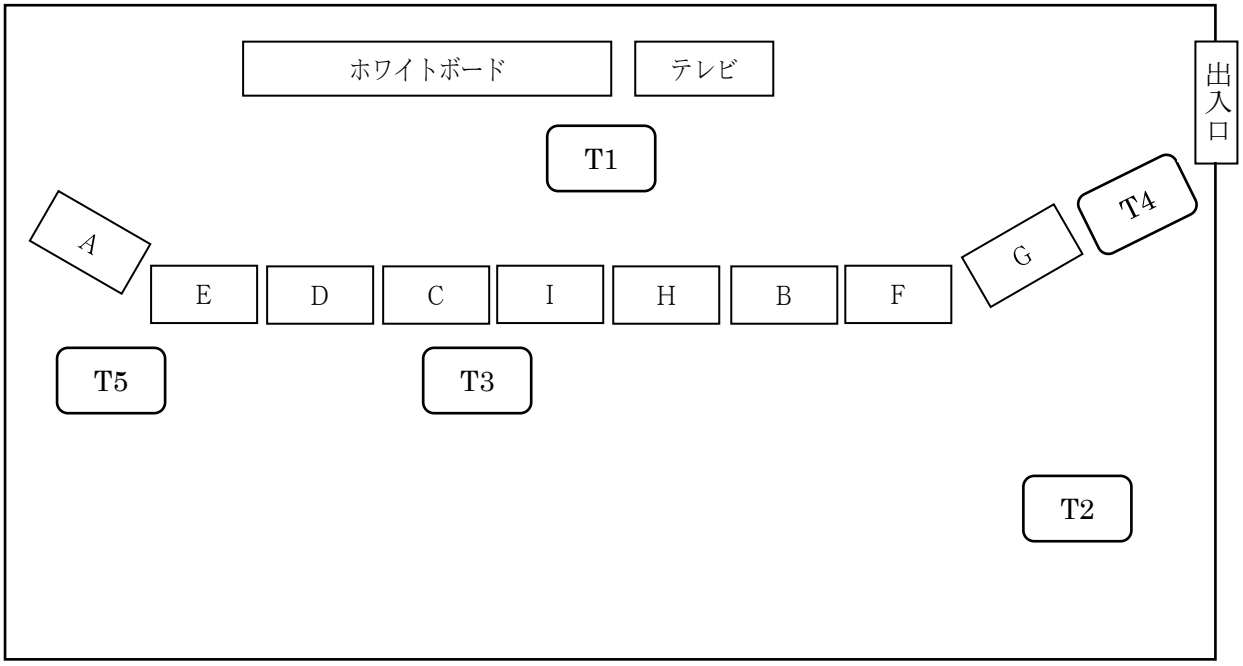
・自分の役割が分かり、友達と協力して使う物を準備したり、ダンスやポーズ、撮影などに進んで取り組んだりすることができたか。

＜教師の手立ての評価＞

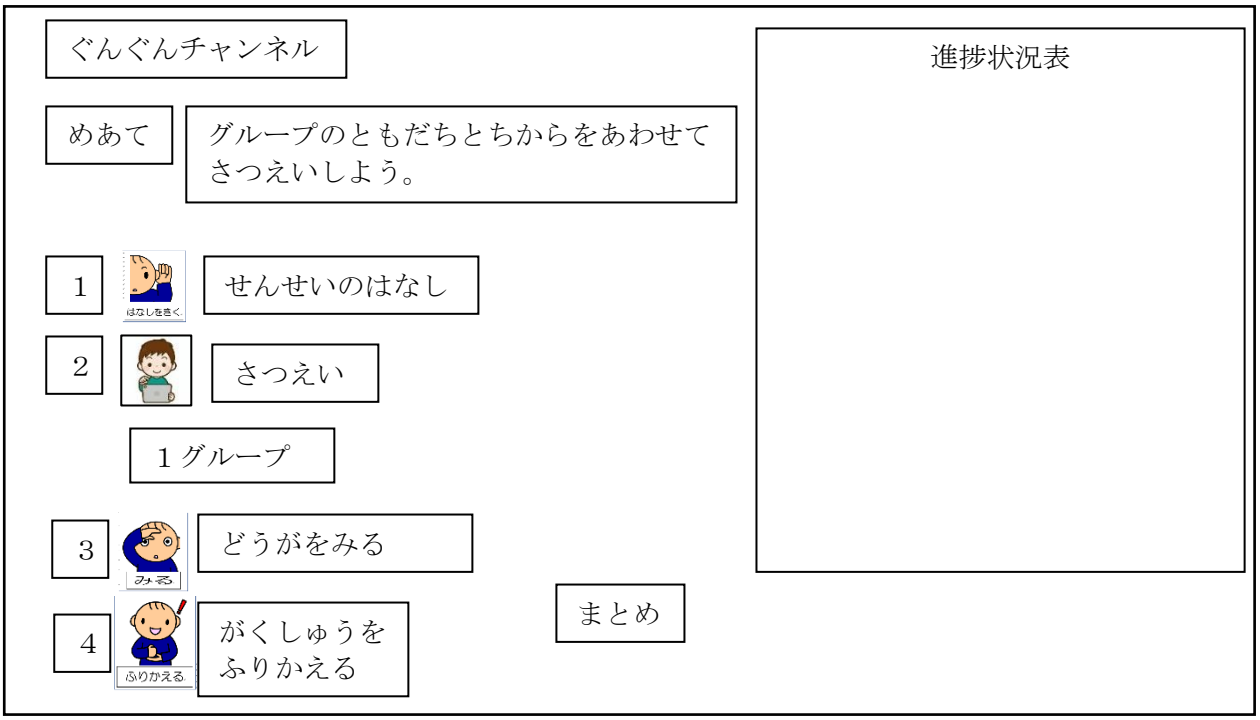
・学習内容に見通しをもち、自分たちで考えて準備や撮影を進められるように、個々に合った教材教具の準備や支援ができていたか。

（４）配置図と板書計画

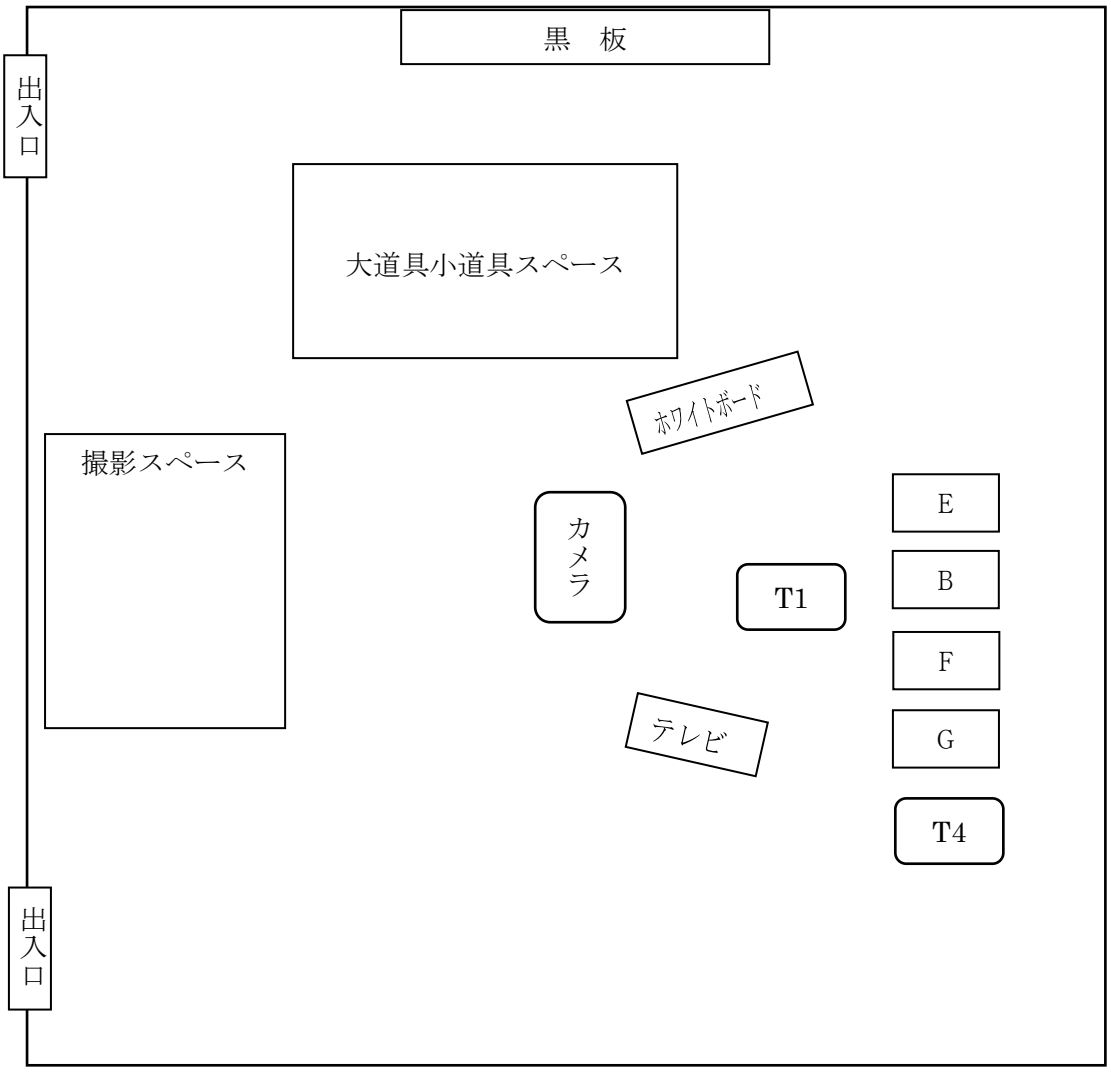
＜導入　まとめ　３－１教室＞



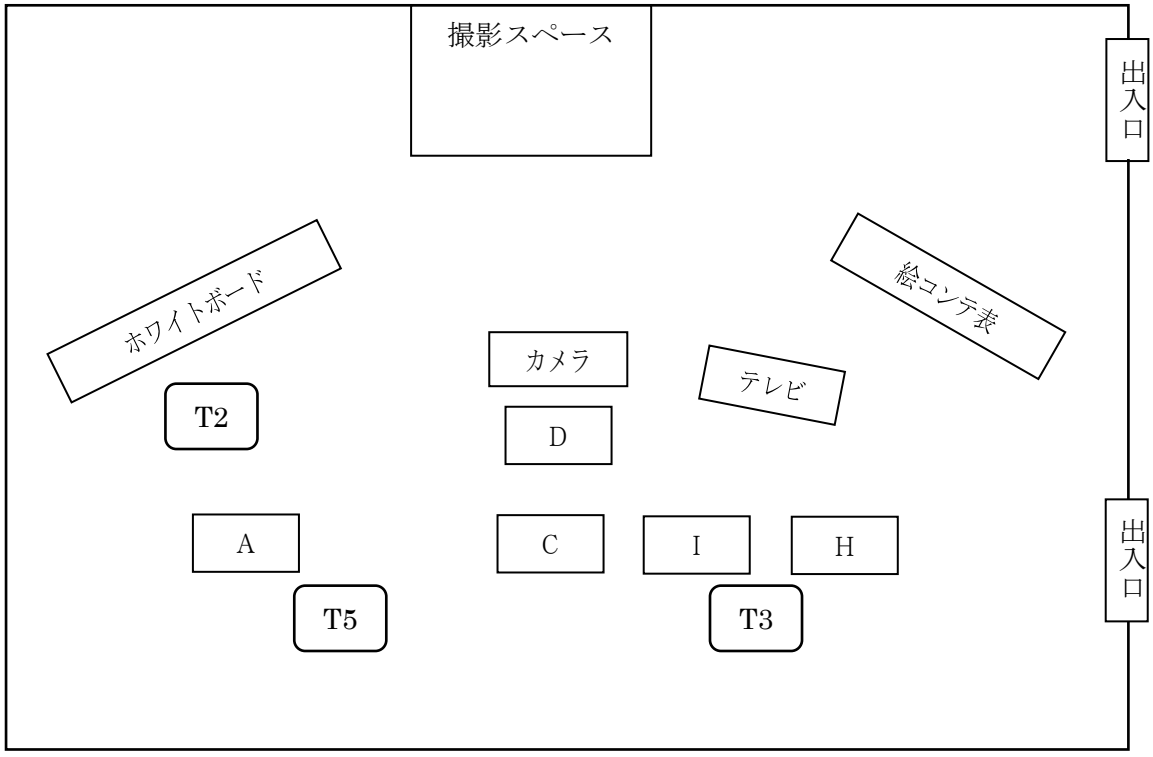
＜板書計画＞



＜展開　１グループ　小会議室＞



＜展開　２グループ　３－１教室＞



年 間 指 導 計 画 及 び 指 導 記 録

指導の形態	生活単元学習

記録者：藤原淳一

学習ｸﾞﾙｰﾌﾟ・児　童	小学部３年　（９名）	指導者	藤原淳一、小嶋美智子、田村優、柳田智子、工藤裕美子
年　間目　標	(1)活動内容や自分の役割が分かり、大まかな見通しをもって友達や教師と活動する。（思・学） (2)友達や教師と一緒に活動する楽しさや簡単なやり取りの仕方を知り、自分から周囲に関わろうとしたり、関わりを受け入れたりする。（知・学） (3)動物や植物に触れることで興味・関心の幅を広げ、感じたことや考えたことを表情や身振り、言葉で表現する(知・思) (4)公共施設や交通機関の利用を通して、社会のルールやマナーを身に付ける。(学)		

合わせた（関連する）教科等	国語、算数、図画工作、生活、特別の教科道徳、自立活動

学期	題材名及び主な学習内容	主な目標	指導の記録	実施時数
前期	○「３年生、がんばるぞ」 ・学級目標、自己紹介カード制作	・３年生の目標を役割分担して制作したり、自分の好きな物や好きなことを考えて書いたりする。	・学級目標の字を書く、装飾するで役割分担をして制作した。字を丁寧に書く、双葉の線の中に紙を貼り付けるなど、児童の実態に応じて分担したことで、みんなで作り上げることができた。	
	○「運動会がんばるぞ」 ・目標決め、振り返り	・運動会で自分の参加種目が分かり、どんなことを頑張るか、練習を振り返って書く。 ・運動会の自分の頑張りを振り返り、自己評価を書く。	・運動会練習をある程度行って種目のイメージがもててから、目標を決めるようにした。徒競走、学部種目、マイムマイムの中から、それぞれが頑張りたい種目を選び、目標を考えることができた。	
	○「みんなで育てよう～ぞうのえさ～」 （大森山動物園畑、プランター） ・土作り、種まき、水やり ・刈り取り、えさやり ・浜田小との交流 ・観察記録、振り返り	・スダックスの栽培を通して、植物の成長や象の生態に興味をもつ。 ・飼育員の説明を聞き、手順に沿って土作りや種まき、刈り取り、給餌をする。 ・浜田小の友達と協力して一緒に土作りや種まき、刈り取りをする。 ・事後に体験を写真等で振り返り、感じたことを話したり文にしたりして発表し合う。	・象の堆肥まき、種まき、刈り取り、給餌の活動を行った。事前に学校で種まきや刈り取り練習を行った。また飼育員の方から丁寧にやり方を説明してもらい、みんなで一緒に行うことで、友達のやり方を見ながら取り組むことができた。 ・種まきで浜田小学校の友達から種をもらうようにしたり、一輪車で協力してスダックスを運んだりなどした。同じグループの友達の名前を覚えて名前を呼ぶなどの関わりも見られた。 ・事後学習で写真や動画などで振り返ることで、頑張ったことや楽しかったことなどの感想を発表した。	予定時数(122)
	○「みんなで育てよう～じゃがいも、さつまいも～」 ・種芋、苗植え ・看板作り ・水やり ・記録観察 ・収穫	・じゃがいもやさつまいもの成長に関心をもち、水やりをしたり、写真を撮ってコメントを書いたりする。 ・大きく字を書いたり、絵を描いたりして看板を作る。	・児童玄関近くで、プランターを使ってじゃがいもを栽培し、成長を確認したり、水やりしたりした。すぐに見られる場所は成長の変化が確認しやすく、児童も興味関心をもっていた。 ・看板作りで、手本となる字やイラストを準備したことで、参考にして書くことができた。	実施時数(165)
	○「春を楽しもう」 ・お花見	・目的地に向かって友達や教師と一緒に歩き、体力の向上を図る。 ・桜やチューリップなどの花を見て季節を感じる。	・大川端公園へ花見に行った。片道１キロほどの距離を、実態に応じて友達と手をつなぐ、教師と手をつなぐ、のペアで歩いた。帰りの上り坂で休む児童がいたがその他は元気に歩いた。	
	○「鹿嶋祭を楽しもう」 ・五色旗作り ・日吉神社まで歩く練習	・鹿嶋祭の目的を知り、五色旗を作ったり、友達や教師と一緒に日吉神社まで歩いたりする。	・五色旗の願いは、保護者にお願いして児童と一緒に考えてもらった。日吉神社まで歩く練習を２回行い、神社、ガラス工房での休憩以外はほぼ休まずに歩いた。	
	○「夏を楽しもう」 ・かき氷作り	・教師と一緒にかき氷作りを体験したり、友達や教師に振る舞ったりする。	・誕生会でかき氷作りをした。かき氷器を手動、電動から選んで自分で氷を削り、３種類のシロップから好きな物を選んだ。自分で操作して氷が削れ、容器に積もる様子を楽しんでいた。	

後期	○「ぐんぐんチャンネル～ユーチューバーになろう①」 ・Ｔシャツ作り ・背景制作 ・役割分担、動画の撮影 ・感想発表	・自分たちの好きなことや経験したことを元にして、友達と役割分担したり協力したりして動画を作る。		予定時数 (123) 実施時数 ()
	○「栗田祭がんばるぞ」 ・ステージ発表の練習	・繰り返し練習することで自分の役割が分かり、せりふや動きを覚える。		
	○「ぐんぐんチャンネル～ユーチューバーになろう②」 ・背景、スタジオ制作 ・役割分担、動画の撮影 ・感想発表	・サンタからのお願いを受けて、友達と役割分担したり協力したりしてクリスマスソングの動画を作る。		
	○「みんなで育てよう～じゃがいも、さつまいも～」 ・じゃがいもの調理 ・さつまいもの収穫、調理	・友達と分担して道具を準備したり、協力して簡単な調理を行ったりする。 ・衛生や安全に気を付けて調理する。		
	○「クリスマス楽しみ会をしよう」 ・役割分担 ・会食	・司会や係を分担し、友達と協力して会を進める。		
	○「買い物をしよう」 ・品物を選ぶ ・お金の支払い	・自分の欲しい物を決めて購入したり、頼まれた品物を探して買ったりする。		
	○「冬を楽しもう」 ・そり滑り	・順番を守ってそり滑りを楽しんだり、友達と協力して雪だるまやかまくらを作ったりする。 ・雪上をたくさん歩いて体をたくさん動かす。		
	○「進級おめでとう会」 ・１年間の振り返りと次年度に向けて	・３年生の学習を振り返り、頑張ったことや楽しかったことを発表したり、友達の頑張りを認めたりする。		
通年	○「校外学習に行こう」 ・校外学習 （フェライト子ども科学館、西滝沢水辺プラザ、御所野イオン）	・公共施設での活動のマナーを知り、守って行動する。 ・いつ、どこに、何をしに行くのかが分かり期待感をもって出掛ける。	（前期） ・西滝沢水辺プラザで、ピザ作り体験を行った。事前学習で簡単ピザの調理をしたことで、校外学習でもスムーズに作ることができた。 ・フェライト子ども科学館は１時間ほど施設の体験活動をして、隣の施設で昼食をとった。興味をもった展示で遊んだり、友達と一緒にシャボン玉に入ったりなど、時間いっぱい楽しむ姿が見られた。外遊びも計画していたが天候不良で実施できず、その分早目に帰ってきた。	
	○「誕生日おめでとう」 ・役割分担 ・会食	・お互いの誕生日を祝い合うことで、誕生日を楽しみにする。	（前期） ・一人一役で役割を決めて、誕生会を行った。乾杯を最後に設けることで、それを楽しみにする児童も多かった。	
	○「思い出のアルバムを作ろう」 ・写真の整理 ・コメントの記入	・学習の様子の写真をアルバムに綴じながら自分たちの頑張りや成長を振り返る。		
評価				**年間総計** 予定時数 (245) 実施時数 ()

中学部研究

元気な
やさしい2組
今日の予定
朝の会
着替え
生活単元学習
帰りの会
そうじ
ハッピースマイル大作戦②
何を？
どうする？

中学部　授業づくりの実際
～生徒が学びを実感し、自ら考えたり、行動したりする姿を目指して～

１　学部研究テーマ設定理由

中学部では、一昨年度に「他者との関わりの中で、考えを深めたり自ら行動したりするための学習活動と手立ての工夫」というサブテーマを掲げ授業づくりを進めた。生活単元学習の進路学習を研究対象授業に設定し、協働的な学びの充実に重点を置いた授業づくりを行ったことで、他者との関わりから新たな気付きを得たり、自分の考えを整理して伝えたりする姿が多く見られた。さらに昨年度は、研究１年目の成果を生かし、全校研究で示された「自ら学び続ける子どもの育成を目指した授業づくりのポイント」を活用した授業づくりを行った。「職業・家庭科」の指導内容を参考に、生徒の実態に応じた学習内容を検討して計画的に学習を進めたことで、仕事や職業に対する具体的なイメージをもち、知ったことや感じたことを意欲的に周囲に伝える姿が見られた。一方で、自分の将来や働くことそのものについては、自信のなさから否定的に考えたり、考えること自体に消極的になったりする傾向が見られた。

そこで今年度は、生徒が自分の学びや成長を実感し、自信をもつことに重点を置き、授業や単元を通して「学びの実感」を実現することで、意欲をもって考えたり、行動したりする姿を引き出したいと考え本テーマを設定した。また、生徒が自分の役割を果たす経験や、他者から認められる経験も生徒が自信をもって活動するために重要な経験であると考え、それらの経験を学びの中でより実現しやすい生活単元学習の中心単元を研究対象授業として設定した。

２　研究仮説

生徒が自ら考えたり、行動したりする姿を目指し、生徒の興味・関心や教師が育てたい資質・能力に基づいた生活単元学習の単元を計画し、「学びの実感」を実現する授業づくりをすることで、自ら学び続ける生徒の育成が図られるだろう。

３　取組の実際

（１）生徒が学びを実感し、自ら考えたり、行動したりする姿を目指した授業実践の充実

①何をどのように学ぶかの検討

年度始めに、各学年で今年度実施する生活単元学習について検討する機会を設けた。ここでは生活単元学習ロードマップ（写真１）を活用し、当該学年の生徒の興味・関心や得意なこと、やってみたいことなどと、教師側が考える育てたい資質・能力のそれぞれについてリストアップし、これらの要素から今年度の生活単元学習のテーマと具体的な学習活動を検討した。

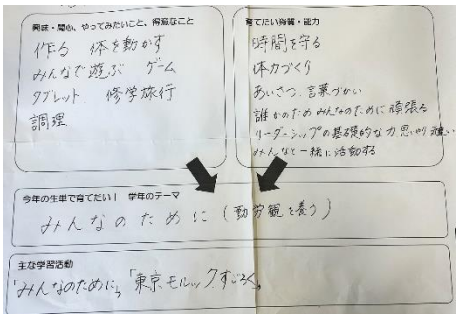


写真１　生活単元学習ロードマップ

②授業づくりのポイントを活用した授業実践

全校研究で示されている三つの授業づくりのポイントを活用した授業づくりを行った。特に、授業づくりのポイント①「生徒一人一人が自ら活動したり考えたりすることができる状況づくり」の視点から、生徒が何のために何に取り組むのかを理解できるようにすることが重要であると考え、事前授業検討会や授業シミュレーションの機会を活用して、本時のめあての具体的な文言や伝え方、めあてと学習活動、まとめのつながり、個々のねらいに応じた学習活動の在り方について検討した。

③振り返りの充実

生徒が自分の学びを実感し、自分の成長に気付くためには振り返りの充実が重要であり、充実し

た振り返りを行うため次の３点について検討し授業で実践することを共有した。１点目は、本時の学びと振り返りの観点を明確にすることである。生徒が本時を通して何を学ぶのか明確にし、教師間で共通理解を図ったり、生徒が自分の目標を意識して活動するためのめあての提示や振り返りの方法について検討したりする。２点目は、自己評価と他者評価の両方の機会を設けることである。自己評価だけでなく、教師や友達同士、他学年の生徒から評価をもらう機会を設定する。３点目は振り返りシート等の学習の履歴を残すことである。小単元ごとの振り返りシートを作成するなど、単元を通した自分の学びについて振り返ることができる工夫を検討する。

（２）教師同士の対話の充実を図った授業改善

①全校授業研究会

第３学年　単元名「みんなのためにプロジェクト～秋の飾り作り～」９月３日（火）

本単元では、季節を象徴する飾りを考え、制作した飾りを職員室前や職員玄関前等の校内の数か所に装飾した。「秋の飾り」というテーマに沿って生徒が自分たちのアイディアを形にし、実際に装飾物を制作する活動を通して、仲間と一緒に作り上げる喜びを感じたり、飾りを見る人の立場に立って考えたりすることをねらいとした。また、飾りを見た人たちから感想や意見をもらって試行錯誤することで、相手が喜ぶ仕上がりを意識したり、相手のためにという気持ちをもって活動したりする姿を引き出すことを目指した。

提示授業では、「相手が喜ぶ仕上がり」を意識して、前時までの話合いで決定したぶどうの飾り作りに取り組んだ。

１）事前授業検討から

・「相手が喜ぶ仕上がり」における「相手」とは誰なのかを明確にすることで、相手が喜ぶ仕上がりについて具体的に考えることができるのではないか。

→「相手」は装飾を目にする学校職員としていたが、その中でも普段から関わる機会が多い事務職員２名を具体的な相手のイメージとして設定し、インタビューを通して意見を聞く機会をつくる。

・生徒が自分の取組や頑張りを実感できるような振り返りの方法や学習シートを工夫することで学びの実感につながるのではないか。

→前時までの制作物と本時の制作物を実物や写真で比較し、仕上がりの変化を実感できる機会を設定する。

→生徒一人一人の個別のねらいが具体的に示された学習シートを用意し、ねらいに応じた自分の頑張りを具体的に振り返る時間を設定する。

２）授業協議から（自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイントを活用した授業協議）

ポイント①	児童生徒一人一人が自ら活動したり考えたりすることができる状況づくり
・生徒一人一人が自分のやることをよく分かって黙々と活動に取り組んでいた。 ・手本が生徒の実態に合っていて分かりやすかった。	
ポイント②	自然な協働性を生むテーマ設定や学習活動、学習集団の工夫
・自然に道具を共有したり、お互いの進捗を確認し合ったりする姿が見られた。 ・個々の活動だけでなく、みんなで作り上げていく楽しさを味わえるような学習活動を取り入れたい。	
ポイント③	多様な場や人材の活用
・制作に取り組む活動だけでなく、できた制作物を実際の場所に飾る等の動きを取り入れることで、さらに新しい気付きを得たり、試行錯誤したりするきっかけになるのではないか。	

次時に向けた手立ての工夫
・一人一人の取組の様子を見合ったり、評価し合ったりする「共有」の時間を設定する。 ・ペアで作る、役割を分担する等の活動を意図的に取り入れる。 ・ねらいに応じて活動グループを分ける。 ・個々に作った物を組み合わせて完成形を提示することで、自分の取組が生きていることを感じたり、「できた」という実感をもったりすることにつながる。

３）指導助言から

・口頭の指示だけではイメージがもちづらい生徒も、手本を見ることで、紙の裏と表を間違えないようにしたり、のりの量を調整したりしていた。また、それらの微妙なこつが具体的な言葉で個々の学習シートに「がんばること」として示されており、個々の「がんばること」に応じた振り返りができていた。

・導入部分の時間を短くし、活動に自由度をもたせることで新たなアイディアがたくさん出てくるのではないか。「次は〇〇を作りたい」と発言した生徒がいたが、どうしてそう考えたのか、そうすることで飾りを見る人たちにどんなことを届けたいのか発問したり、相手の立場に立って考える機会を保障したりすることで、単元の目的である「みんなのために」に近づくことができるのではないか。

〈全校授業研究会における学部研究テーマと関連するキーワード〉

「取組や頑張りの共有」　「単元の目的と本時のつながり」

②公開研究会事前授業研究会

第２学年　単元名「中学部　ハッピースマイル大作戦①」10 月１日（火）

本単元では、中学部１年生を「ハピスマフェス」というお楽しみ会に招待し、楽しんでもらうために三つのグループに分かれて内容を考えたり、準備を進めたりした。「１年生に楽しんでもらう」という共通の目的の下、自分の考えを友達に伝えたり、友達の意見を聞いたりして友達と協力し、互いのよさを認め合いながら自信をもって活動することをねらいとした。

提示授業では、事前に実施した話合いやアンケートから、「くじ引き」を企画することを選択した男子４名、女子３名の学習グループが、ハピスマフェス当日に向けて入口の看板や教室内の装飾を制作する学習活動を展開した。

１）事前授業検討から

・制作の進捗状況をグループ全体で共有したり、生徒同士で評価し合う機会を設定することで意見を出し合ったり、認め合ったりできるのではないか。

→制作活動の途中に、その時点でできている制作物を見せ合い、よいところやアドバイスを伝え合う時間を設定する。

・実際の取組の様子を写真や映像を使って振り返ることで、より自分の頑張りを実感できるのではないか。

→本時のねらいとして示している「協力」という観点で見られたよい場面をタブレット端末で撮影して振り返りの場面で提示する。

２）授業協議から（学びの実感について　写真２）

〈導入について〉

・導入の時間が少し長かった。学習活動の意義を確認し、整理することで、導入を短縮して制作の時間を十分確保できるのではないか。

〈振り返りの観点について〉

・本時の取組を振り返る観点をさらに整理することで、より達成感を得

写真２　学びの実感についてのグループ協議

ることができるのではないか。本時では次の三つの観点が混在した振り返りになっていた。１点目は想定していた物を制作することができたか、２点目は本時のめあてである「協力」ができていたか、３点目は１年生に喜んでもらうために制作したか。一つに絞って評価することで、より分かりやすく自分の学びを実感できるのではないか。

〈単元の目的を意識させる工夫〉

・「１年生を喜ばせるためにこの活動に取り組んでいる」ということを生徒がよく分かって活動していた。単元計画の提示の仕方やこれまでの積み重ねが有効だった証だと思う。

〈生徒一人一人が自ら活動するための工夫〉

・教師の支援が少し多かった。徐々に教師の支援を減らし、生徒同士が協力しなければできないような仕掛けを検討していきたい。

・生徒によっては、準備された活動が難しく、教師の支援を多く必要とする姿が見られた。そういった生徒についてはもう少し活動を簡単なものにすることで、自分で取り組んだり、生徒同士が助け合ったりする姿をさらに引き出せるのではないか。

３）指導助言から

・場面設定や学習活動の自由度によって生徒の発言をある程度コントロールすることができる。どこまで自由度をもたせ、どんなやりとりを期待するのかという視点でグルーピングや活動内容を検討してみてはどうか。

・発達障害の生徒たちの多くは、自分の成長に客観的に気付くことを苦手とする傾向がある。自分の学びを実感し、自分の成長として気付くためには、学びの足跡を残していくことが大切である。１時間の学びは小さなものであるが、単元全体など長い期間を通してみると確かな成長を見取ることができる。また、学びの足跡を残すだけでなく、それらを見返す時間を確保し、教師と一緒に見返すことも重要である。

４）授業改善に向けて

・生徒の実態に応じた「本時の学び」を明確にし、それらを達成するためのグルーピングの工夫や、個別の手立て、教師の発問等について検討していく。

・単元の目標、授業のめあて、個々の「本時の学び」等様々な観点があるので、本時のまとめの時間を活用して、何をどのように振り返ることで生徒がより達成感を感じられるか検討する。

〈公開研究会事前授業研究会における学部研究テーマと関連するキーワード〉
「一人一人の本時の学びを想定した学習活動や手立ての工夫」

③公開研究会

第３学年　単元名「中学部　ハッピースマイル大作戦②」～おばけランドに招待しよう～

本単元では、中学部３年生をおばけランドに招待し、楽しんでもらうために三つのグループに分かれて内容を考えたり、準備を進めたりした。これまでの学習では、「みんなを楽しませるために」を合い言葉に、自分の好きなことや得意なことを発表したり、１年生を招待してお楽しみ会を開催したりしてきた。これまでの学習を通して、関わる相手が同学年から他学年へと広がり、少しずつ相手を意識して考える姿が見られるようになってきた。一方で友達同士のやりとりや言葉遣い、コミュニケーション面などに課題のある生徒も多い。本単元を通して、友達と関わりながら一緒に制作したり、考えを伝え合ったりすることで、互いのよさを認め合い、協力して活動する姿を引き出すことをねらいとした。

提示授業では、おばけランドの「おばけやしき」を選択した男子５名、女子３名の学習グループがおばけやしきの改良を行った。事前に実施したプレオープンでのお客さんの様子や感想をもとに、さらにお客さんを驚かせるためのアイディアを出し合い、試行錯誤しながらおばけやしきを改良する学習活動を展開した。

１）事前授業検討から

・「お客さんがわっと驚くおばけやしきにするには？」というめあての「わっと驚く」のイメージを生徒が分かるように伝える工夫が必要である。
→「わっと驚く」のイメージをキーワードやイラストを用いて生徒に提示する。

・おばけやしきをよりよくするためのアイディアを考えることが難しい生徒もいるのではないか。
→生徒の実態に応じて、選択することで自分の考えを伝えられるように教材・教具を工夫する。

・生徒がより達成感を感じるための振り返りの工夫が必要である。
→お客さんとしておばけやしきを体験するゲストを招待する。おばけやしきを体験した人が実際に驚いている様子を写真や動画で生徒に見せる。

２）授業協議から

〈単元設定〉

・生徒の興味・関心に寄り添った単元設定である。また、対人的な学習活動が多く設定されているので、他者とのやりとりやコミュニケーション面に関わる力を育むことができるのではないか。

〈動画や写真の効果的な活用〉

・導入場面でプレオープンの感想を動画で見る場面やまとめの場面でゲストが驚いている写真を見る場面などで、動画や写真が効果的に活用されていた。

〈試行錯誤できる環境設定〉

・考えたことをすぐに実際のおばけやしきで試すことができる環境設定だったので、生徒が自発的に行動する姿が多く見られた。また、実際に試すことで新たな気付きを得たり、気付いたことを友達に伝えたりする姿も見られた。

〈めあてに対応したまとめ〉

・まとめの場面では、めあてを達成するために工夫したことをグループごとにキーワードにして発表していた。生徒たちが自分たちの本時の頑張りを端的に捉えられていて、分かりやすいまとめだった。

〈他者からの即時評価〉

・ゲストからの感想を聞いている生徒たちの表情がとてもよかった。本時の授業において、他者からの即時評価は、達成感を得るための有効な手立てだった。

〈学びの履歴の残し方〉

・単元の振り返りとして、学習シートに取組の様子の写真や制作した物の写真を載せてみてはどうか。また、写真と併せて自分が感じたことや他者からのコメントを残すことで、自分の頑張りや成長をさらに実感できるのではないか。

〈学びを価値付ける意識〉

・単元を通して育てたい力（本単元においては、他者との関わりやコミュニケーションに関する力）を教師間で共通理解し、よい場面が見られたときにその姿を評価する言葉掛けをすることが重要であると改めて実感した。学習活動の過程で流れていってしまいがちなよい場面を価値付けられるようにしていきたい。

３）指導助言から

・動画を見たり感想を聞いたりするときに、メモを取る習慣を育ててほしい。大切だと感じることを自分なりにキャッチして端的に言語化するという力は様々な場面で活かすことができる。また、生徒が書いたメモを教師が見ることで、生徒が着目したポイントを知ることができる。

・協働的な学びと個別最適な学びの両面から授業を考え、実践している取組がよかった。この二つの学びを両立させつつ、生徒がより学びやすい授業を考えるためには、単元構成や授業構成で二つの学びを分けて組み立てることが大切である。

・教師が意図している学んでほしいことと、実際に生徒たちが学んでいることとの間にどのくらいの距離があるかということを意識して授業を実践してほしい。学びは自由なものなので、生徒たちが学んでいることを素直に評価して、教師が想定していた学びとの距離を確認することが学びの追求につながるのではないか。
・生徒が自分たちで話合いを進めて行けるような工夫があるとよい。信頼できる人が目の前にいるとその人に任せてしまう傾向がある。自分たちで責任をもって話合いをするという役割を生徒に与えたり、グルーピングを工夫したりしてみてはどうか。
・他者評価だけでなく、生徒が自分たちで実際に体験したり、自己評価したりすることも大切である。

４）授業改善に向けて

・自分たちで企画したおばけやしきを自分たちで体験する機会も設定する。
・単元の取組や制作した物の写真、自分の感想、教師からのコメント等を要素とした学習シートを用いて単元を振り返る。

〈公開研究会における学部研究テーマと関連するキーワード〉
「学びの履歴の残し方」　「生徒の学びを価値付ける意識」

４　まとめ（成果とこれからに向けて）

（１）「本時の学び」を明確にした授業づくり

多様な実態の生徒が同じめあてに向かって学習する生活単元学習において、「学びの実感」を実現するためには、生徒の一人一人の「本時の学び」を明確にする必要があり、授業検討会やシミュレーションの機会を通して生徒の実態に応じた「本時の学び」について意見を交わした。単元目標、本時のめあて、生徒一人一人の「本時の学び」を順序立てて考えることで、生徒が授業の中で何のために何をするのか、また教師がどのように評価するのかが明確になり、生徒一人一人の「分かった」「できた」と感じる瞬間を多く引き出すことができた。

「本時の学び」を明確にした授業づくりを重ねたことで、生徒が自分の考えや学習の成果に手応えを感じ、進んで発表する姿が多く見られた。また、これまで発表することに対して消極的だった生徒も自ら発言したり、挙手して発表したりする姿が見られるようになってきた。

（２）生徒の学びを価値付ける意識

２年生では、単元を通して育てたい力を「他者との関わりやコミュニケーションに関する力」とし、関連するよい場面を教師が意識的に評価しながら学習を展開した。その結果、以前よりも他者の提案や意見を受け入れられるようになったり、集団に参加してみんなで目的を達成しようとしたりする姿が見られるようになってきた。また、３年生では、単元を通して育てたい力を「みんなのために行動する力」として学習を重ねたことで、「みんなのためにプロジェクト」というテーマの下、自分たちで企画したり、役割分担したりして学習に向かえるようになってきた。

以上のことから、授業検討会や学年会等の機会を活用して、単元を通して育てたい力を教師間で共通理解し、学習活動の過程で見られたよい場面を教師が一つ一つ価値付け、生徒に伝えることで、生徒の小さな成長が積み重なっていくと考える。

（３）学びの履歴の残し方と活用方法

１時間の授業の中で「学びの実感」を実現できるようになってきた一方で、長期的な視点で自分の成長に気付くための手立てについてはさらに検討が必要である。公開研究会で提示した単元の振り返りについては、取組の様子の写真と自分の感想、教師からのコメント等をワークシートにまとめて振り返りを行った。自分の取組を写真で見返すことで、頑張ったことや感じたことを言語化し

たり、教師からのコメントを見ることで、自分では意識していなかった頑張りに気付く様子が見られたりした。一方で、生徒がより自分の成長を実感するためには、過去の自分と現在の自分を比較する視点が必要であるという意見も挙げられた。一人一人の生徒が自分の成長を実感するためには、どのような観点で学びの履歴を残し、いつ振り返るのかということについて引き続き検討していきたい。

中学部２年　生活単元学習（お化け屋敷グループ）　学習指導案

日　時：令和６年 12 月４日（水）10：15～11：15
場　所：中学部２年２組教室、学習室
生　徒：男子５名、女子３名、計８名
指導者：髙橋裕子（Ｔ１）、原田もとよ（Ｔ２）
　　小林　哲（Ｔ３）

１　単元名

「中学部　ハッピースマイル大作戦②」　～おばけランドに招待しよう～

２　生徒と単元

（１）生徒について

本グループは２年生 24 名のうち、おばけランドの「おばけやしき」を選択した男子５名、女子３名の学習グループである。本学年の生徒は明るく、みんなと一緒に活動に参加したり、楽しんだりできる生徒たちである。しかし、人との関わり方や言葉遣いなどコミュニケーション面に課題のある生徒も多い。これまでの学習で、生徒たちは「みんなを楽しませるために」を合言葉に、中学部１年生を招待してお楽しみ会を企画したり、一人一人の好きなことや得意なことを生かして、学習したことを発表したりする学習を積み重ねてきており、関わる相手が同学年から他学年へと広がってきている。また、少しずつ楽しませる相手を意識して内容を考えることができるようになってきており、１年生からの感想やお楽しみ会当日の様子を見て、「楽しんでもらえてよかった」と達成感を感じた生徒も多かった。また、お楽しみ会のゲームのルールや飾りについて話し合ったり、必要な物を制作したりすることを通して、自分の気持ちや考えを伝え、友達の意見や周りからのアドバイスを少しずつ受け入れられるようになってきている。本単元を通して、友達と関わりながら一緒に制作したり、３年生を楽しませるためのアイデアを話し合ったりし、協力して取り組む姿を目指したい。

（２）単元設定理由

これまで、「中学部を楽しませよう」の学習では、中学部１年生を招待してモルックを一緒に行ったり、くじびきやボウリングなどのゲームを準備して「ハピスマフェス」を開いたりした。楽しんでもらうためにはどうしたらいいか、どのような準備をしたらいいかを学級で話し合い、１年生が分かりやすいようにルール説明を考えたり、教室の装飾やプレゼントを制作したりするなどお互いに協力しながら進めた。前回の「ハピスマフェス」では、プレオープンを実施し、１年生から感想をもらったり、交流した公立美術大学附属高等学院の生徒や１年生の職員からアドバイスをもらったりしたことで、より楽しんでもらえるように改善し、本番に向けて準備した。本番後に、１年生から動画で感想をもらい、生徒たちは喜んでもらえたという達成感を感じ、「今度は３年生を招待したい」、「違うゲームや内容でもやってみたい」という意見が多く出た。このことから学年でアンケートを取り、共通のテーマを「お化け」とし、３年生全員が楽しめる内容を考え、「何かを釣るゲーム」、「何かを倒すゲーム」、「お化け屋敷」の三つのコーナーを作ることにした。これまでの経験を生かして３年生に楽しんでもらうことを意識しながら内容を考えられること、お互いに考えを伝え合い、友達と関わったり一緒に制作したりすることができると考え、本単元を設定した。

（３）指導について　※下線は各学部学科の研究テーマに関連した手立てを示している。

【生徒一人一人が自ら活動したり考えたりすることができる状況づくり】

・意欲的に取り組めるように、<u>どのような内容にしたいか事前にアンケートを取り、その結果を基に三つのグループを設定する。</u>
・イメージをもったり意見を出したりしやすいように、タブレット端末で調べたり、教師が設定した簡易のお化け屋敷を体験したりする時間を設定する。
・改善点に気付けるように、<u>確認するポイントを示して動画を見ながら振り返り</u>ができるようにする。

【自然な協働性を生むテーマ設定や学習活動、学習集団の工夫】

・自分の考えを伝えたり、話し合ったりできるように、やりたい内容を自分で選択する場面を設定する。

・友達と関わることができるように、小グループを作り役割分担して制作したり準備したりする。

・お互いのよさを認め合えるように、学習の様子を写真に撮り、頑張っている様子をお互いに見合うことができるような振り返りをする。

【多様な場や人材の活用】

・お化け屋敷の演出について、他のグループや学部の職員に体験してもらい、感想やアドバイスをもらう時間を設定する。

3　単元目標

知：知識及び技能　思：思考力・判断力・表現力等　学：学びに向かう力・人間性等

（1）お化け屋敷を作るために必要な準備が分かったり、制作したりする。・・・・知

（2）「３年生に楽しんでもらう」ことを意識し、進め方や演出を話し合ったり、工夫したりする。・・・・・思

（3）自分の意見を伝えたり、相手の意見を聞いたりしながら、お化け屋敷を完成する。・・・学

4　単元計画（総時間数 32 時間／本時 23、24 時）

小単元名と活動内容	主なねらい（知 思 学）	時数	学習活動	関連する教科等
オリエンテーション ・話合い活動	・自分の意見や考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりしながら、３年生を楽しませるための内容を考える。思 学	4	・どのようなゲームやコーナーにするか話し合う。 ・本番までに必要な準備を考える。	国語
準備をしよう① ・体験 ・制作活動 ・プレオープン ・振り返り ・改善	・３年生に楽しんでもらうことを考えながら、準備をしたり、演出を考えたりする。知 思 ・アドバイスを受け入れて、どのように改善するか考える。 学	14	・簡易のお化け屋敷を体験する。 ・役割分担し、コーナーの進行練習をする。 ・３年生とのお楽しみ会に向けて、同学年の他のグループの友達や中学部の職員等に体験してもらい、アドバイスや感想をもらう。	美術 国語 数学 音楽
準備をしよう② ・話合い活動 ・制作活動 ・振り返り ・改善	・本番に向けて改善したいことなどを友達と話し合ったり、準備したりする。 知 思 学 ・テーマに合わせて、会場の飾りを作る。 思 学	５、６/10時	・体験してもらったアドバイスからもっと驚くような演出にするにはどうしたらよいかを話し合う。 ・話し合ったことを生かして、お化け屋敷の演出を実践する。 ・会場の飾りを考えて制作する。	美術 国語 音楽
・お楽しみ会本番 ・振り返り	・準備したことや練習したことをお楽しみ会で実践する。知 思 学	4	・３年生を招待し、お楽しみ会を実施する。 ・本番を振り返り、次回に生かせることや改善点について話し合う。	

5　生徒の実態と目指す姿

氏名・性別	実　態	単元を通して目指す姿（自ら学び続ける子どもにつながる姿）
A（男）	・必要な準備を考えたり、自分の考えを伝えたりできる。一方的に話してしまうことがある。	・アドバイスや友達の考えを受け入れながら、よりよいお化け屋敷になるように演出を考える。

B （女）	・思ったことを話したり、友達の考えを聞いたりする。相手の考えをなかなか受け入れられないことがある。	・相手の考えを受け入れながら、グループの友達と一緒にお化け屋敷の演出を考える。
C （男）	・簡単な言葉で気持ちを伝えたり、よいと思った方を選択したりする。自分の役割に最後まで取り組む。	・友達と一緒にお化け屋敷の演出を考え、制作したり、役割を実践したりする。
D （男）	・自分の考えを大まかに話すことができる。やることが分かると、自分で制作を進めたり、活動したりする。	・友達と一緒にお化け屋敷の演出を考えたり、自分から活動したりする。
E （女）	・提示された選択肢から選び、自分の考えを伝える。自分の役割が分かると、最後まで行うことができる。	・友達と一緒に演出のやり方を練習したり、演出での自分の役割に取り組んだりする。
F （男）	・選択肢から自分がよいと思う方を選ぶ。教師と一緒に制作したり、自分の役割を練習したりする。	・自分の役割が分かり、合図をもとに音を鳴らしたり、タブレットを操作したりする。
G （男）	・必要な準備を考えたり、自分の考えを伝えたりすることができる。自分の役割に最後まで取り組む。	・自分の考えを伝えながら友達と一緒にお化け屋敷の演出を考えたり、演出で状況を見て判断し動いたりする。
H （女）	・必要な準備を考えたり、自分の考えを伝えたりできる。相手の考えをなかなか受け入れられないことがある。	・アドバイスや友達の考えを受け入れながら、お化け屋敷の演出を考えたり、実践したりする。

６　本時の計画（32 時中の 23、24 時）

（１）本時のねらい

・お化け屋敷の演出で改善したいところに気付いて、どのように改善するのか話し合う。
・話し合った事柄を基に、必要な物を制作したり、練習したりする。

（２）学習過程　〇は個別のねらい、→は手立てを示している。

時間（分）	学習活動		教師の働き掛け、指導上の留意点
5	導入	1 本時の学習内容とめあてを知る。	・これまでの学習を振り返られるように、学習予定表を掲示する。 ・本時は、プレオープンの動画を見て、招待する３年生にもっと驚いてもらうために話し合ったり、制作したりすること、話し合ったことを生かして、本時は学習室でやってみることを伝えたりする。 ・めあてを提示し、工夫するために、<u>何を、どのようにするのかを動画を見ながら考えることを伝える</u>。 めあて：お客さんがわっと驚くおばけやしきにするには？
35	展開	２プレオープンの動画を見て、グループで改善したいところを話し合う。	・どのような演出をしたかを思い出したり、体験してもらったお客さんの反応を知ったりすることができるように、<u>前時のプレオープンの様子や感想の動画を見る時間を設定</u>する。　（Ｔ１） ・三つのグループに分かれ、動画を見ながら改善したいところについて話し合うことを伝える。 ①人が現れて驚かせるグループ　（Ｔ１） ②音で驚かせるグループ　（Ｔ２） ③何か物が出てきて驚かせるグループ（Ｔ３） ・改善したいところに気付けるように、動くタイミングや動き方、音量や声の出し方、色、形など、<u>動画を見るときに注目するポイントを示したチェックリストを準備する</u>。 ・チェックリストを基に、<u>何を、どのように変えていくかを話し合う時間を設定する。</u>

10		３話合いをもとに、制作したり、練習したりする。	・話し合ったことを適宜思い出せるように、ホワイトボードを準備し、記入できるようにする。 ・自分たちで考えながら制作できるように、画用紙や毛糸、棒、布などを長テーブルに準備しておく。 ・練習するときには、チェックしたポイントごとにいろいろと試してみるよう言葉掛けをする。 ＜人が現れて驚かせるグループ＞ Ａ：〇動画を見て自分の考えを伝えたり、友達の考えを受け入れたりして改善したいところについて話し合う。 →確認するポイントを示したチェックリストを提示し、お互いの考えを伝え合い、友達の意見を試してみることを提案する。 Ｇ：〇何をどのように変えたいか自分の考えを伝える。 →改善したいところに気付けるように、確認するポイントを示したチェックリストを提示する。 Ｂ：〇自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりしながら、変えたいところを練習する。 →グループで話し合ったり、話し合ったことを生かして実践し、友達や教師と見合いながら練習したりする場面を設定する。 ＜音で驚かせるグループ＞ Ｈ：〇改善したいところに気付き、どのように変えたらよいか自分の考えを伝える。 →動画で確認するポイントを示したチェックリストを提示する。 Ｅ：〇友達と役割を確認したり、演出で工夫するところを練習したりする。 →グループで動画を見たり、音の出し方等を練習したりする時間を設定する。 Ｆ：〇自分の役割が分かり、最後まで取り組む。 →グループや教師の友達と一緒に音を出すタイミングを練習する時間を設定する。 ＜何か物が出てきて驚かせるグループ＞ Ｃ：〇友達と一緒に改善するところを確認したり、演出で工夫するところを練習したりする。 →グループで動画を見ながら改善するところを話し合ったり、練習したりする時間を設定する。 Ｄ：〇友達と一緒に改善するところを確認し、自分から必要な物を準備したり練習したりする。 →確認するポイントを示したチェックリストを提示したり、制作や準備に必要だと考えられる物を黒板前の長テーブルに準備したりしておく。
		４改善したところを生かして、学習室で実践する。	・意欲が高まるように、２名のゲストに体験してもらうことを伝える。 ・よりよいお化け屋敷にするための参考にできるように、初めて体験する人と前回も体験した人の２名に依頼する。 ・制作が途中でも、できているところまでをやってみるように伝える。 ・生徒たちが達成感を感じ、これからの意欲につながるように、体験した２名からよかったところについて話してもらう時間を設定する。

10	まとめ	５改善したところを紹介する。 次時の活動内容を確認する。	・三つのグループがそれぞれ何を、どのように改善したのか発表する時間を設定する。 ・発表しやすいように、話合いのときに記入したホワイトボードを見せたり、実際にやりながら発表したりするように伝える。 ・期待感が高まるように、まだ途中のところは続きを制作したり、本番の会場である会議室で練習したりすることを伝える。

（３）評価

＜生徒の評価＞

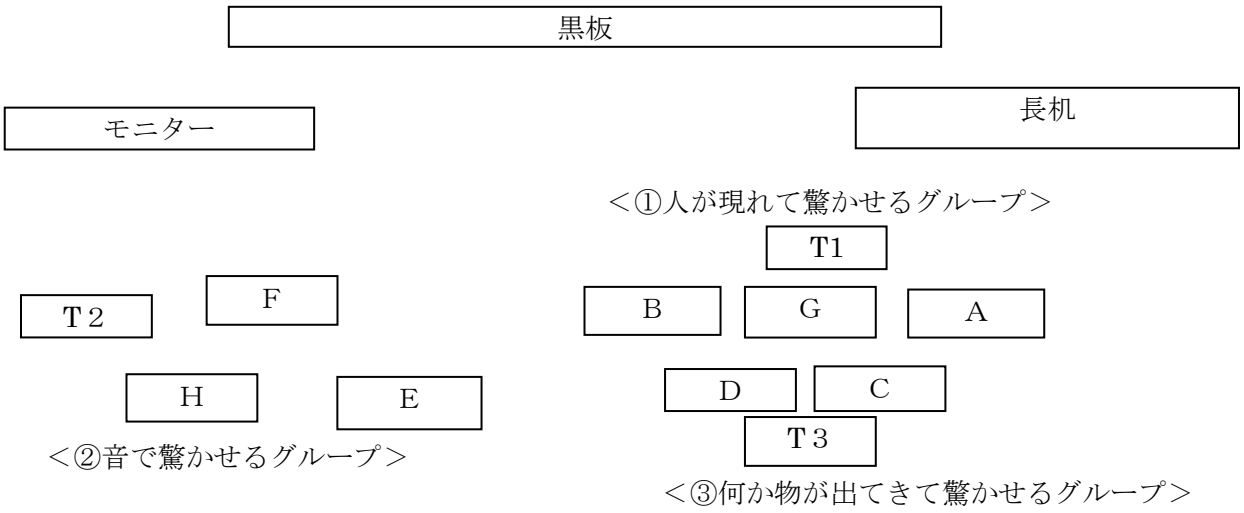
・改善したいところに気付き、何を、どのように改善するのか考えることができたか。
・話し合ったことを生かして、グループで必要なものを制作したり、演出の練習をしたりできたか。

＜教師の手立ての評価＞

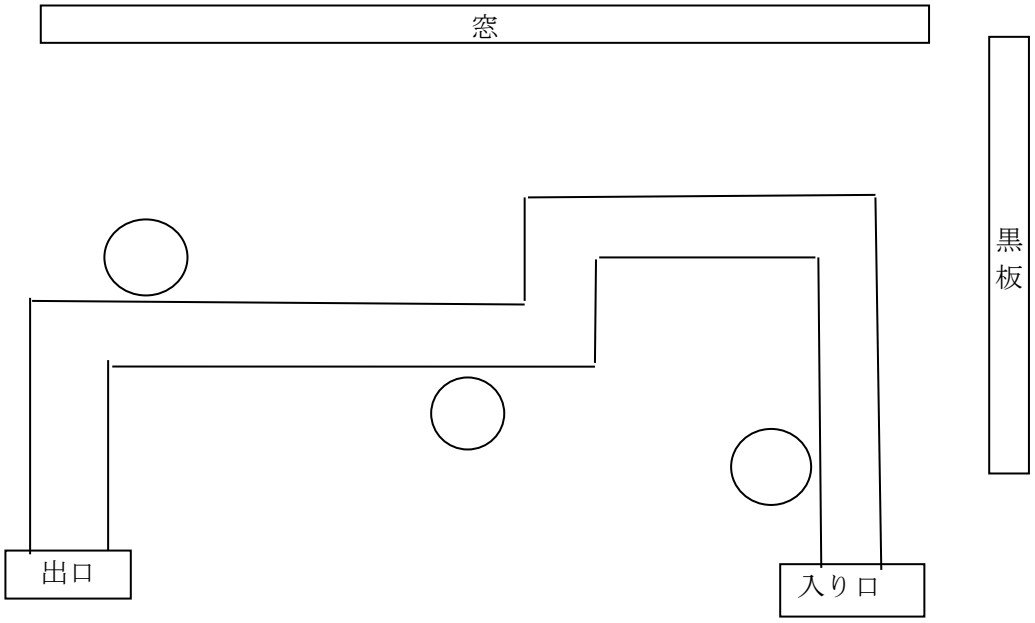
・何を、どのように改善するかに気付くための動画やチェックリストは有効だったか。
・話し合ったことを生かせるような場面設定や授業展開ができたか。

（４）配置図と板書計画

＜２年２組教室＞



＜学習室＞　　○の辺りで、三つのグループがそれぞれ待機して驚かせる。



＜板書計画＞

お化け屋敷の準備をしよう

めあて：お客さんがわっと驚くようなお化け屋敷にするには？

何を？どのように？

今日の活動：　①話合い　→　作る　練習する
　　②変えたことをやってみる

まとめ

＜①何かが現れて　＞　＜②音で驚かせる＞　＜③何かが出てきて＞

驚かせるグループ　グループ　驚かせるグループ

ホワイトボード
わっと驚くように
□を□した

ホワイトボード
わっと驚くように
□を□した

ホワイトボード
わっと驚くように
□を□した

学習計画表

写真

年 間 指 導 計 画 及 び 指 導 記 録

指導の形態	生活単元学習

記録者：髙橋　ひな子

学習グループ・生徒	中学部２年１組８名　２年２組８名　２年３組８名　計２４名	指導者	髙橋ひな子　小林哲　長谷部優子 髙橋裕子　小野格　原田もとよ 菊池良一　杉渕陽子　武藤美和子
年間目標	(1) 学習の目標に向かって、自分で考えたり、友達と相談したりして、友達と一緒に活動する。（知） (2) 周囲の人に尋ねたり、本やＩＣＴ機器を活用したりして、考えや制作物をよりよいものにしようとする。（知） (3) 自分の思いを伝えたり、友達の考えを聞いてもう一度考え直したりして、人との好ましい関わり方や表現の仕方を身に付ける。（思） (4) 自分の役割が分かり、友達と協力して最後までやり遂げる。（学）		

合わせた（関連する）教科等	国語、数学、音楽、美術、保健体育、職業・家庭

学期	単元（題材）名及び主な学習内容	主な目標	指導の記録	実施時数
前期	○新しい学級 ・学級委員、係決め ・学校や学級のルールについて ・地域散策（大川端公園など） ・学級目標 ・１学期の目標決め ・新入生歓迎会に向けて	・学級目標や学級委員、係活動について、自分で考えたり、自分の意見を出したりする。 ・学級目標や教室の掲示物等を作り、学校生活に期待感をもち、ルールを守ろうとする。 ・新入生を迎え、上級生の自覚をもつ。	・学級での係決めでは、自分の意思を表出したり、選択したりする機会を多くした。様々な場面で自分の気持ちや意見を話すようになった。同じ係を希望した生徒同士で譲り合う場面も見られた。 ・新入生歓迎会に向け、昨年度の生活単元学習で学習したことをもとに発表した。自分の役割をすぐに覚え、１年生に歓迎の気持ちを伝えようと頑張った。	予定時数 (113) 実施時数 (135)
	○頑張ろう！運動会 ・個人の目標 ・万国旗の制作 ・目標の振り返り、感想	・運動会に向けて、個人の目標を考えたり、運動会に関係した制作をしたりして、頑張ろうとする気持ちをもつ。	・昨年度の経験が生き、進んで万国旗の制作をした。地図の本に国旗が付いていることを伝えると、地図で場所を確かめたり、国の情報を見たりして、自分の目標を具体的に考えて書いた生徒が多かった。万国旗の制作では、本を見て国旗を選びながら、地図で場所を確かめるなど意欲的に作った。	
	○中学部を楽しませよう ・１年生とモルック ・招待状作り ・役割決め ・モルックのルール説明 ・ゲームの進行 ・美大附高等学院生とモルック ・自己紹介カード作り ・役割決め ・モルックのルール説明 ・ゲームの進行	・モルックのルールややり方をどのように伝えるか考える。 ・中１生徒にどのようなことをしたら喜んでもらえるか考え、相談し、役割分担する。 ・自分のやりたい役割を選び、友達と協力して制作したり、準備をしたりする。 ・中１生徒にアンケートの依頼や感想インタビューをして、丁寧な言葉遣いや態度を身に付ける。 ・美大附属高等学院生にモルックのやり方を伝え、交流する。	・先輩から教えてもらったモルックを１年生に教えて仲良くなりたいという気持ちをもって、各学級で役割を決めて取り組んだ。 ・役割分担を自分たちで決めたり、司会原稿を自分たちで考えたりする話合いの時間を設けた。また、プレゼントを作って渡すなど、生徒のアイディアを取り入れたことにより、活動の楽しさや達成感を高めることにつながった。 ・中１と行ったモルックで美大附の生徒と関わった。初めてのことが苦手で緊張しがちな生徒も慣れたモルックで安心して交流した。活動内容は同じだが、関わる人を変えて、スムーズに中１から美大附の生徒へと人との関わりを広げることができた。事前に自己紹介カードの交換をしたことで、ペアの相手と会うことへの期待が高まった。	
	○宿泊学習に行こう ・目的や行き先、日程 ・グループ名と係決め ・グループのメンバー表作り等 ・活動内容について ・それぞれの活動に向けて	・宿泊学習でどんなことをするか知る。 ・グループの友達と一緒に事前学習を行い、メンバーを覚え、協力して活動する。	・日程や活動内容の説明を丁寧に行った。 ・キャンプファイヤーのスタンツをグループごとに考えて行った。何をするかリーダーを中心に話し合い、各グループでクイズ、ダンス等を発表した。自分たちで考えて、相談して、決めるということが、自分たちで決めたことだから最後まで頑張る姿、楽しんで練習する姿、よりよくするにはどうしたらよいかを考える姿へとつながった。 ・自分たちでアイディアを出す、考える、決める活動が自主性、積極性、協力する姿、楽しむ姿へとつながった。今後の学習でも大切な視点と考えている。	
	○中学部ハッピースマイル大作戦① ・内容の相談、計画、役割分担 ・準備、制作、工夫	・中１生徒にどのようなことをしたら喜んでもらえるか考え、相談、企画、役割分担をする。	・中１を楽しませるには、どんな内容がよいか考え、生徒の希望する内容でグルーピングした。ゲーム（サッカー、バスケット、	

後期	・ルール決め、進行 ・美大附高等学院とプレお楽しみ会 ・１年生とのお楽しみ会① ・アンケート ・気付いたこと、改善 ・美大附高等学院と共同制作 ・１年生とのお楽しみ会② ○栗田祭で発表しよう ・ステージ発表の内容について ・自分の役割、せりふ、動き ・大道具、小道具、衣装等の制作 ・発表練習 ・振り返り	・自分のやりたい役割を選び、友達と協力して制作したり、準備をしたりする。 ・美大附高等学院生徒にアンケートの依頼や感想インタビューをして、丁寧な言葉遣いや態度を身に付ける。 ・美大附高等学院生徒へのアンケートや感想から、より楽しめるようにするためにどうしたらよいか考えたり、相談したりする。 ・自分のやりたい役割や作りたい物を話したり、選んだりする。 ・自分の役割が分かり、お客さんに伝わるようにどうしたらよいか考えて発表練習をする。 ・発表に向けて友達と一緒に練習したり、大道具や小道具、衣装を作ったりする。 ・発表をよいものにしようと考えて意見を出したり、友達の頑張りを見付けたりする。	ボウリング、くじ引き、的当て）の内容や景品を相談し、必要な物を制作した。 ・より楽しめるようにどうしたらよいか考えるために、プレオープンして、１年生からの感想を聞いたり、美大附の生徒から意見をもらったりする機会を設けたことが有効であった。 ・自分たちのやりたいこと中心から、相手の立場になって考えてみることにつながってきた。	予定時数 (129) 実施時数 (　　)
	○中学部ハッピースマイル大作戦② ・内容の相談、計画、役割分担 ・準備、制作、工夫 ・ルール決め、進行 ・美術大附属高等学院と一緒に準備 ・３年生とのお楽しみ会 ・アンケート ・気付いたこと、改善 ○中学部ハッピースマイル大作戦③ ・中１、中３とのお楽しみ会 ・内容の相談、計画、役割分担 ・招待状作り ・準備、制作、工夫 ・ゲームのルール決め ・進行 ・アンケート ・気付いたこと、感想	・前期の経験から、中３にどのようなことをしたら楽しんでもらえるか考えて相談し、企画する。 ・どのような役割が必要か考えたり、自分のやりたい役割を選んだりして、友達と協力して準備をする。 ・中３生徒にアンケートの依頼や感想インタビューをして、丁寧な言葉遣いや態度を身に付ける。 ・中１、中３のアンケートや感想から、より楽しめるようにするためにどうしたらよいか考えたり、相談したりする。 ・自分の役割に責任をもって取り組み、友達と協力して準備をする。		
	○ 新入生をむかえよう ・６年生との交流の計画 ・交流会の実施 ・振り返り	・小６児童への接し方を考え、どのようなことをしたら喜んでもらえるか計画する。 ・自分のやりたい係を選び、友達と協力して準備する。		
	○ありがとう３年生 ・卒業生を送る会に向けての準備 ・メッセージやプレゼント、飾り作り	・自分でやりたい係や作りたい物を選び、友達と協力して活動する。 ・３年生への感謝の気持ちをもって、メッセージやプレゼント、飾りを丁寧に作る。		

評価		**年間総計** 予定時数 (242) 実施時数 (　　)

高等部　普通科研究

2人1組で協力してるか
就寝時枕を置いているか
古い日付はバラバラにおいてあるか
指示通りにだれてるか
同じ所に置いてるか

高等部普通科研究

～互いに学び合い、自分や他者の考えに気付き、行動する姿を目指して～

１　学科研究テーマ設定理由

昨年度までの高等部普通科では、協働的な学びに重点を置き、研究を進めてきた。生徒の得意なことを生かした役割や活動内容の設定、ペア、グループなど多様な学習集団の工夫により、積極的に自分の意見や考えを伝えたり、友達と関わりながら活動しようとしたりする生徒の姿が見られるようになってきたなどの成果が挙げられた。

今年度は、周囲の人との関わりから、他者の様子を見たり、模倣したり、意見を聞き取り入れたり、自分の考えと比べたりする中で、自分の考えを広げたり主体的に活動したりする生徒の姿を目指し、本研究テーマを設定した。

また、学科全体で生徒が学び合う姿やその姿につながる手立ての工夫を共有しながら生徒の見取りの再考と学習活動や手立ての改善を進めていくこととした。

２　研究仮説

生徒が互いに学び合い、自分や他者の考えに気付き、行動する姿を目指して、生徒が互いの考えに触れ、自分の考えや思いを広げることができるような学習活動や手立ての工夫の検討、実践、改善を図る。このような授業づくりを通して、自ら学び続ける生徒の育成が図られるだろう。

３　取組の実際

（１）互いに学び合い、自分や他者の考えに気付き、行動する姿を目指した授業実践の充実

①「学び合う姿」「他者の考えに気付き行動する姿」のイメージの具体化

学年ごとに学び合う姿について授業場面でのイメージを共有した。主に生活単元学習の中で生徒同士が学び合う姿、他者の考えに気付き行動する姿など目指す姿を生徒の実態に応じて具体的に挙げ、学年や学習グループごとに再度確認した。

②各学年の取り組みや成果を共有するための「授業共有シート（写真１）」の作成と活用

学科、学年で共有した目指す姿を受け、その姿の達成に向けて話合いの場面や、生徒同士で考えながら活動する場面を意図的に設定し、成果と課題について検証した。

また、学年ごとに学び合う姿や、他者の考えに気付き行動した姿や手立てについて生活単元学習を中心に振り返り、有効だった手立てについて共有した。

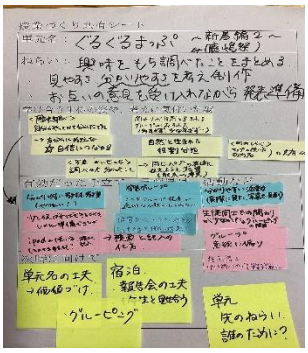


写真１　授業共有シート

（２）教師同士の対話の充実を図った授業改善

全校授業研究会事前検討会で、多様な視点による単元構成や指導案、授業の評価のための全校縦割りによる協議を行った。

公開研究会事前授業研究会で、学科内での単元構成や指導案、授業の評価の協議を行った。

学科内授業シミュレーションで、授業内における支援や具体的な言葉掛けの検討を行った。

①全校授業研究会

第３学年　単元名「チャレンジ・チームワーク・チェンジ②～栗田祝い太鼓の思いをつなげよう～」

10 月４日（金）

本単元は、栗田祝い太鼓の演奏やこれまで栗田祝い太鼓に関わってきた先生たちへのインタビューなどの学習を通して、太鼓を演奏する意味や目的について考えたり、共通の目標に向けて生徒全員で取り組んだりすることで、仲間と適切に関わりながら自分の思いや考えを伝えようとする姿を育てることをねらいとした。

本時は事前授業検討を受け、太鼓の魅力や歴史、太鼓に関わる人の思いについて知るために、インタビューをし、紹介する活動をした(写真２)。

写真２　インタビューした内容の整理

１）事前授業検討から

＜全校授業研究会事前検討会から＞

・10月は､栗田祭に向けて仲間と演奏を成功させたいという方に集中した方がよいのではないか。
・３年生が周囲の人に太鼓の魅力や伝統を伝えるために、３年生自身がその意味を理解したり、実践したりする機会が必要。
・太鼓のよさを十分に実感することで、演奏に取り組む姿勢が変わっていく。
・身近な人へ、太鼓について紹介することから始めてはどうか。より太鼓の魅力に興味をもってもらうために、他学部への紹介は、栗田祭の演奏を聞いてもらってからでもよい。

＜学科内授業シミュレーションから＞

・生徒の思考の流れや発言を予想し、生徒同士のやりとりをつなぐための発問を具体化した。
・掲示物の分かりやすさ、見やすさを生徒の視点で検討した。

２）授業協議から（自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイントを活用した授業協議）

ポイント①	児童生徒一人一人が自ら活動したり考えたりすることができる状況づくり
・生徒の活動が明確に提示されていてよかった。 ・栗田祝い太鼓に関わる人の思いを伝える相手や伝え方を明確にすることで「分かりやすくまとめる」の基準が生徒に伝わり、話合いが深まるのではないか。	
ポイント②	自然な協働性を生むテーマ設定や学習活動、学習集団の工夫
・グループ内の配置や、司会者の設定、話合いの時間の設定について再度見直すことで、生徒同士の学び合いが深まるのではないか。 ・学級全体でまとめをするだけでなく、グループごとにまとめをすることで、生徒の気付きなども分かるのではないか。	
ポイント③	多様な場や人材の活用
・伝える相手によって分かりやすさ、伝わりやすさが違ってくると考えられる。伝える相手を絞って提示することも必要である。 ・身近な相手にインタビューをする機会を設定することで、生徒の意欲につながっている。	
次時に向けた手立ての工夫	
・生徒同士で学び合うために、司会者役を設定し、話合いの時間を長く設定する。 ・「分かりやすく伝える」のイメージを具体的にするために、栗田祝い太鼓のことについて伝える相手を明確にする。 ・生徒の理解を深めるために、「まとめ」で生徒からの感想や振り返りも取り入れる。	

４）指導助言から

・「学び続ける」ために、学習への目的意識をもつことが必要である。「誰に、何を、何のために伝えたいのか」を確認することが大切である。
・生徒同士の評価場面では、アドバイスをする際のポイントを提示していたため、それに沿った発問をしていくことで、アドバイスする方も発表しやすくなったのではないか。
・ねらいを達成するための活動内容や手立ての吟味が求められる。ねらいを焦点化することで生徒たちも分かりやすくなり、評価もしやすい。生徒に分かりやすい表現で伝えることが大切である。実態→目指す姿→本時のねらい→授業の手立てが一つのストーリーとしてつながるように考えてほしい。

＜全校研における学科研究テーマと関連するキーワード＞

「活動の目的の明確化」　「生徒同士の評価のポイントの共有」　「次時につながるまとめ」

②公開研事前授業研究会

第２学年　単元名「ぐるぐるマップ～栗田祭で八峰白神地域の魅力を伝えよう」10 月 11 日（金）

「ぐるぐるマップ」は、昨年度から学年全体で取り組んでいる中心的な単元である。

これまで、新屋の街や鹿嶋祭、宿泊学習先の八峰白神地域についてグループで調べたものを地図にまとめ、掲示してきた。栗田祭で八峰白神地域を紹介することを通して、多くの人に見やすく分かりやすく発表するための工夫について、グループで協働しながら試行錯誤する過程を通して自ら考えたり行動したりする姿を育てることをねらいとした。

本時では、栗田祭のステージ発表に向けて、八峰白神地域の魅力を伝えるための大道具制作を行った。

１）事前授業検討から

＜グループ協議から＞

・高等部として自分たちだけで活動が完結するのではなく、誰かのために貢献できる単元であってほしい。
・栗田祭の発表のためだけの学習活動ではなく、八峰白神の魅力を伝えるための手段として栗田祭の発表という捉えがよい。
・生徒同士の学び合いを目指すとしても、学部だけでなく、他学部や学校外との関わりを視野に入れた学習計画を立てる。

２）授業協議から

・意見交換がしやすいグループを作る。意見交換をする必要性がある場面を意図的につくるのもよいのではないか。
・試行錯誤をする、失敗から学ぶ環境をつくることも手立ての一つとしてあってもよいのではないか。

〈生徒の役割分担について〉

・周りの様子を見て、これをやりたい、もっとやりたいと思えるような環境づくりや、生徒の役割をつくることも必要ではないか。
・やり取りや認め合いのきっかけになる役割分担がよかった。
・何のために、誰に、どのようにして、を明確にすることで話合いがより活発になるのではないか。

〈教師の役割分担について〉

・生徒の気持ちや考えをくみ取って、他の生徒とつなぐことも教師の役割の一つではないか。
・教師の数を必要最低限にすることで、生徒がリーダーとなって主体的に活動を進めていけるのではないか。

３）指導助言から

・ゴールが明確に提示されており、生徒が自分から動く姿、自然に協力し合う姿がたくさん見られていた。
・めあてを提示した際は、分かりやすいとは大きさや形の意味であったが、制作している中でより本物に近づけようということがめあてになっていたため、生徒のまとめと教師が提示しためあてに違いがあると感じた。活動とめあてがリンクしているかどうかについて考え、めあてを達成するための手立てを確認しながら進めることが必要である。
・めあてをどのくらい達成できたか、めあては妥当だったかを評価できる授業づくりを行っていってほしい。また、生徒がよりめあてを意識して活動できるように、教師が決めたり伝えたりしなければいけないこと、生徒が頑張るところを焦点化して考えてほしい。

４）授業改善に向けて

・自分たちが調べたこと、まとめたことを伝える相手を後輩に絞って提示する。
・分かりやすい、伝わりやすいとは何かを具体的にイメージできるように、誰にどのように伝えたいかを明確にする。
・生徒が目的意識と学びを実感できる整合性が図られためあてとまとめの設定

＜全校研における学科研究テーマと関連するキーワード＞

「生徒の気付きを促す教師の働き掛け」　「分かりやすさ、伝わりやすさのイメージの共有」
「めあてとまとめの妥当性」

③公開研授業研究会

第２学年　単元名　ぐるぐるマップ⑧～私の将来編～「後輩に『働くこと』の大切さ、楽しさを伝えよう」

12 月４日（水）

「ぐるぐるマップ」は、１年生から継続して学年全体で取り組んでいる中心的な単元である。

これまで、新屋の街や鹿嶋祭について調べたものを地図にまとめて展示したり、栗田祭で宿泊学習先の八峰白神地域の魅力を伝えたりする学習を行ってきた。本単元では、自分たちが現場実習で感じたことをジョブパークとして後輩に分かりやすく伝えたり、体験してもらったりする活動を行う。働くことの大切さや楽しさを伝えるためにどのように工夫していけばよいのかをグループの中で試行錯誤していく過程で、自ら考え、活動する姿を育てることをねらいとした。

本時は、ジョブパークオープンに向けて、仕事体験ブースの準備と進行練習を行った(写真３)。

写真３　仕事体験ブースの練習

１）事前授業検討から

＜公開研究会事前授業研究会から＞

・中学部３年生に向けて伝えるのであれば、事前に中学部３年生からのニーズを聞くのもよいのではないか。

・相手に何を伝えたいかをしっかりおさえながら授業を進めていって欲しい。
・体験した人からアンケートをもらうことで、生徒の振り返りや今後に向けての意欲につながっていくと考える。

＜学科内授業シミュレーションから＞

・前時までの学習の積み重ねや学習成果物を振り返り、生徒から学習の目的(めあて)を引き出す。

２）授業協議から（互いに学び合う姿について　写真４）

〈生徒の役割分担について〉

・生徒が自分たちでもっとやりたい、と思うような工夫が必要ではないか。活動の中で生徒の役割をもっと増やしてはどうか。
・互いにフォローをし合っている場面がよかった。
・何を誰に伝えたいかを明確に提示することで話合いが活発になるのではないか。

〈教師の役割分担について〉

・生徒が互いにフォローし合っている場面では、教師があえて離れて見守ることも必要ではないか。

〈まとめについて〉

・生徒から出た意見を付箋に書いて提示していたのがよかった。
付箋を整理し、生徒がいつでも見られる所に提示することでより活用できる。
・付箋の記入について、生徒が記入するだけでなく、生徒のつぶやきを教師がメモをすることも付箋の活用につながるのではないか。
・まとめの際に、本時のチェックポイントについてクリアできたもの、クリアできなかったものをチェックし、提示することで次時への意欲につながるのではないか。

写真４　互いに学び合う姿についての協議

３）指導助言から

・単元全体を通して生徒同士の学び合い、協働的な学びの姿を目指しており、本時も様々な手立てが考えられ、実践されていた。
・２回目の実演の際、他のグループの様子を見ながら生徒同士で自然に意見を伝え合う姿が見られ、学び合いの姿だと感じた。
・働くことの大切さ、楽しさについて全員で共通理解をして掲示物などで提示することで、生徒の学びに向かう意欲がさらに高まると考える。
・他学部や他学年の生徒、保護者からの評価を生徒に返すことで、生徒の学びの実感にしっかりつなげていって欲しい。

４　まとめ(成果とこれからに向けて)

（１）互いに学び合い、他者の考えに気付き、行動する姿に向けて

①生徒同士のやりとりを意識した学習活動の検討

話合い活動や制作活動、身近な人へのインタビューやまとめなど生徒同士がやりとりをする活動を多く設定し、同じ活動を繰り返し行うことで積極的に意見交換をする姿や、周りの状況を見て、自分から友達に言葉を掛ける姿が見られるようになってきている。また、互いの意見を伝え合うことが、相手の気持ちや、考えに対して理解が深まり、協力したり、助け合ったりする姿につながった。

グループごとの活動の中で、互いの活動の様子を見て、他者の考えやアイディアを自分たちのグループの活動に生かそうとする様子や、グループ内での役割分担を意識して活動する姿がみら

れるようになってきた。

今後は、やりとりの内容が深まるように、役割分担やグループ分け、話合いのルールづくり、自分の考えを伝えるための方法などを提示していく。

さらに生徒同士でのやりとりを増やし、相手に自分の考えを伝え、相手の意見を聞いて自分の活動に生かしたりする力を育てるために、生活単元学習だけでなく、日々の学習活動の中で聞くこと、話すことを重視していきたい。

②学習の目的の共有

めあてを生徒から引き出し、学習の目的を共有したことで、活発に意見交換をする姿が多く見られた。また、誰に、何を伝えたいかを明確に提示することで、生徒が完成のイメージを具体的にもつことにつながった。

一方、活動を進める中で、生徒のめあての捉えが変わってしまうことがあるため、目的がずれないように、活動中にめあてを確認したり、めあての中間評価をまとめにつなげたりしていきたい。

高等部２年Ａグループ　生活単元学習　学習指導案

日　時：令和６年１２月４日（水）10：15～11：15
場　所：高等部多目的コーナー
生　徒：男子４名、女子４名、計８名
指導者：中村堅一（Ｔ１）　、千葉隆之（Ｔ２）

１　単元名

ぐるぐるまっぷ⑧～私の将来編～「後輩に『働くこと』の大切さ、楽しさを伝えよう」

２　生徒と単元

（１）生徒について

本学年では、６月と 11 月に現場実習を行い、その前後期間に自分の実習先や内容について調べたり実習を振り返ったりする学習を行ってきた。実習報告会などでは、友達の実習の様子や内容に関心をもっている姿が見られた。本グループの生徒は実習先の業種は様々だが「食品や販売等」の仕事に関心をもっている男子４名、女子４名である。生徒の一部は経験不足から消極的な傾向があるが、ほとんどの生徒が言葉での簡単な指示を理解し行動に移す。人との関わりにおいては友達や教師とのコミュニケーションを楽しむ生徒が多く、互いに思いやりをもって言葉を掛け合う様子が見られる。本単元を通して、自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け入れたりしながら関わり合い、自信をもって学習に取り組む姿を目指したい。

（２）単元設定理由

「ぐるぐるまっぷ」は、１年生から継続して学年全体で取り組んでいる中心的な単元である。テーマに沿って調べたりまとめたりする学習に苦手意識をもっていた生徒も、学習シートやまとめの様式を一貫して繰り返すことで、記入方法やまとめ方に慣れ、スムーズに学習を進めている。また得意分野や興味関心に合わせた様々なグループ編成で学習に取り組むことで、同じ学年の仲間意識も高まっている。今年度は、調べる内容や表現方法でグループ分けを行い、より興味をもって学習できるように工夫してきた。

これまで、新屋の街や鹿嶋祭について調べたことを地図にまとめて展示したり、栗田祭で宿泊学習先の八峰・白神地域の魅力を伝えたりする学習を行ってきた。今回は自分たちが現場実習で感じたことを、後輩に分かりやすく伝えたり体験してもらったりするために「ジョブパーク」を開く。働くことの大切さや楽しさを伝えるためにどのように工夫していけばよいのかを、グループの中で協同しながら試行錯誤していく過程で、自ら考えたり活動したりすることが期待できると考え、本単元を設定した。

（３）指導について　※下線は高等部普通科の研究テーマに関連した手立て

【児童生徒一人一人が自ら活動したり考えたりすることができる状況づくり】

・生徒の意見を尊重し、目標設定と行動計画の立案をサポートするために、自己選択、自己決定の場面を設定したり、生徒の実態に応じて選択肢を提示して表現方法を伝えたりする。

【自然な協働性を生むテーマ設定や学習活動、学習集団の工夫】

・経験したことを生かし自信をもって活動できるように、現場実習に関連付けたテーマを設定し、話合いや役割分担を行い、協力して課題に取り組める場面設定をする。

【多様な場や人材の活用】

・生徒の学習の成果を発表する場を設け、他学年他学部の生徒や職員からの評価を受け、認められる機会を増やすことで自己肯定感を高める。

3　単元目標　　知：知識及び技能　思：思考力・判断力・表現力等　学：学びに向かう力・人間性等

（1）自分たちの実習経験を通して感じた働くことの大切さや魅力についてまとめ、後輩に伝える。知
（2）実習で体験したことをどう伝えるかをグループで考えながらオープンに向けた準備をする。思
（3）「ジョブパーク」のオープンを通して働くことについての自分の考えを周囲の人に伝えたり、相手の意見を受け入れたりする。学

4　単元計画（総時間数 22 時間／本時 11 時）

小単元名と活動内容	主なねらい（知 思 学）	時数	学習活動	関連する教科等
目的や活動内容を話し合おう ・オリエンテーション ・グループでの話合い	・自分の意見を伝えたり、友達の意見を聞いたりしながら体験ブースの内容や役割を決める。思　学	4	・どのようなことを体験してもらうかをお互いの実習での体験や意見を交換しながらブースのイメージを決めたり、役割を分担したりする。 ・後輩が何を知りたいのか事前に調べる。	国語 美術 職業 家庭
オープンの準備をしよう ・大道具小道具作り ・体験の流れの確認、練習	・後輩の視点に立ち、楽しさ、分かりやすさ、動きやすさを考えながら制作する。 ・体験者の動きやすさ楽しさを考えて試行と評価を行う。知　思	7／10 時	・前時の話合いの結果を基に、友達と協力しながら体験ブースの準備をする。 ・高２生徒と体験者のやりとりや体験の流れを確認、練習する。 ・他学年生徒や保護者を招いて試行、評価を積み重ねる。	美術 国語 数学 職業 家庭
「ジョブパーク」オープン ・プレオープン ・振り返り ・本オープン	・より効果的な方法や役割を考え実践する。知　学 ・自分や友達の動きを覚えるとともに、改善点を指摘し合いながら体験ブースの進行練習をする。思　学	8	・流れを撮影した動画を適宜視聴し、良かった点や気付いた改善点を全員で共通理解し反映させる。 ・他のグループの進行の様子を見たり、自分たちで生かしたい部分を取り入れたりする。 ・中学部３年生を招いて体験ブースを進行する。	国語 数学 職業 家庭

5　児童生徒の実態と目指す姿

	氏名・性別	実　態	単元を通して目指す姿 （自ら学び続ける子どもにつながる姿）
食品ブースグループ	A （女）	・やってみたい活動等、自分の考えを伝えたりする。 ・活動全般で、友達の様子を見て自分からやろうとする。	・やることが分かり、友達と一緒に制作準備をしたり、体験ブースでの役割に取り組んだりする。
	B （女）	・提示された選択肢があれば自分で選び、自らの意思を示す。仲のよい友達と一緒に活動することを好む。	・友達と一緒に制作準備をしたり、自分の役割に最後まで取り組んだりする。
	C （男）	・自分の気持ちを伝えることができる。 ・自分の役割が分かると、やるべきことに最後まで向かう。	・友達と協力して自分たちの役割を果たしたり、体験者を誘導したりする。
	D （女）	・少し時間が掛かるが、必要なことを考えたり、自分の考えを伝えたりする。経験したことについては率先して向かったり友達に丁寧に教えたりする。	・体験ブースのリーダーとして友達に協力を求めたり言葉を掛け合ったりしながら制作や体験ブースの進行練習をする。

品出しブースグループ	E （女）	・活動内容を理解すると必要な準備物を用意し、自分で活動する。 ・箱折りなどはやり方を覚えれば一人で完成できる。	・体験ブースの中で、自分や友達の役割が分かり、自分から役割を果たしたり、友達に言葉を掛けたりする。
	F （男）	・全体を考えながら、自分の考えを伝えたり見通しを立てたりする。 ・友達と協力して制作することを楽しむ。	・体験ブース運営に必要な準備を考え、リーダーシップを取りながら、自分の考えを周りの生徒に伝える。
	G （男）	・経験済みのことであれば、必要な準備物を考えたり、提案したりする。 ・友達と一緒に活動することを好む。	・楽しさ、分かりやすさを見据えた体験ブースを友達と相談しながら進行する。
	H （男）	・人の動きをよく見ており、物事を効率的に考えて提案したり準備したりする。	・自分から考えを伝えたり、周りの人の発言内容や動きを見て発表したりする。

６　本時の計画（22 時中の 11 時）

（１）本時のねらい

仕事のやり方や、必要な力が分かりやすい体験ブース作りを目指し、ブースを体験して良かったことや改善点を話し合う。

（２）学習過程

時間（分）		学習活動	教師の働き掛け、指導上の留意点 ※下線は高等部普通科の研究テーマに関連した手立て
7	導入	１本時の学習内容とめあてを確認する。	・全員が活動に向けた気持ちを共有できるように、Ｆを中心に本時の活動や役割を確認する場面を設定する。 ・オープンまでの学習計画と進捗状況、振り返りをいつでも一目で確認できるような計画表を掲示する。
		めあて：仕事のやり方や必要な力が分かりやすい体験ブースにするにはどうすればよいか考えよう。	
45	展開	２体験ブースの進行練習と準備をする。 （１）品出しブースの生徒が食品ブースを体験する。 （２）気付いたことや意見を付箋に書いて貼る。	・体験の流れについて視覚的に検討したり変更したりできるように、改変可能な進行表を提示する。（Ｔ１） ・「分かりやすさ」が実感できたかを評価し合えるように、品出しブースグループの生徒が食品ブースを体験する。 ・書字が難しい生徒にはＴ２が聞き取り、メモをする。 ・活動途中に自分たちと体験する人とのやりとりの流れを確認評価できるような場面を設ける。 ・「分かりやすい」とはどういうことか、確認しながら進められるように、事前に自分たちで考えた評価の視点を提示する。
		品出しブースグループ（食品ブースグループへ意見を出す） Ｆ：○ブース全体を見ながら友達に意見を話したり、受け入れたりする。 →全体の動きや二つのブースを進行表で適宜確認が可能なことを予告する。 Ｇ：○「仕事」の特徴を生かして友達と相談しながら体験ブースの評価の観点や友達の動きを見て意見を述べる。 →「仕事」の特徴を整理したチェックリストを基に意見を出しやすくする。 Ｈ：○友達と場や物を共有しながら、意思を伝えたり、受け入れたりする。 →活動中の話しやすさを踏まえた人数、場所や物を設定する。 Ｅ：○体験する側として動き、友達の動きを見て自分から活動する。 →感想や気付いた点を挙げられるように、ブースの流れを何回か体験する。	

		食品ブースグループ（実際に進行する） Ｄ：○友達にやり方を示しながら体験ブースの進行をする。 →友達の動きを把握しやすい活動場所を設定する。 Ｂ：○友達と自分の活動のつながりが分かり、できた物をタイミングよく受け渡す。 →友達と場や物を共有し、パンや野菜を介した活動場面を設定する。 Ａ：○自分の活動内容が分かり、やりとりの順番に沿って案内する。 →自分の順番を確認できるように活動の進行表の簡易版を手元に置く。 Ｃ：○教師や友達と関わりながら、自分の役割を覚え、案内する。 →活動途中にお互いの役割や動きを見合う時間を設ける。	
		（３）改善点を話し合う。	・本時のめあてを達成することができたか、食品ブースを体験した感想を基に、「分かりやすさ」について話し合う場を設ける。
8	まとめ	３まとめ	・振り返りの際、検証しやすいように、学習の様子を撮影し必要に応じて再生できるようにしておく。（Ｔ１）
		まとめ：たくさんの意見を出し合い「　」すれば分かりやすいブースになるだろう。	
		４次時からの活動内容を確認する。	・オープンへの気持ちが高まるように、次時はＰＴＡで保護者に体験ブースを体験してもらい、感想をもらうことを予告する。

（３）評価

＜児童生徒の評価＞

・「分かりやすい」と思える体験ブースの準備をすることができたか。

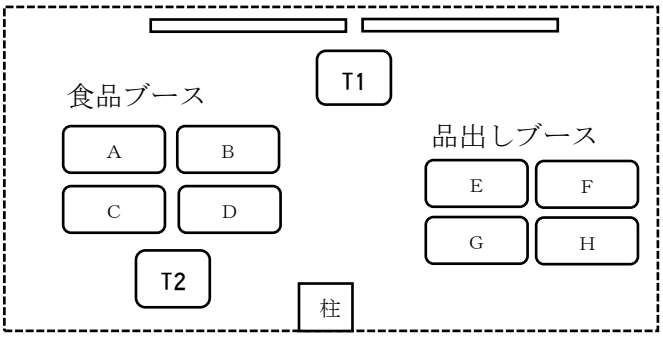
・友達の意見を受け入れながら話し合い、体験ブースを進めることができたか。

＜教師の手立ての評価＞

・後輩に何を伝えたいのかが分かったり、友達と協同したりする場面の設定ができていたか。

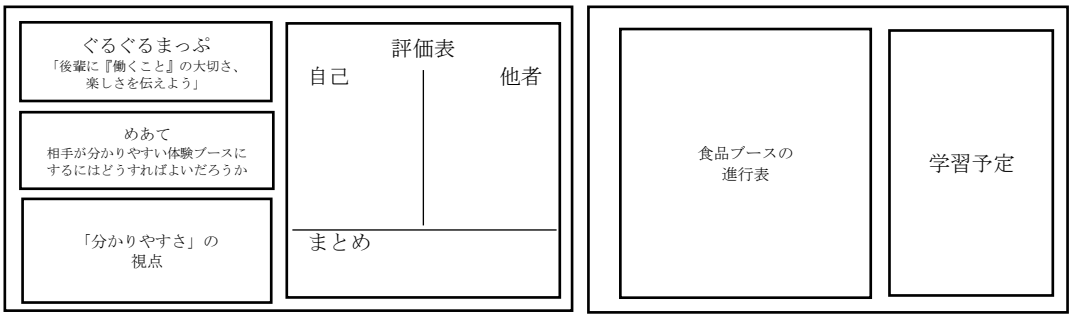
（４）配置図と板書計画

・高等部多目的コーナーの配置、グルーピング、教師の配置



← 廊下 →

・板書計画(ホワイトボード提示)



年 間 指 導 計 画 及 び 指 導 記 録

指導の形態	生活単元学習

記録者：佐藤洋子

学習グループ・児童（生徒）	高等部普通科２年　２４名	指導者	高２職員
年間目標	(1) 自分たちを取り巻く環境に関する様々なことやものに関心をもち、体験的な活動を通して調べたりまとめたりする技術を身に付ける。（知） (2) 課題解決のために必要なことやできることを考え、選択、判断、経験したことを積極的に友達や周りの人に伝える。（思） (3) 友達と考えや力を合わせて各活動を進める。（学）		

合わせた（関連する）教科等	国語、数学、美術、職業、家庭、保健体育、自立活動、道徳

学期	単元名及び主な学習内容	主な目標	指導の記録	実施時数
前期	○学級開き（学級）　４月 ・係決め　・掲示物作り ・教室環境の整備	・新しい学習環境、各行事などを知り、見通しをもつ。	・係が決まってから、生徒に司会を依頼し、作る掲示物や学級目標を決めた。教師は、思いを伝え、例や進め方を提示し、見守ったり、求められたら助言をするようにしたりしたことで、委員長を中心にほぼ生徒たちだけで考えたり友達の意見を受け入れたりしながら活動を進めた。教師に言われてから動くことが多かった生徒が複数いたが、「～したいので○○がほしいです」「こういうときはどうしたらいいですか」など、自分から思いを伝える姿が見られるようになった。 ・ぐるぐるまっぷ～新屋編Ⅱ～では、エリアに分かれて新屋の街を探索してそれを地図に起こした。その際に日吉神社や鹿嶋祭りに興味を示した生徒がいたため、祭り当日に神社に行き見学をさせてもらった。そこで見てきたものや調べたことを自分たちの地図に加えていったことで、自分たちの生活する地域について関心　や知識が深まった。 ・ぐるぐるまっぷ～八峰白神編～では　海、山、生活のグループに分かれ、自分たちが宿泊学習で行く八峰町について調べた。美術や国数と関連付けながら進めたことが、興味関心をもったり、意欲を高めたりすることにつながった。	予定時数 (68) 実施時数 (79)
	★ぐるぐるまっぷ⑥～新屋編～ （学年）５、６月 ・新屋の街探索　・調べ学習　・マップ作り	・街探索や、調べ学習を通して発見したことを地図にまとめる。 ・自分が選んだテーマについて、調べたり、実践したいことを友達と一緒に考え、必要な物を準備したりする。		
	★ぐるぐるまっぷ⑦-1～八峰白神編～ （宿泊学習事前・事後学習） （学年）７～９月 ・調べ学習　・準備学習　・しおり作り ・結団式、解団式、報告会・マップ作り	・宿泊学習の日程に見通しをもち、自分の役割を練習したり、自分の持ち物の管理をしたりする。 ・自分たちが体験してきたこと、場所について、地図にまとめる。 ・報告会でまとめたことを発表する		
	○1学期を振り返ろう（学級）８月 ・１学期の振り返り ・夏休みの過ごし方 ・２学期に向けて	・写真や制作物を見て１学期の学習を振り返り、それを基に２学期頑張ることを考える。 ・夏休み中に健康で規則正しく、将来につながる生活を送るための計画や目標を立てる。		
	★ぐるぐるまっぷ⑦-2～栗田祭編～ （学年）９、10月 ・ステージ用具制作　・ステージ発表練習	・ステージ発表で必要な物を考え、友達と協力してデザインしたり作ったりする。 ・自分の役割が分かり、自分から動いたりせりふを話したりする。		
後期	**★ぐるぐるまっぷ⑧～わたしの将来編～** （学年）11、12月 ・実習体験ブース作り	・自分たちが実習してきた企業や事業所についてまとめ、後輩に向けて発表する。		予定時数 (72) 実施時数 ()
	○２学期を振り返ろう（学級）12月 ・２学期の振り返り ・冬休みの過ごし方 ・３学期に向けて	・写真や制作物を見て１学期の学習を振り返り、それを基に２学期頑張ることを考える。 ・冬休み中に健康で規則正しく、将来につながる生活を送るための計画や目標を立てる。		
	★ぐるぐるまっぷ⑨～修学旅行編～（学年） ・調べ学習 ・マップ作り	・修学旅行先について歴史や様々な文化を調べ、地図にまとめる。		
	○３年生に向けて　（学年） ・祝い太鼓引き継ぎ式 ・送る会、卒業式の装飾作り ・発表練習	・先輩方から仕事や立場、伝統を引き継ぐ意識をもつ。 ・卒業を祝う気持ちや感謝の気持ちをもって装飾作りや発表練習をする。		
	○１年間を振り返ろう（学級） ・アルバム制作 ・自分の成長、３年生の目標	・写真をアルバムにまとめながら一年間の思い出を振り返る。		
評価				**年間総計** 予定時数（140） 実施時数（　）

高等部
総合サービス科研究

高等部総合サービス科研究
～生徒が自ら気付き、考え、学びを表現する姿を目指して～

１　学科研究テーマ設定理由

本学科では、一昨年度に「学びをよりよい思考、行動に生かす生徒の育成を目指した授業づくり」という研究テーマの下で授業づくりを進めた。さらに昨年度は、研究１年目の成果を生かし、「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイント」を活用した授業実践を行った。これまでの研究実践から、専門教科（家政、流通・サービス、福祉）の学習内容や学習時期を見直し、系統性・発展性のある学習計画を立案することができた。授業づくりにおいては、「実践の積み重ねによる知識と技術の習得」、「協働的な学習活動から生まれる新たな気付きと学び」、「学びの成果を発揮することで生まれる生徒の自信」などの成果を挙げた。一方課題として、「気付きや学びを表現する機会のさらなる設定」、「各教科における自ら学び続ける生徒像の明確化」などが挙げられた。また、本学科の生徒の姿として、学習を積み重ねることで様々なことに気付き、自らの考えをもつことができる一方で、内面にあるその気付きや考えを表出することに消極的な生徒が多い実態がある。

そこで今年度は、これまでの研究を踏まえ、生徒の気付きや考えを表現する姿を目指し授業づくりを行っていく必要性を学科内で共有した。昨年度までの実践に加え、協働的な学習活動を更に充実させ、新たな気付きや考えが生まれる機会を意図的に狙っていきたい。また、様々な学年を交えた学び合いを積み重ねることで、自ら学び続ける意欲を高め、さらに表現する姿を狙いたい。

以上のことから今年度は、専門教科「流通・サービス」を研究対象授業に取り上げ、「生徒が自ら気付き、考え、学びを表現する姿を目指して」を学科研究テーマに設定した。

２　研究仮説

「生徒が自ら気付き、考え、学びを表現する姿」を目指し、協働的な授業実践を積み重ね、新たな知識や技術を学び得る喜びや学習の成果を実感することを通して、自ら学び続ける生徒の育成が図られるだろう。

３　取組の実際

（１）生徒が自ら気付き、考え、学びを表現する姿を目指した授業実践の充実

①生徒の目指す姿の明確化

年度初めに各学年の生徒の実態を共有し、目指す姿について確認した。特に抽出生徒を中心に生徒の強みや課題を分析し、目指す姿を職員がイメージしやすい言葉（きびきびした姿、相手に自分の思いを伝える姿）で共有した。専門教科のみならず、他教科とも連携し、生徒の目指す姿に迫る指導内容や指導方法について具体的に検討した。

②校内外の人材活用（外部講師、自立活動アドバイザー、教育専門監）

校内外の人材を積極的に活用し、授業づくりや授業改善に取り組んだ。外部講師（清掃会社社員）から定期的に指導内容や指導方法について助言をいただき、生徒と職員の専門性の向上を図った。（写真１）また、教育専門監や自立活動アドバイザーも交えて授業検討を行い、生徒をあらゆる視点から捉え直し、手立てや環境設定について再考した。

写真１　外部講師からの指導

（２）教師同士の対話の充実を図った授業改善

①全校授業研究会

第２学年、第３学年　題材名「ビルクリーニング～第 23 回秋田県障害者技能競技大会に向けて～」７月 10 日（水）

本学科では卒業後の進路を見据え、専門３教科の学習を学年の段階に応じて展開している。本題材は大会に関わるビルクリーニングの学習を通して、清掃の基礎的な知識や技術を習得し、自分や周囲の安全や仕上がりの美しさなど、使う人の気持ちを考えて清掃する姿を目指した。

また、授業では生徒同士が気付いたことをアドバイスし合い、大事なポイントをまとめた。（写真２）

写真２　気付いたポイントを
キーワードでまとめる

１）事前授業検討から

＜グループ協議から＞（写真３）

・障害特性（メタ認知やボディイメージの難しさ）を理解した上で手立てを工夫してほしい。
・できているところは認め、自信をもつことができるようなアプローチを大切にしてほしい。
・客観的な評価を基に自己評価との差異を確認する機会を設けてはどうか。
・決められた指導項目をどのように工夫し、生徒を育てるかが大切である。

＜全校研に向けた改善点＞

・清掃ポイントを生徒同士で話し合い、確認する機会を設ける。
・動画や評価票などを活用し、自信をもつことができる工夫をする。
・客観的視点を育むために様々な人から評価をもらう機会を設ける。

写真３　グループ協議

２）授業協議から（自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイントを活用した授業協議）

ポイント①	生徒一人一人が自ら活動したり考えたりすることができる状況づくり
・課題に対して自分で原因を考え、行動していた。 ・話合い活動を通して生徒が自分の考えを再構築する姿が見られた。 ・動画を活用して自分の清掃について振り返る場面を設けてはどうか。	
ポイント②	自然な協働性を生むテーマ設定や学習活動、学習集団の工夫
・友達の意見を取り入れ、すぐに実践する姿が見られた。 ・実態に応じたグルーピングがなされ、生徒同士の話合いが活発であった。 ・それぞれのグループの話合いの内容を共有できればよかった。	
ポイント③	多様な場や人材の活用
・たくさんの参観者がいる中でも、きびきびとした動きで清掃していた。 ・本番に近いイメージをもちながら、学びを発揮しようとする姿が見られた。 ・参観者からの評価票は生徒への伝え方を工夫するとよい。	
次時に向けた手立ての工夫	
・生徒同士の話合いが有効だった。今後もその活動を軸に授業を構成する。 ・自分の様子（清掃中の姿）を客観的に確認できる手立ての工夫を行う。 ・まとめの際に生徒の意見や考えなどを全体で共有する時間を設ける。	

３）指導助言から

・授業のポイントは「分かりやすさ」と「なぜ、何のために」を意識すること。「なぜ」を理解することで応用ができるようになる。学習したことが般化されるよう努めてほしい。

・清掃する生徒は緊張感がある中よく頑張っていた。一方で清掃を評価する側の生徒の学びはどうだったか。生徒全員の学びとなるように評価する側もされる側も全体の場で教師が評価する機会を設けてはどうか。

・授業時間を計画どおり活用してほしい。時間が十分あったので、話合いで出た意見を全体で集約することができたかもしれない。ＴＴ間の役割分担も含めて再考してほしい。

＜全校研における学科研究テーマと関連するキーワード＞

「協働的な学習場面の充実」　「なぜ、何のために」　「評価の共有」

②事前授業研究会

第１学年、第３学年　題材名「ビルクリーニング」10 月 23 日（水）

３年生の２名は、第 23 回秋田県障害者技能競技大会に参加し、「ビルクリーニング」部門で金賞、銀賞を受賞した。１年生８名は、前期に担当教員、外部講師、先輩などから清掃業務の内容や方法、仕事に向かう態度等についての学習を積み重ねている。

写真４　先輩から後輩にアドバイス

本題材では、「ビルクリーニング」の学習を通して、基礎的・基本的な知識や技術を高め、指定された場所や状況に応じた適切な清掃を時間内に終える方法が分かり、自分や周囲の安全、衛生に気を付け、仕上がりの美しさや使う人の気持ちを考えて清掃する姿を目指した。本時では、先輩が後輩に清掃技術を伝え、ポイントをまとめた。（写真４）

１）事前授業検討から

＜動画の活用について＞

・１年生は自分たちの動画を見ることで、課題ばかりに注目してしまう傾向があるため、現段階では先輩の清掃の様子の動画を視聴し、手本を見て覚えることに重点を置く。

＜協働的な学習場面ついて＞

・生徒同士で清掃場面を評価、考察し、改善に向けて意見交換する機会を設ける。

＜ＴＴの連携について＞

・グループごとに見られたよい行動や発言を教師が随時取り上げ、全体共有する。

＜まとめについて＞

・まとめの場面でグループごとに出た意見を共有する機会を設ける。

・本時で学んだことを他の場面でどのように生かすことができるか考える機会を設ける。

２）授業協議から

＜グルーピングと教材について＞

・バランスのよいグルーピングであり、１、３年生同士で関わり合う場面が随所に見られた。

・３年生は清掃手順を教えるだけでなく、なぜこの手順が必要か理由も交えて説明していた。

・清掃手順表が話合いのツールとなり、活発に意見交換がなされた。

＜協働的な学習場面について＞

・３年生の教え方が具体的であり、教え方も変化していた。(言葉だけ→動きを交えて→理由を添えて)
・３年生は教える立場になることで、何をどのように伝えるか事前に考える姿が見られた。
・１年生は身近な先輩から清掃技術を教わる経験を通して、知識や技術を積極的に吸収しようとする姿が見られた。(質問をする、メモをする、自主練習をする、友達同士で教え合うなど)
・教師がどこまで指導し、見守ればよいかの判断が難しかった。

＜気付き、考え、表現する姿について＞

・教師がよいところを具体的に伝えるやりとりがよかった。
・異学年の関わりにより新たな学びを得る姿が見られた。
・気付きを促す発問のタイミングと内容が難しいと感じた。

写真５　外部専門家による指導助言

３）指導助言から（写真５）

・表現力を豊かにする指導を大切にしてほしい。教師がたくさんの言葉を掛けてほしい。清掃中に使用する言葉(専門用語)は在学中から教えることが大切である。
・高等部生活は３年間しかないため、種をまき、社会に出てから花開く準備期間と考えたい。
・次につながるまとめとなるような授業展開になるとよい。グループごとに学習した後に、それぞれの内容や評価すべき点を全体で共有する機会を大切にしてほしい。
・「自ら学び続ける」という全体研究テーマは「生涯学習の視点」が含まれている。生涯学習にはキャリアアップの観点もある。生徒たちが将来にわたって学び続けるために、日常の中で「学び方を知る」ことが大切である。

４）授業改善に向けて

・教科として何を教え、どこまで指導するか明確にする。清掃場面においては、清掃ポイント（枠取り、手拭き、机下など）を明示し、教師間で指導範囲や発問内容を事前確認する。
・まとめにおいて、教師が清掃のポイントを再度確認する場面を設ける。

＜事前研における学科研究テーマと関連するキーワード＞

「指導内容と指導範囲の明確化」　「気付きを促す発問の工夫」　「次時へつながるまとめの工夫」

③公開研究会

第１学年、第３学年　題材名「ビルクリーニング ～ダストクロス作業、水拭きモップ作業～」12 月４日（水）

３年生の２名は１年生への指導を積み重ね、自分の知識や技術を整理しながら学習に取り組んでいる。その内１名は 11 月に行われた第 44 回全国障害者技能競技大会（ビルクリーニング部門）に出場し、清掃技術が一層高まり、自信を付けて学習に取り組んでいる。１年生８名は清掃の基礎的・基本的な学習の他、新屋地域の保育所や町内会館などでの実践的な清掃活動を行い、状況に応じた行動や効率的な清掃方法について学習を積み重ねている。

本題材では、ビルクリーニングの学習を通して、清掃技術を高める他に、自分の行動に自信をもち、活動する姿を目指した。また、学校生活全般を通して互いのよさを認め合い、自分の思いや考えを相手に伝える姿を目指した。そして卒業後、様々な活動に挑戦しようとする意欲や分からないことは自分から調べるなど、学び続ける社会人になることを期待し、本題材を設定した。

１）事前授業検討から

＜指導範囲について＞

・清掃の工程を細分化し、本時では「水拭きモップ」を取り上げ、学習内容を焦点化する。

＜教師の言葉掛けについて＞

・生徒同士のやりとりを見守り、新たな気付きや考えが生まれやすい状況づくりを行う。

・清掃の目的や意味を理解することができるように、必要に応じて「何のためにこの清掃を行うのか」教師が生徒に問い掛ける。

・１年生が清掃のポイントを理解することができるように、場面を捉えて教師が生徒にメモや質問などをするよう促す。

・生徒が自信をもって学習活動に取り組むことができるように、うまくできているところを取り上げ、具体的に褒める。

＜学習の目的の理解について＞

・まとめにおいて、本時で得た知識や技術を他の場面でどのように生かすことができるかを考える機会を設ける。

・３年生は事前に技術指導する際の説明原稿やポイントなどを整理する機会を設ける。

・１年生は事前に手本動画（全国大会競技映像）を視聴し、教師が清掃手順や目的を説明する。

２）授業協議から

＜清掃のポイントについて＞

・１年生が積極的にメモを取り、学習に取り組んでいた。（写真６）

・清掃の手順とポイントが混在しないよう、さらに精選する必要があるのではないか。

・清掃手順を言葉だけで伝えるのではなく、床にマスキングテープを貼ったり印を付けたりするなど、さらに視覚化（見える化）してはどうか。

写真６　１年生がメモを取り
清掃ポイントを記録

＜教師の発問内容やタイミングについて＞

・教師が生徒に要所で言葉掛けをしていて効果的だった。（写真７）

・技術指導を１回目は生徒のみで行い、２回目は教師が補足説明や内容の整理をしたことで、要点が押さえられた指導につながった。

・教師が、「それはどうして？」「具体的に言うと？」と問い掛けたことで、清掃の目的や意味を理解する一助となった。

写真７　教師の言葉掛け

＜気付き、考え、表現する姿について＞

・３年生は言葉のみでの説明が難しいと考え、自ら実演を交えながら工夫して技術指導をしていた。また、清掃工程における注意点だけでなく、なぜその工程が必要なのか詳しく話す姿も見られ、成長が感じられた。

・「なぜ、何のために」を意識できるような説明（生徒）や発問（教師）がさらにあると学習内容の理解が深まると感じた。

・体で覚えたこと（清掃手順）を言語化する難しさがある。言語化する機会を今後も積み重ねていくことで生徒自身が学びを積極的に表現する姿につながるのではないかと感じた。

３）指導助言から

・卒業時に社会から求められる人材の育成を目指して、３年間関わることが大切である。
・ビルクリーニングは最高の教材である。清掃ポイントが集約されているほか、朝礼から終礼までの流れや、正しい態度や動作、公衆衛生の知識など、幅広く学習することができる。この教材を通して、生徒たちの心技体を育ててほしい。
・先輩の話を聞き、立ち振る舞いを見る活動は、後輩にとって「あの先輩だったらどう行動するのか」と他者の目線で物事を考えることへとつながり、効果的な活動であった。先輩の言葉や行動は、後輩の今後の姿を形成する礎となるため、今後も継続して実践してほしい。
・日頃から、専門用語として扱う言葉、相手に伝わる言葉など、教師も生徒も互いに言葉遣いを意識して対話をしてほしい。発問においても言語活動の活用例を参考に、様々なパターンを想定してＴＴ間で共有してほしい。
・障害特性に応じた手立ては、実態に応じて活動を分ける（見る→メモする）など、柔軟に対応できるとよい。在学中に「自分に合う学び方」を見付けることでさらに自己理解が深まると考える。

＜公開研における学科研究テーマと関連するキーワード＞

「自分に合う学び方（障害特性の理解）」「学習の目的理解（教師の発問や生徒同士の対話を軸に）」

４　まとめ（成果とこれからに向けて）

（１）生徒の目指す姿の明確化

生徒の姿を具体的にイメージしたことで、手立ての質が高まり、手立ての幅も広がった。専門教科のみならず、他教科（特に学校設定教科「社会技能」）においても協働的な学習や動画の活用などを取り入れたことで、生徒自身の自己理解が深まり、自ら他者と関わる姿へと変容した。

（２）異学年で行う協働的な学習活動

異学年でのやりとりを通して、先輩は既習事項の整理と振り返りへとつながり、後輩は先輩の姿を目標に新たな知識と技術を習得する機会となった。協働的な学習活動を積み重ねることで生徒の伝え方や聞き方に変化が見られ、学科研究テーマに迫る自ら表現する姿が随所に見られるようになった。学科職員アンケートにおいても異学年の学び合いは有効な手立てだったという意見が大半を占めた。今後も生徒たちの気付きや考えを生み出すために、学科内で継続して実践する。

（３）学習の目的理解と応用

なぜこの清掃が必要なのかを考える機会は、学習の目的を理解する上で大切な活動であった。目的を理解することで生徒たちは自らの行動を工夫し、他の場面で学びを活用する視点が養われた。今後も各教科において学習の目的を確認し、どのように活用できるか考える機会を設ける。

（４）専門性の向上と学び方への着目

外部講師（清掃会社社員）による定期的な清掃指導は技術力向上のみならず、生徒が社会人としての心構えを知る機会となった。教育専門監や自立活動アドバイザーからの助言では、障害特性の再確認とそれに基づく手立ての再考をすることができた。今後も障害特性や生徒の実態を正しく把握する専門性を身に付け、生徒の学び方に着目し、支援を実践していく。

高等部総合サービス科　流通・サービス科学習指導案

日　時：令和６年 12 月４日（水）10：15～11：20
場　所：第二校舎学習室
生　徒：３年生２名（男子２名）
　　１年生８名（男子３名、女子５名）　計 10 名
指導者：中野貴洋（Ｔ１）、菊地奈都子（Ｔ２）

１　題材名

「ビルクリーニング」～ダストクロス作業、水拭きモップ作業～

２　生徒と題材

（１）生徒について

３年生男子２名、１年生男子３名、女子５名の学習集団である。全員が卒業後、一般就労を目指し、３年生はこれまでに４度の現場実習を実施し、今後も個別実習を予定している。また、１年生は 11 月に初めての現場実習を実施した。

３年生の２名は、第 23 回秋田県障害者技能競技大会「ビルクリーニング部門」に参加し、金賞、銀賞を受賞した。その内１名は 11 月に行われた第 44 回全国アビリンピックに出場し、清掃技術が高まり、自信を付けて清掃している。また、現場実習の評価や学校生活を通して、「自分の考えを具体的に伝える」、「他者と積極的に関わる」ことを課題としていたが、後輩に教える経験を他の場面でも積み重ねる中で、後輩に「どのように伝えたらよいか」と自ら考えたり、３年生同士で相談したりする姿が見られた。

１年生８名は、担当教員、外部講師（友愛ビルサービス）から、清掃作業に必要な資機材の名称、清掃業務の内容や方法、仕事に向かう態度等についての学習を積み重ねてきている。また、新屋地域の保育所や町内会館等での実践的な清掃活動（外部清掃）を行っており、状況に応じた清掃方法や効率化、挨拶等の作業態度に関して、基礎的・基本的な内容を学習している。

指示が複数ある場合は、個別に具体的な指示を要する生徒もいるものの、全員が簡単な口頭指示や文章を理解し行動できる。言語表出に関しては、言葉、文章で自分の意思を伝えられる。また、１年生は経験が少なく自信がないため、１度間違えると「もうできない」「無理だ」と発言することもあるが、教師や友達からの励ましを受け、再度挑戦する姿が増えてきている。

ダストクロス作業では、１年生が３年生の作業の様子をメモ取りしながら学ぶ姿、３年生が１年生に動作を交えながら作業方法を説明する姿が多く見られた。話合い活動では、「○○はできた」、「△△はできなかった」等の成果と課題を全員の生徒が発言した。しかし、「△△ができなかったので次は□□したい」等の改善点まで深めることができなかった。

（２）題材設定理由

総合サービス科では、１年次は専門３教科（家政、流通・サービス、福祉）の基礎基本の学習、２年次は専門３教科の応用、３年次は卒業後の進路を見据えて一つの専門教科を選び、専門的・実践的な学習を行っている。

「流通・サービス」においては、外部講師の指導の下、清掃作業に必要な資機材の扱いや清掃技術を身に付ける。ビル清掃やホーム清掃の実践的な技術習得と地域の事業所の清掃を行っている。また、６Ｓ環境（整理、整頓、清掃、清潔、躾、習慣）と挨拶の励行を常に意識できるよう、学習の中に取り入れている。学校で学んだ技術や態度等は、学校生活のみならず、家庭生活、職業生活を含め、生涯を通し実践してほしいと考えている。

本題材では、「ビルクリーニング」の学習を通して、基礎的・基本的な知識（資機材の名称、扱い方、作業に向かう態度等）や技術（ダストクロス作業、水拭きモップ作業等）を高め、自分の行動に自信をもち、活動する姿を目指す。また、指定された場所（校内清掃、食堂清掃）や状況に応じた適切な清掃（外部清掃）を時間内に終える方法が分かり、自分や周囲の安全、衛生に気を付け、仕上がりの美しさや使う人の気持ちを考えて清掃する姿を目指す。そして、流通・サービスの授業のみならず、学校生活全般を通して互いのよさを認め合い、自分から考え判断して行動し、自分の思いや考えを相手に伝える姿を目指したい。さらに卒業後、自分の行動に自信をもち、様々な活動に挑戦しようとする意欲や分からないことは自分から調べたり、周りの人に質問したりする等、学び続ける社会人になることを期待し、本題材を設定した。

（３）指導について　※下線は各学部学科の研究テーマに関連した手立てを示している。

【児童生徒一人一人が自ら活動したり、考えたりすることができる状況づくり】

・「流通・サービス」の全ての授業は、「目標を立てる、清掃する、成果・課題・改善点を考える」を一連の流れとして実施している。

・導入において、学習目標をあえて空欄にし、生徒自らがキーワードを考え、発表する場面を設定したり、資機材の名称を問い掛けたりする。また、生徒が進んで学習に取り組めるよう、一目で学習目標、学習予定等が分かるような板書とし、図入りの簡略化した作業手順表を準備する。

・展開において、３年生が１年生に教える場面は、見守る姿勢を基本としながら、教師間で生徒の理解度を把握し、「動作を付けながら説明する」「そこはどうする」等、教師が具体的に指導する、抽象的に助言する等を行き来しながら柔軟に対応する。

・まとめにおいて、生徒が互いのよさを認め合えるよう、技術面、態度面でよさが現れた行動を教師が紹介する。また、清掃の仕方や清掃態度等に問題意識を喚起できるよう、「なぜ必要なのか」「どのように改善するとよいのか」等を問い掛ける。

・生徒同士で清掃の仕方を学び、振り返りできるよう、３年生が参加した第 23 回秋田県障害者技能競技大会や全国アビリンピックの「ビルクリーニング部門」の動画を視聴しながら、教師が、「なぜ、何のために〇〇の工程を行うのか」等を理由付けしながら、説明する機会を設定する。

・１年生は、自分の清掃動画を振り返ることに抵抗が高いため、自信をもって清掃する姿が見られるようになってから、動画で振り返る機会を設定する。

【自然な協働性を生むテーマ設定や学習活動、学習集団の工夫】

・３年生は１年生に清掃の仕方や態度等を教える、１年生は３年生に質問したり、助言を受けたりする等、お互いに学び合う機会を設定する。

・生徒が互いに清掃する様子を評価、考察し、改善点を話し合い、実践する機会を設定する。

・グルーピングは、３年生１名に対して１年生４名とする。Ａコートの３年生は言葉での説明が得意であり、１年生は言葉での説明を記録に残し、自分で振り返ることが得意な生徒の多いグループとする。Ｂコートの３年生は、体を動かしながら説明することが得意であり、１年生は見て覚えることが得意な生徒の多いグループを配置する。

・話合い、教え合いが活発になるよう、清掃ポイント（ダストクロス作業５つ、水拭きモップ作業５つ）を限定する。

・授業以外の時間において、事前に３年生には１年生に教える清掃ポイント、１年生には３年生には何を聞いてもよいことを伝える。事後に３年生には教え方、１年生には質問の仕方等を評価することで、３年生と１年生が話しやすい状況づくりを行う。

【多様な場や人材の活用】

・流通・サービスの授業で学んだ清掃技術を生かす校内清掃、食堂清掃、外部清掃の機会を設定するとともに、他学年、他学部の職員、地域の方から評価していただく機会を設ける。

・外部講師（友愛ビルサービス）から助言、指導していただく機会を設ける。

３　題材目標　　知：知識及び技能　思：思考力・判断力・表現力等　学：学びに向かう力・人間性等

＜３年生＞

（１）１年生に清掃技術等を教えたり、成果や課題等を伝えたりする活動を通して、ビルクリーニングの基礎的・基本的な知識や技術を再確認する。知

（２）清掃の仕方や態度等を具体的に１年生に伝える方法を考えたり、実際に教えていく中で臨機応変に対応する力を身に付けたりする。思　学

＜１年生＞

（１）３年生から清掃技術等を実際に教わったり、動画で振り返ったりする活動を通して、ビルクリーニングの基礎的・基本的な知識や技術を習得する。知

（２）先輩からの助言や友達との話合いを通して、自分のよさや課題が分かり、活動への自信や意欲を高める。思　学

4　題材計画（総時間数 14 時間／本時４時）

時	学習内容	学習活動	評価基準（知 思 学）
4 (4/4)	ビルクリーニングを知ろう	・障害者技能競技大会動画視聴（１年生のみ） ・清掃手順表の読み取り　（ダストクロス作業） ・３年生の見本演示・説明 ・１年生の練習、振り返り（ダストクロス作業） ・障害者技能競技大会動画視聴（１年生のみ） ・清掃手順表の読み取り　（水拭きモップ作業） ・３年生の見本演示・説明 ・１年生の練習、振り返り（水拭きモップ作業）	＜３年生＞ ・学習してきたことを後輩に伝える。 知　思　学 ＜１年生＞ ・基礎的、基本的な知識や技術を覚える。知
10	ビルクリーニングを実践しよう	・全国アビリンピック動画視聴（１年生のみ） ・３年生は１年生の評価、助言 ・１年生は実践、振り返りを繰り返す	＜３年生＞ ・１年生のよさや改善点を見付け、具体的に伝える。　思　学 ＜１年生＞ ・全体の前で手順に沿って清掃する　思　学

5　生徒の実態と目指す姿

Ａコート

氏名・性別	実　態	題材を通して目指す姿 (自ら学び続ける子どもにつながる姿)
A ３年 男	第 23 回秋田県障害者技能競技大会において金賞を受賞し、11 月の全国大会に出場した。 １年生に教える経験は少なく、照れからふざけた口調で話すことがある。 ダストクロス作業を教える場面では、動作に理由付けしながら説明する姿が多く見られた。	１年生のよさや課題を見付け、自分の考えを相手が分かるよう具体的に伝える。
B １年 女	清掃手順を覚えることに時間は掛かるが、自分から繰り返し練習して覚える。 自分の清掃に自信がなく、うまくできるか不安な気持ちから教師や友達に質問が多くなる。 ダストクロス作業のポイントをしっかりメモに取り、疑問点は教師に質問していた。	自分で決めた清掃ポイントを理解し、自信をもって活動する。
C １年 女	清掃手順をすぐに覚え、資機材をスムーズに操作しながら清掃する。 自分から友達に話し掛けることは少ないが、友達同士の話合いを聞き、場に応じた行動をする。 ダストクロス作業のポイントを１回で把握し、自ら練習する姿が見られた。	自分から先輩に質問したり、友達と相談したりしながら清掃する。
D １年 女	清掃手順を覚えることに時間は掛かるが、自分から繰り返し練習して覚える。 自分の清掃技術に自信がなく、新しいことへの挑戦を躊躇する。 ダストクロス作業のポイントをメモに取り、疑問点は教師や友達に質問していた。	自分で決めた清掃ポイントを理解し、自信をもって活動する。
E １年 男	清掃手順をすぐに覚え、資機材をスムーズに操作しながら清掃する。 話合い活動では、友達のよさを見付け発言するが、課題を伝える際に口調が厳しいこともある。 ダストクロス作業のポイントを把握し、自ら繰り返し練習する姿が見られた。	友達の具体的な改善点を優しい口調で伝えながら、自身の清掃活動を振り返る。

Ｂコート

氏名・性別	実　態	題材を通して目指す姿 (自ら学び続ける子どもにつながる姿)
F ３年 男	第 23 回秋田県障害者技能競技大会に本校代表として出場し、銀賞を受賞した。 １年生に教える経験は少なく、質問には答えるが、自分から発言することが少ない。 ダストクロス作業を教える場面では、動作を繰り返し演示しながら説明する姿が多く見られた。	１年生のよさや課題を見付け、自分の考えに自信をもって、相手に伝える。
G １年 女	清掃手順を覚え、周りの状況を把握しながら清掃する。 話合い活動では、「よかったよ」等、抽象的に友達の良い点や改善点を伝えることが多い。 ダストクロス作業の手順を友達の清掃状況からも学ぼうとする姿が見られた。	友達に良い点や改善点を具体的に伝えながら、自身の清掃活動を振り返る。
H １年 男	清掃手順は短期間で覚えるが、数日経つと忘れてしまい、教師に質問しながら清掃する。 話合い活動では、自分の主張を通そうとすることが多い。 ダストクロス作業のポイントを把握し、自ら繰り返し練習する姿が見られた。	教師や友達の意見を受け入れ、改善しながら清掃する。
I １年 女	清掃手順を覚え、周りの状況を把握しながら清掃する。 話合い活動では、友達のよさを見付け発言するが、課題を伝える際に口調が厳しいこともある。 ダストクロス作業の手順を友達の清掃状況からも学ぼうとする姿が見られた。	友達の具体的な改善点を優しい口調で伝えながら、自身の清掃活動を振り返る。
J １年 男	清掃手順は短期間で覚えるが、数日経つと自己流で清掃することがある。 話合い活動では、「〇〇がよかったよ」等、具体的に友達の良い点や改善点を伝えることが多い。 ダストクロス作業の手順を友達の清掃状況からも学ぼうとする姿が見られた。	自分から先輩に質問したり、友達と相談したりしながら清掃する。

６　本時の計画（14 時中の４時）

（１）本時のねらい

＜３年生＞後輩一人一人に応じたポイントを絞った水拭きモップ作業を教える。

＜１年生＞先輩の演示を見たり、実際に体験したりしながら水拭きモップ作業を覚える。

（２）学習過程　※下線は各学部学科の研究テーマに関連した手立てを示している。

時間 (分)	学習活動		教師の働き掛け、指導上の留意点
５	導入	１本時の学習課題と学習予定を知る。	・６Ｓ環境、挨拶の励行の確認をする。 ・学習課題に気付けるよう、<u>「〇〇の仕方を覚えよう」等のキーワードを空欄にした板書</u>をする。 ・本時の学習に見通しがもてるよう、<u>授業前に学習の流れについて板書</u>をする。

50	展開	２３年生が水拭きモップ作業をする。 演示：Ａ 説明：Ｆ ３１年生が水拭きモップ作業をする。 ４清掃状況を振り返る。 ※３、４を繰り返し行う。	・生徒が自ら気付き、考えられるよう、清掃動作の説明をしたり、清掃手順の番号のみを伝えたりする等、生徒の理解度に応じて柔軟に働き掛ける。 ・清掃の仕方を覚えられるよう、図入りの清掃手順表を準備したり、生徒同士で意見交換する場を設定したりする。 ・生徒同士の話合い活動において、「なぜ必要なのか」「次はどうすればよいか」等を質問する。 ・生徒同士の話合いが活発になるよう、ＡコートはＴ１、ＢコートはＴ２が主担当として、生徒に問い掛けたり、生徒の発言を分かりやすく説明したりする。 ・具体的な改善点について話し合いできるよう、「△△が課題だったので、次は□□するようにしたい」と例文を提示する。 Ａコート Ａ：○清掃方法を言葉と動作で分かりやすく説明する。 →事前に伝える水拭きモップ作業のポイントを確認する。 Ｂ：○先輩の清掃を見て、大まかな手順を覚える。 →清掃手順表に必要事項を記録する。 Ｃ：○先輩や友達からの助言を受け入れ、実際に清掃し、水拭きモップ作業のポイントを覚える。 →清掃手順表を準備し、「何がポイントですか」等の気付きを促す発問をする。 Ｄ：○先輩の清掃を見て、大まかな手順を覚える。 →清掃手順表に必要事項を記録する。 Ｅ：○先輩や友達の清掃を見て、水拭きモップ作業のポイントを覚える。 →清掃手順表を準備し、「どうすればきれいに清掃できますか」等の具体例を発言できる発問をする。 Ｂコート Ｆ：○清掃方法を動作と言葉で分かりやすく説明する。 →事前に伝える水拭きモップ作業のポイントを確認する。 Ｇ：○先輩や友達からの助言を受け入れ、実際に清掃しながら、大まかな手順を覚える。 →清掃手順表を準備し、「何がポイントですか」等の気付きを促す発問をする。 Ｈ：○先輩や友達の清掃を見て、清掃手順を覚える。 →清掃手順表を準備し、「次は何番ですか」等の気付きを促す発問をする。 Ｉ：○友達に助言をしながら、水拭きモップ作業のポイントを覚える。 →清掃方法を動作と言葉で分かりやすく説明できるよう、「やって見せて」等の促す言葉掛けをする。 Ｊ：○先輩や友達の清掃を見て、大まかな手順を覚える。 →清掃手順表を準備し、「次の手順は何ですか」等の気付きを促す発問をする。
10	まとめ	５成果と改善点を発表する。 ６改善点を確認し、次時への意欲を高める。	・成果と改善点を明確に発表できるよう、項目立てたホワイトボードを準備し、各コート１名が発表する場面を設定する。 ・改善点を明確にするよう、３年生が演示する場面を設定する。 ・生徒の自信や意欲を高められるよう、教師から水拭きモップ作業の技術面や教え方、教わり方の態度面について評価する。

（３）評価

＜生徒の評価＞

（３年生）・後輩に具体的な清掃方法を演示、説明したか。

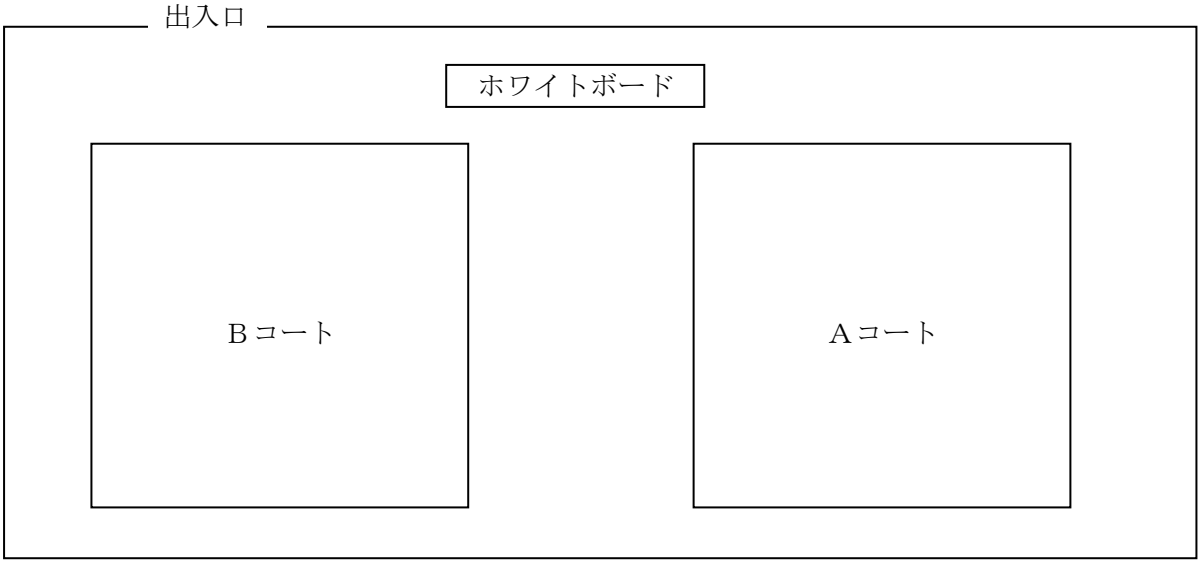
（１年生）・先輩の演示を見たり、実際に体験、振り返りをしたりすることで清掃手順を覚えたか。

＜教師の手立ての評価＞

・生徒同士でよさや改善点を活発に意見交換できるようなグルーピングの設定、言葉掛けのタイミングや内容、場面設定等を工夫できたか。

（４）配置図と板書計画

【配置図】



【板書計画】

目標：○○○○○○作業の仕方を覚えよう→○○○○や○○○○、○○○○に生かそう

学習内容	水拭きモップ作業 ポイント	Ａコート 成果	Ｂコート 成果
１　先輩の○○作業を見る。 ２　○○作業をする。 一人１回以上 ３　成果と改善点を話し合う。 ４　各コート代表１名が発表する。	Ａ枠取り Ｂ手拭き Ｃ机下 Ｄうしろ拭き Ｅ脱出拭き 清掃手順表	改善点 「△△が課題だったので、次は□□するようにしたい」	改善点 「△△が課題だったので、次は□□するようにしたい」

年 間 指 導 計 画 及 び 指 導 記 録

指導の形態	流通・サービス

記録者：中野　貴洋

学習グループ・生徒	高等部　総合サービス科１年　９名	指導者	中野　貴洋
年　間 目　標	(1)床面清掃や窓面清掃、トイレ清掃に必要な資機材の名称やその正しい使い方が分かる。(知) (2)清掃場所に応じて必要な資機材を準備し、効率よく安全に清掃する。(思) (3)資機材の用途や効果が分かり、校内清掃等において仕上がりの美しさを求めながら清掃する。(学)		

学期	題材名及び主な学習内容	主な目標	指導の記録	実施時数
前期	流通・サービスに関する仕事 ・流通・サービスの意味 ・流通・サービスに関する仕事 ・挨拶の励行と６Ｓ環境	・流通・サービスに関する仕事が身近な生活にあることを知る。 ・挨拶の励行、６Ｓ環境の意味を理解し日常に生かそうとする。	・流通・サービスに関する職場を知る機会として、これまでの卒業生の就職先パネルを参考に説明した。 ・挨拶の励行、６Ｓ環境について常に意識するよう、毎時間、声に出して確認する機会を設けた。 ・タオルを用いた清掃は固絞りの仕方を演示したり、机の形や数を毎回変更したりしながら繰り返し練習する機会を設けた。 ・ダストクロスやモップによる床面清掃は、安全に配慮するための持ち方や機材の取り付け方について理由を伝えながら、操作の手本を見せ、繰り返し練習する機会を設けた。 ・窓面清掃は、体の使い方を意識して清掃するよう、拭く回数や膝の使い方等を強調した手本を提示し、繰り返し練習する機会を設けた。 ・外部講師から専門的な技術とともに礼の仕方や仕事への取組等、態度面についても学ぶ機会を設けた。	予定時数 (70) 実施時数 (64)
	タオルの使い方 ・タオルの畳み方、絞り方 ・机等の拭き方	・タオルの正しい使い方を理解して、手順を守って効率よく机を拭き上げる。		
	ダストクロスによる床面清掃 ・用具の名称と機能 ・ダストクロスの使い方 ・床面の除塵方法	・必要な資機材の名称やその正しい使い方が分かる。 ・安全に配慮し、効率よく床面清掃をする。		
	窓面清掃 ・用具の名称と機能 ・ウォッシャー、ウィンドスクイジーの使い方 ・窓の位置や大きさに応じた清掃方法	・必要な資機材の名称やその正しい使い方が分かる。 ・安全に配慮し、手順を守って窓面清掃をする。		
	モップによる床面清掃 ・用具の名称と機能 ・モップの使い方 ・床面の拭き上げ方法	・必要な資機材の名称やその正しい使い方が分かる。 ・安全に配慮し、効率よく床面清掃をする。		
後期	自在ぼうきによる床面清掃 ・用具の名称と機能 ・自在ぼうきの使い方 ・床面の除塵方法	・必要な資機材の名称やその正しい使い方が分かる。 ・安全に配慮し、効率よく床面清掃をする。		予定時数 (70) 実施時数 (　)
	トイレ、洗面台清掃 ・用具、洗剤の名称と機能 ・清掃の方法と手順	・必要な用具、洗剤の名称やその正しい使い方が分かる ・安全に配慮し、手順を守って効率よくトイレ清掃をする。		
	掃除機によるカーペット清掃 ・掃除機の種類と機能 ・掃除機の使い方 ・カーペットの除塵方法	・準備方法や安全に配慮した正しい使い方が分かる。		
	ポリッシャーの使い方 ・用具の名称と機能 ・ポリッシャーの操作、留意点	・準備方法や安全に配慮した正しい使い方が分かる。		
	フロアスクイジーの使い方 ・用具の名称と機能 ・除水方法と片付け方 ・除水後の拭き上げ作業と仕上がり確認	・必要な資機材の名称やその正しい使い方が分かる。 ・安全に配慮し、効率よく床面清掃をする。		
通年	資機材の収納、保管	・資機材を扱いやすいよう、清掃機材室の整理整頓をする。		
評価				**年間総計** 予定時数 (140) 実施時数 (　)

年間指導計画及び指導記録

指導の形態	流通・サービスＡ（清掃）

記録者：　菊地　奈都子

学習グループ・生徒	高等部総合サービス科３年　４名	指導者	菊地　奈都子
年間目標	(1)清掃の目的や資機材の扱い方など、基礎的・基本的な知識や技術の向上を図り、指定された場所や状況に応じた適切な清掃方法で清掃する。（知） (2)清掃場所や清掃に用いる資機材に応じ、自分や周囲の安全や衛生、使う人の気持ちを考えながら清掃する。（思） (3)クルー内での役割を理解し、意思疎通を図りながら、効率よく清掃する。（学）		

学期	題材名及び主な学習内容	主な目標	指導の記録	実施時数
通年	【定期清掃】 校内清掃実習 ・廊下、階段床面清掃 ・食堂清掃 ・トイレ清掃 ・窓清掃 ・玄関清掃 ・事務所清掃 【外部清掃実習】 ・窓清掃 ・床面清掃 スーパー、保育園、児童館など 【特別清掃】 外部特別清掃実習 ・飲食店の床面ポリッシャー清掃 【校内特別清掃実習】 ・教室等床面のポリッシャー清掃 ・教室等床面の床面ワックス掛け	・時間内に割り当てられた箇所を清掃する。 ・作業指示書等を読み取り、準備物や手順を理解し、効率よく清掃する。 ・建築物の美観や衛生を保持できるよう、適切な清掃方法で状況に応じた清掃を行う。 ・周囲の安全に配慮し、危険がないよう環境を整えながら清掃する。 ・使用する洗剤の種類と性能や取扱い上の注意点を知り、安全に使用する。 ・「安全」「効率」「使う人の立場」を視点にして、よりよい清掃の方法を話し合う。 ・床維持剤や各種洗剤、溶剤の用途や使用上の留意点を理解し、清掃内容に応じて適切に用いる。 ・ポリッシャーの操作や床維持剤の塗布についての理解を深め、安全に適切な方法で清掃する。 ・安全と効率のために意思疎通を図りながら、協働作業する。	（前期） 【定期清掃】 ・校内清掃実習では、廊下やトイレなどの清掃、校舎外部の窓清掃などを行った。手順と、その手順で行う理由を確認する機会を設定した。 ・外部清掃実習は、コンビニや保育園などの窓清掃を中心に６月から行った。 【特別清掃】 ・校内特別清掃実習では、ポリッシャーの操作について繰り返し研修する機会を設定した。 ・ランチくりたのホール清掃では、安全を意識し、お互いに言葉を掛け合い、手順どおりに清掃した。	前期 予定時数 (280) 実施時数 (216) 後期 予定時数 (280) 実施時数 (　)
夏期	【車両清掃】 自家用車清掃 ・自家用車の洗車 ・車内清掃	・車両清掃で用いる資機材やその扱い方を覚える。 ・車両清掃における作業上の留意点や清掃手順を理解し、安全に気を付けながら効率よく清掃する。		
評価				年間総計 予定時数 (560) 実施時数 (　)

寄宿舎研究

寄宿舎研究

学んだことを自分の力として活用できる生徒の育成を目指した生活指導の実践
～生徒同士の学び合いや体験的な活動を通して～

１　テーマ設定理由

寄宿舎では、個々の実態に応じた個別の生活指導計画に基づいた日々の生活指導を基本としながら学習会などの機会を設定し、生活に関する知識の獲得や技術の向上を図ってきた。これまでに有効だった指導方法を生かしつつ、本校の特色ある教育活動である「地域学習」を取り入れた体験的な活動を活用しながら本研究に取り組むこととした。

昨年度までは、生徒同士の学び合いの場面として、学習会を中心に、主に洗濯から収納までに関する知識の獲得や技術のインプットとアウトプットをする機会を設けた。１年目は教えられる立場であった生徒が２年目は教える立場になり、積極的に学習会に参加する姿が見られた。「クリーニング教室」では、家族のためにアイロン掛けをして喜んでもらえた生徒が、その後の活動に意欲をもつ姿が見られた。

一方で、生徒が学んだことを言語化する機会が増えれば、より学びが定着するのではないかという反省があがった。

そこで今年度は、学んだことを振り返る場面を増やすとともに、他者に伝えたり教えたりする機会を充実させ、学んだことを般化させたり、より自分にあった方法を選んだりできるよう、本テーマを継続することとした。

２　研究仮説

生徒同士の学び合いや体験的な活動の積み重ねにより、生活技術に関する他者の考えや様々な場面における工夫を学ぶことができ、それらを活用していくことで、生活力の向上や学んだ知識を自分の力として活用できる生徒を育成することができるであろう。

３　取組の実際

（１） 生徒同士の学び合いの場面設定

①学習会、合同学習会

生徒の実態や希望に合わせ、ひげのそり方や整髪、汗の始末などに関する学習会を実施した。（写真１、２）学習会後に生徒から出た問いに対しては、掲示物を活用するなどして追指導を行い、学びが深まるようにした。男子の学習会では、ひげそりの基本を学んだ後、個別の生活指導計画で目標に取り上げた生徒もおり、日々の日課としてひげそりが定着した。生徒が学びたいと思っている内容を取り入れたり、生徒同士の相性や集団の大きさに配慮したグルーピングをしたりすることで、しっかり話を聞こうとする姿勢や集中力につながり、学びへの興味が

写真１　ひげそり後の確認方法を練習

写真２　汗拭きシートの表示を確認

深まった。

また、「学生時代の身だしなみ」がテーマの合同学習会では、大学生の寄宿舎宿直指導員に高校時代の写真を準備してもらい、当時どのように身だしなみに気を付けていたかを話してもらった。自分たちと同年代の頃の話に生徒たちも興味をもち、積極的に質問をする様子が見られた。（写真３）

公開研究会では、洗濯や身だしなみに関してそれぞれが頑張っていることを紹介し合う内容の学習会を実施した。（写真４）大曲支援学校教頭　北島英樹氏からは

・「身だしなみ」はお互い気持ちよく暮らすために最低限必要なこと。具体例を出した根気強い指導が必要である。

・外発的な動機付け、内発的な動機付けを、うまく組み合わせていくことが重要である。

との助言をいただいた。

写真３　男女合同学習会で宿直指導員から学ぶ

写真４　ワイシャツのアイロン掛けを披露

②実習振り返りシート

寄宿舎生活で学んだことの定着、般化を図るため「振り返りシート」を作成し、現場実習後の生徒に、実習期間中の身だしなみに関する振り返りを行った。また、前期実習の振り返りを生かすため、後期実習前に対象生徒と部屋担当とで話をする時間を設けた。洗濯された清潔な作業着を身に付けるよう意識するようになった生徒や、下級生の生活の様子を見て、自身の体験を基に、現場実習へ行く際の心構えをアドバイスしている生徒も見られた。

③自治会活動

寄宿舎の自治会である「青空会」の後期生活目標が「衣服の調整をし、健康に気を付けて生活しよう」となり、月１回行われる室会では、具体的にどんなことを頑張るか、自分の取組はどうだったかなどが話し合われた。生活目標に対する振り返りでは、「寒さ対策として暖かいコートを着たり、帽子をかぶったりした」などの発言があり、季節に応じた身だしなみに気を付けようとする様子が見られた。

（２） 地域資源の活用を含めた体験的な活動の場面設定

①クリーニング教室

長年交流活動として行っている「クリーニング教室」では、生徒全員が体験できるよう、教

えていただく内容を靴下やワイシャツの下洗いとした。（写真５、６）また、食べこぼし汚れの落とし方について疑問をもった生徒がおり、後日に礼状を届けに店舗へ行った際に店主へ質問して返答をいただいた後、実践の機会を設けた。（写真７）台所洗剤を使用した下洗いの有無で、洗い上がりに違いが出ることを実感していた。クリーニング教室で使用した洗濯ブラシを洗濯場に置いたところ、靴下やワイシャツ以外の衣類への使用を試している生徒もいた。

写真５　専門家による靴下の下洗い実演

写真６　ワイシャツの襟洗い

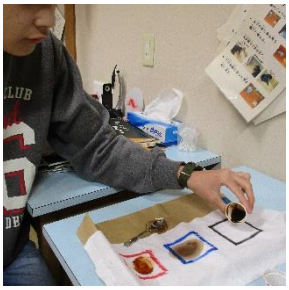


写真７　油汚れの落とし方実験

②卒業生と語る会

卒業生より現在の生活について話を聞く機会を設けた。（写真８）生徒からは、「出勤時にどんな服装をしているのか」などの質問が出ており、「身だしなみに気を付けて現場実習を頑張りたい」との感想が聞かれた。卒業後をイメージし、今取り組むべきことを考える機会となった。

③他校とのオンライン交流

今年度４年目となったゆり支援学校との交流では、寄宿舎生活での洗濯干しや衣類整理などについて、自分が頑張っていることを言葉や動画で紹介した。（写真９）ゆり支援学校の生徒からは、「洗濯物をきれいに干すこつを教えてください」などの質問があり、自分が工夫していることを返答していた。生徒からは、「楽しかった。また交流したい」「今度は、上手に髪を結んでいるところを見せたい」との感想が聞かれた。面識のない人へ、自分の取組や考えを言語化して伝えたことが生徒の自信につながり、人と関わる楽しさを感じた様子だった。

写真８　卒業生と語る会

写真９　オンライン交流

（３）　より密な学部・保護者との連携

①付箋紙の活用

昨年度までは、舎監から生徒へ、称賛や励ましのメッセージを付箋紙に記入してもらっていた。今年度は、付箋紙がより多くの生徒の励みになるよう、寄宿舎指導員や寄宿舎宿直指導員

も記入することとした。付箋紙の掲示場所は各棟から、男女の共有スペースであるプレイルームに変更した。また、生徒一人ずつにファイルを準備し、一昨年度の付箋紙から全てを掲示し、それぞれの成長が分かるようにした。（写真１１）特に自分一人に向けられたメッセージには特別感があり、見入って喜んでいる様子や、新しい付箋紙が貼られていないかを確認する様子が見られ、生徒に自信をもたせたり、意欲を高めたりするのに有効であった。また、室会でそれぞれのファイルを持ち寄り、お互いの頑張りを見合う機会を設けたり、付箋紙の内容を要約したものを各家庭に配付したりした。

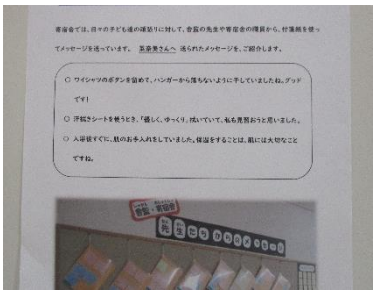


写真 10 付箋紙を要約し家庭に配付

写真 11 ファイリングされた付箋紙

写真 12 付箋紙を読む生徒

②指導ツールの作成

管理職や学部主事の声を基にした「身だしなみ」に関する指導ツールを作成し、プレイルームに掲示した。（写真１５）身だしなみを整えるために使用しているグッズの写真を見て、実際に購入してきたり、「自分の物と同じだ」と喜んだりしている生徒も見られ、身だしなみを整えることへの意識の高まりが見られた。

写真 13 管理職にインタビュー

写真 14 指導ツールの作成

写真 15 プレイルームの掲示

③授業参観

学校の研究授業や授業者実践研修の参観を通して寄宿舎生の授業での様子を知り、より多角的な実態把握、指導方法の共有に努めた。授業が参観できなかったときは、指導案を回覧したり撮影した動画を視聴したりするなどの方法を取った。参観後は、授業を通して見えた生徒の実態や変容、感じたことなどをまとめ、寄宿舎職員全体で共有した。授業を参観することで寄宿舎では見られない一面を知り、生徒への理解がより深まり、学舎での指導方法の共有につなげることができた。

④寄宿舎通信の発行、ホームページの活用

学習会やクリーニング教室などの様子を寄宿舎通信へ掲載することを継続し、併せてホームページを活用することで寄宿舎での様子を広く発信するようにした。また、保護者が来舎する

寄宿舎ＰＴＡを活用して学習会の様子を撮影した動画を視聴してもらい、家庭での取組につながるように働き掛けた。

（４） 寄宿舎研究会を活用した指導の振り返り機会の設定

①生徒の変容を確認する場面の拡大

昨年度まで行ってきた洗濯に関わる一連の指導を、その先にある「身だしなみを整えること」まで場面を広げ、抽出生徒だけではなく、生徒一人一人が、学習会などの学び合いの中でどのように変容しているのかについて話し合う時間を設けた。

②生活記録の活用

日々の生活の様子や個別の生活指導目標の指導経過について記録している「生活記録」の中の「身だしなみを整えること」に関する記述に赤丸を付けることとした。また、改めて記録に目を通し振り返る時間を設けたことで、生徒の変容や指導のタイミングをつかみやすくなった。

【記入例】　　生徒名（　○○　○○　）

個別の目標に関する今週の指導のポイント	
①　例）ワイシャツのアイロン掛けの仕方を覚える。	
②　例）自室の掃除機掛けの仕方を覚える。	
その他（日常生活での共通理解事項、家庭からの連絡・お願い等）	
例）・○○さんとの関わり方、様子を見てください。 例）・水曜日の下校後、耳鼻科通院です。	
月／日（曜）	**生活の様子　　※個別の記録は青丸を付ける**
○／○（月）	・点呼後、明日着用予定のワイシャツにアイロン掛けをする。左手で身頃を引っ張りながら、ゆっくり慎重にアイロンを動かしていた。
○／○（火）	・登校前の身支度の際、二つに結んだ髪の高さがそろっているか、職員に確認を求める様子が見られた。

図１　職員の指導と生徒の変容をより捉えやすくする「生活記録」

③学習会の内容の立案と振り返り

生徒の実態や変容を確認し合いながら、各棟で行っている学習会（男子～スタイリッシュゼミ、女子～レディースデー）の内容の立案を行った。また、学習会に参加できなかった職員も、職員の指導方法や生徒の様子を自分の目で確かめることができるように、学習会の様子を動画に収め視聴の機会を設けた。

④寄宿舎宿直指導員との連携

寄宿舎宿直指導員に対してアンケートを実施し、生徒の成長が感じられたエピソードや、指導で困っていることや疑問に感じていることを挙げてもらい、寄宿舎指導員で話し合い、返答をし、指導の連携を図った。

〇洗濯や身だしなみに関する指導で、疑問に感じていることや困っていること（一部抜粋）

Q身だしなみに関する指導で、生徒の髪型が乱れているように見え、そのことを伝えても本人が満足している場合にどうしたらよいか。（宿直指導員より）

↓

A学校生活にふさわしい髪型と、余暇なら許容される髪型の違いを視覚的に示す、合わせ鏡の使い方を教えるなどの指導方法を考えます。（寄宿舎指導員より）

4　まとめ（成果とこれからに向けて）

（１） 生徒の関心や新たな気付きを取り入れた学習会や体験活動

寄宿舎宿直指導員の協力を得て実施した合同学習会では、生徒が関心をもって参加しており、改めて何を学ぶのかだけではなく誰と学ぶのかも大切であることを感じた。また、「クリーニング教室」のような、見聞きするだけではない実体験が、次の学びのきっかけや気付きにつながると感じた。基本的な日常生活指導をベースとしながらも、生徒が興味関心をもって学びたいと考えている内容や、生徒の気付きから発展させた学びの場を繰り返し設定していくことが、学んだことを活用できる力につながると感じた。

（２） 生徒の変容やタイミングを逃さない指導体制

日々の「生活記録」の記述に印を付け、担当同士や複数の職員で生徒への指導を振り返る時間をもったところ、「生活記録」には、担当職員に限らず指導に当たった職員の多角的な視点からの生徒の見取りが記載されていた。生徒の実態や変容を捉え、今必要な指導が分かる貴重な記録であると改めて感じた。今後も、生徒の学びが続いていくように、記録を基にした職員の連携、指導をつなげていくことを大切にしていきたい。

抽出生徒Ａへの手立てと変容　　**資料１**

高２　Ａ

去年は洗濯物の干し方で気を付けることや、衣類の畳み方と見やすい収納の仕方について勉強したよ。今年は身だしなみについて勉強したけれど、去年覚えたことが役に立ったよ。

実　態	・生活経験が乏しいが、教えたことに対する理解は早い。慣れてくると面倒くさがる場面が増えてしまうため、覚えたことやできることの継続が難しい。
目　標	・清潔感のある身だしなみについて、自分を客観視できる。
手立て	・学習会等を通し、清潔感のある身だしなみについての知識の習得や拡充を目指す。 ・学んだことや、自分の身だしなみを振り返る機会を設けていくことで、清潔感のある身だしなみができているかどうか、自分を客観視できる力を育てる。

生徒同士の学び合い

スタイリッシュ・ゼミ

男子学習会で、汗をかいたまま拭き取らずにいて、周りを不快にさせてしまう人を職員が演じた動画を見せた。その場での本人からの意見はなかったが、友達の「そのままにしているのは気持ち悪い」との意見に耳を傾けている様子があった。

体験的な活動

本人の疑問と学びの実践

「服についた食べこぼし汚れはどうすればよいか」と本人から質問があり、「食べ物の汚れには食器用洗剤が有効」と、クリーニング教室で学んだことを実践する機会を設け、下洗いの有効性を検証することができた。

学部・保護者との連携

現場実習と振り返りシート

「身だしなみを整えることも実習の一環」として、しわのない衣類の着用、整髪を意識できる指導の必要性を学部と確認した。また、実習振り返りシートを作成し、よかった点や課題点を本人と振り返る機会を設け、学部や保護者と内容を共有した。

変　容	・現場実習に出る際、鏡を見てくしで髪を整えたり、衣類がしわにならないように丁寧に畳んだりする姿が見られた。「汗をかいたままにしていると気持ち悪い」と話し、家庭から汗拭きシートを持参して実習先へ持って行く姿も見られるようになった。 ・サッカーの大会後に自力帰省する際、汗拭きシートで体を拭いてから制服に着替えていた。「汗でベタベタしたままバスとか電車に乗るのは変だから」と話しており、周りへの配慮や、自分の身だしなみが周りからどう思われるのか客観的に考えることができるようになってきた。清潔感だけでなく、「周りを不快にさせない」ことを意識できるようになったことは大きな変化だった。

抽出生徒Ｂへの手立てと変容　　**資料２**

去年は、先生や上級生から、洗濯干しや衣類整理の仕方を教えてもらったよ。

高２　Ｂ

実　態	・入舎２年目。好奇心旺盛で、友達と一緒に活動することを好む。季節に合わせた衣服の調整が苦手である。
目　標	・気温や季節に合わせた衣服を選んで着用する。
手立て	・気温や季節に合わせた衣服を着ることで、健康な生活や病気の予防ができることを説明する。 ・迷ったときは他の人の服装を参考にして判断することを確認する。

生徒同士の学び合い

レディースデー

「衣類整理」をテーマとした女子学習会では、友達に自身の衣類整理の仕方を紹介した。その後、同室の下級生を誘って一緒に衣類整理をする様子が見られた。

体験的な活動

クリーニング教室

昨年度は、母のハンカチにアイロンを掛ける体験をし、今年度は、泥汚れのついた靴下の下洗いをすることに挑戦した。講師への礼状書きも張り切って行い「洗濯ブラシを使ったことが楽しかった」と感想を述べていた。

学部・保護者との連携

汗拭きシートの活用

学部ＰＴＡで話題に出た汗拭きシートを保護者が準備してくれ、自宅やデイサービスで使い方の練習をした。学部、寄宿舎、保護者とで連絡を取り合い、通学リュックに汗拭きシートを携帯し、着替えの時間などに使用することとした。

変　容	・昨年度は、洗濯から収納までの一連の手順を職員に教えてもらったり、同室の上級生の様子を見てまねをしたりすることが多かったが、効率よく作業をするためにはどうしたらよいか、自分なりに考えて工夫したり、同室の下級生にアドバイスをしたりする様子が見られるようになった。 ・肌寒い時期には、カーディガンを重ね着するなど、気温や季節に合わせて衣服を自分から調整するようになった。また、悩んだときには職員に相談する様子も見られている。室会で寄宿舎自治会である「青空会」の生活目標「衣服の調整をし、健康に気を付けて生活しよう」の反省を尋ねると、「フリースを着て、風邪をひかないように気を付けました」と答えていた。

資　料

・　研究のあゆみ

研究のあゆみ

昭和　56 年度	生活単元学習、遊びの学習
57 年度	合同遊び、作業学習
58 年度	日常生活の指導、作業学習
59 年度	日常生活の指導、作業学習
60 年度	ことば（国語）・かず（数学）の要素表の作成
61 年度	ことば（国語）・かず（数学）の年間指導計画の作成、自作教具集の作成
62 年度	音楽・図工・美術・体育
63 年度	養護・訓練

児童生徒の障害の重度化・多様化に伴い、これまでの指導内容や方法だけでは子どもたちの発達要求に十分応えることができないという状況が多く見られるようになってきた。また、基礎集団としての学級での指導を基本としながらも、子どもたちの発達段階と各教科の課題を考慮しつつ、「質」と「量」の違う複数の集団での活動を保障しながら「個」への配慮が必要だという意見が出るようになった。このことから平成元年度に研究テーマを設定し、「個別学習」についての研究・実践を進めた。

これが、「研究くりた」の始まりである。

「研究くりた」　研究主題

平成　元年度	個々の発達課題に即した指導の内容と方法に関する研究 ～一人ひとりを生かす指導の形態と個別指導のあり方～
２～３年度	個々の発達課題に即した指導の内容と方法に関する研究 ～一人ひとりを生かす指導のあり方～
４～７年度	個々の発達課題に即した指導の内容と方法に関する研究
８～10 年度	生き生きと豊かに生活していく力を育てるために ～日常生活の指導の実践をとおして～
11～12 年度	「生活する力」を育てる指導実践　～生活単元学習を中心として～
13～15 年度	個別の指導計画の効果的な活用　～よりよい授業づくりを目指して～
16 年度	障害の特性に応じた指導の在り方 ～専門性の向上及び環境の整備を軸に児童生徒の伸長を目指す～
17～18 年度	障害の特性に応じた指導の在り方 ～自閉性障害の障害特性に適切に対応した教育内容・方法の充実を目指して～
19～20 年度	一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくりを目指して ～４つの観点（主体性、知識・技能、生活への般化、社会性）から～
21～22 年度	一人一人の願いを生かした授業づくり
23～24 年度	一人一人の自立と社会参加を目指した一貫性のある指導の在り方 ～働く意欲を育てる授業づくりを通して～
25～26 年度	自立と社会参加を目指して、主体的に学習する姿を求めた授業づくり ～「考える」「活かす」に焦点を当てて～
27～28 年度	自分のよさに気付き、もてる力を発揮できる児童生徒を育てる授業づくり
29～30 年度	「合わせた指導」の基本を徹底した授業づくり ～「授業改善プロジェクト」の検証と成果を踏まえて～
令和元～２年度	児童生徒が学びを実感できる授業づくり ～学ぶ姿に着目した授業研究を通して～（元年度） ～単元・題材の構成及び配列の工夫・改善を通して～（２年度）
３年度	一人一人の学びに応じた教育課程の工夫・改善＜１年計画＞ ～学んだことを活用・発揮できる児童生徒の育成を目指した授業づくりを通して～
４～６年度	自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり＜３年計画＞ ～協働的な学びの充実を通して～（４・５年度のみ）

おわりに

３か年計画で取り組んできた「自ら学び続ける子ども」の育成をキーワードとした研究が終了しました。

昨年度までの研究では、１年目に「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイント」を各学部の実践からまとめ、２年目以降の授業実践、授業研究の中で活用してきました。また、この活用の過程で「自ら学び続ける子ども」の具体的な姿と授業における児童生徒のねらいとのつながりを明確にすることができ、そのための教師同士の対話を通じた授業づくりの在り方を工夫してきました。

最終年度となった今年度は、各学部で目指す「自ら学び続ける子ども」の姿を研究のサブテーマとして掲げ、児童生徒の学びの過程を大切にした授業づくりに取り組みました。全校授業研究会や学部授業研究会、公開研究会に向けた事前検討では、研究部が中心となり、話合いのメンバーや内容を整理して段階的に検討を重ね、事後の授業研究会では「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくりのポイント」を活用してポイントを絞った協議を行いました。これにより「自ら学び続ける子ども」の育成に向けた各学部の授業づくりのポイントが明らかになり、全校のつながりを確認することができました。また、授業づくりに必要な視点を整理する中で、「学びの必然性」と「学びによる達成感」が重要であること、土台として「多角的な視点から捉えた児童生徒理解」が大切であることを全校で共有できたことも大きな成果だったと考えます。

12 月には公開研究会を開催し、研究成果報告や授業提示のほか、「自ら学び続ける子どもを育てる授業づくり」をテーマとしたシンポジウムを行いました。指導助言並びにシンポジストの先生方、御参加いただいた皆様から、この研究に対する御意見のほか、今後の本校の取組を考える上で示唆に富んだ多くの御意見をいただきました。改めてお礼を申し上げます。

今年度も昨年度に引き続き、研究成果は本研究紀要にまとめたほか、研究概要としてリーフレット版を発行しています。より分かりやすく見やすい形で内容をまとめることを心掛けました。併せて御覧いただき、御意見、御感想をお寄せいただきますようお願いいたします。

最後に、本校の研究推進に対し、御指導御助言をくださった全ての皆様に心から感謝申し上げますともに、今後も変わらず御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、巻末の御挨拶といたします。

副校長　神部　守

研　究　同　人

校　長　佐々木孝紀　　副校長　神部　守　　教　頭　田中　紀和　　飯塚　正純
事務長　小野　弘美　　教諭（兼）教育専門監　牧野　幸枝　　研究主任　杉渕　陽子

小学部

齊藤　舞子	京屋　庸子	宮野佳代子	藤原　真美	石川　　瞳	大野　　藍
畑　美貴子	大山万里子	茂内　みき	山田瀬里奈	照井真理子	首藤　真理
齋藤　彩夏	堀田　聡弥	大塚亜紀子	田中　亜希	柳田　智子	藤原　淳一
小嶋美智子	田口　智子	篠田るり子	菅原　智子	会場　友美	梅田　季和
秋元　仁美	鷲谷　武彦	永井　純子	臼井　道和	高橋　　遥	筒井　　仁
海道　史子	佐藤　　緑	久慈由起子	齋藤美奈子	冨岡　雅江	佐々木千春
工藤裕美子	田村　　優	髙橋麻依子	岩谷　　桜	渡邊将太朗	工藤　由紀
佐々木里恵子	藤原　　忍				

中学部

黒澤　正子	照井真紀子	目黒　雄悦	大島　由紀	熊谷理香子	工藤　　彩
和泉　　緑	二階堂　悟	髙橋ひな子	小林　　哲	髙橋　裕子	小野　　格
原田もとよ	菊池　良一	杉渕　陽子	五十嵐智子	柿﨑　和恵	葛西亜樹子
大友　　信	村上世生子	佐藤　聖哉	高橋　陽子	渡部　　恵	長谷部優子
武藤美和子	三浦　　弥	柴田　壮紀	安藤　真貴	森本　芹果	

高等部

【普通科】

菊地　　武	加藤有美子	鈴木　　崇	渋谷　真二	伊藤　俊彦	播摩友紀子
大友　祥子	相澤　　晶	市川奈津子	小田野　陵	大滝　佳奈	鈴木　暁子
小川　華佳	佐藤　洋子	千葉　隆之	佐藤　美幸	中村　堅一	熊地ゆうき
津嶋　孔明	加藤真理子	信太真喜子	伊藤　貴浩	門間　陽子	菅原　文彦
鈴木　英揚	沖口　祥子	小林　朋子	大沢　快盛	後藤真紀子	笹渕　幸廣
佐藤　雅子	櫻庭ひかり	松田　珠実	長谷川舞子	熊谷　　彩	能登屋　弥
大山　　等	成田　ゆか				

【総合サービス科】

伊藤　　学	中野　貴洋	加藤真依子	館山　　柊	藤井　優香	田近礼津子
竹場　久美	泉　　良昌	菊地奈都子	長谷川節子	近藤　文晴	

寄宿舎

佐藤　明子	佐藤　光子	坂本　香織	菅原ルリ子	岩澤　佑一	佐々木晶子
藤田志穂子	花田　　滝	荻原　雅子	渡會　妙子	堀江　千里	保坂　康子
千葉　　仁	宇佐美啓介				

令和６年度　研究 くりた

発 行 年 月　令和７年３月発行
発　行　所　秋田県立栗田支援学校
〒010－1621　秋田市新屋栗田町 10－10
ＴＥＬ　018－828－1162
018－888－8171（第２校舎）
018－828－1170（寄宿舎）
ＦＡＸ　018－828－4720
ホームページ　http://www.kurita-s.akita-pref.ed.jp/
メールアドレス　kurita-s@akita-pref.ed.jp